宇久町文化財調査報告書　第４集

# 宇久松原遺跡

1997

宇久町教育委員会

宇久町文化財調査報告書　第４集

# 宇久松原遺跡

1997

宇久町教育委員会

# 発刊にあたって

このたび平成８年度の国庫補助を受けて実施しました，宇久町平郷にあります宇久松原遺跡の発掘調査報告書を刊行することになりました。

宇久松原遺跡は，宇久町の表玄関にあたる平郷松原の砂丘に営まれた弥生時代の墓地であり，過去に数度の発掘調査が行われており，つとに著名な遺跡であります。

今回の調査によって，縄文時代晩期に大陸から稲作とともに伝来した支石墓や土壙などの貴重な遺構と埋葬された人骨が出土しました。またそれらの墓に供献された小形土器のなかには他の遺跡に例を見ないものがありました。このように宇久松原遺跡は，縄文時代から弥生時代への過渡期の時期における重要な遺跡として，その学術的な価値がますます高いものとなりました。

最後になりましたが猛暑の中，今回の調査にあたられた県教育委員会文化課をはじめ，長崎大学医学部解剖学第二教室の分部哲秋・佐伯和信両先生，調査に従事された作業員の方々のご協力に深く感謝いたします。

本書が，宇久町の文化財の保存・顕彰および地域の学習資料として，活用いただければ望外の喜びとするところです。

平成９年３月31日

宇久町教育委員会
教育長　　中　野　弥　平

# 例　　言

1．本書は，長崎県北松浦郡宇久町平郷松原に所在する宇久松原（うくまつばら）遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，平成７年３月の範囲確認調査の結果支石墓２基を検出したことから，事態を重視した宇久町教育委員会が国庫補助事業をうけて，平成８年７月15日～８月９日に実施した。

3．平成７年３月の範囲確認調査は長崎県文化課埋蔵文化財班係長安楽勉（現原の辻遺跡調査事務所課長）が担当した。

4．調査は，宇久町教育委員会が主体となり，長崎県教育庁文化課が実施した。調査組織は本文中に記した。

5．遺跡は松原遺跡と呼称されることもあったが，本書では宇久松原遺跡と表記する。

6．九州大学文学部西谷正教授には猛暑のなか現地指導をいただいた。

7．人骨については，現地での実測・取り上げを長崎大学医学部解剖学第二教室分部哲秋・佐伯和信両氏にお願いした。また佐伯・分部氏・長島聖司教授からは人骨に関する玉稿を賜った。

8．報告書要旨のハングル訳は，女子聖学院短期大学講師中山清隆氏および李タウン氏にお願いした。

9．遺構の実測は，高野晋司・中山清隆・塩塚浩一・大庭孝夫がおこなった。

10．遺物の実測にあたっては，古門雅高・塩塚浩一・川脇いつ子・森崎京子・荒木美保・網谷泰代の協力を得た。遺構・遺物の製図は，斉藤いづみと川道寛がおこなった。

11．本書の写真は，調査中のものは川道寛が，遺物については新野貴昌が撮影した。

12．調査および本書の作成にあたって次の方々より御協力と御教示をうけた。記して謝意を表する。
西谷正（九州大学文学部教授），木下尚子（熊本大学文学部助教授），橋口達也（福岡県教育庁），下川達彌（長崎県教育庁），片岡宏治（福岡県小郡市埋蔵文化財調査センター），藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館），宮崎貴夫（原の辻遺跡調査事務所），分部哲秋・佐伯和信（長崎大学医学部解剖学第二教室），中島真澄（宇久町立神浦中学校長），隅　康隆（長崎県文化財保護指導委員），瀬尾泰平，中山清隆，古門雅高，大庭孝夫，地権者　尼崎祐之助・田中　ヨネ

13．報告書の執筆・編集は，川道　寛がおこなった。

# 本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の経緯と方法
第１節　調査の経緯……1
第２節　調査の方法……1
第Ⅱ章　層位と遺構
第１節　層　　位……3
第２節　遺　　構
(1)　支 石 墓……4
(2)　壺 棺 墓……8
(3)　土 壙 墓……8
第Ⅲ章　出土遺物
(1)　包含層出土の土器……10
(2)　包含層出土の石器……12
(3)　供献土器……13
(4)　１号支石墓の下部構造の壺……15
(5)　甕棺（壺棺）……16
(6)　貝　　輪……17
第Ⅳ章　総　括
第１節 長崎県における支石墓研究の現状と課題
(1)　長崎県支石墓研究史抄……18
(2)　長崎県における支石墓のあり方……19
(3)　各地の支石墓のあり方……20
(4)　宇久松原遺跡の支石墓のあり方……22
第２節 宇久松原遺跡の位置づけ
(1)　宇久松原遺跡支石墓の年代観の変遷……23
(2)　宇久松原遺跡編年的位置……23
(3)　宇久松原遺跡支石墓の出自と系譜……26
(4)　宇久松原遺跡の墓域の推移……28
第Ⅴ章　総　　括
(1)　ま と め……30
(2)　ま と め（ハングル版）……31

# 挿　図　目　次

第１図　調査区配置図……2
第２図　土 層 図……3
第３図　遺構配置図……5
第４図　１～３号支石墓実測図……6
第５図　４・５号支石墓実測図……7
第６図　６号支石墓実測図……8
第７図　土壙墓から検出された人骨……9
第８図　３号土壙墓実測図……9
第９図　包含層出土の土器……10
第10図　包含層出土の石器……12
第11図　供献土器実測図……14
第12図　第１号支石墓の壺棺実測図……16
第13図　１・２号壺棺実測図……16
第14図　１号土壙墓人骨の貝輪……17
第15図　支石墓遺跡の分布図……20
第16図　各遺跡出土の大形壺……24
第17図　大形壺の形状比較……25
第18図　宇久松原遺跡の遺構垂直分布……28
第19図　宇久松原遺跡の時期別遺構分布図……29

# 表　目　次

第１表　土器計測表……11
第２表　石器遺物計測表……13
第３表　支石墓遺跡地名表……21
第４表　大形壺計測表……24

# 図　版　目　次

図版１　遺跡遠景・遺跡見学会・北壁土層断面……37
図版２　１号支石墓・２号支石墓……38
図版３　３号・４号・５号支石墓……39
図版４　６号支石墓と３号土壙墓……40
図版５　包含層出土の土器……41
図版６　包含層出土の石器……42
図版７　供献土器……43
図版８　１・２号土壙墓の人骨，１号支石墓の壺棺，１号壺棺……44
図版９　昭和初期の宇久松原……45

# 付　編　長崎県五島列島宇久松原遺跡出土の縄文・弥生時代移行期人骨

はじめに……47
資料・方法……47
人骨の所見……48
考　　察　　－宇久松原人の形態的特徴－
　1．土壙墓出土の人骨……53
　2．支石墓出土の人骨……57

## 挿　図　目　次

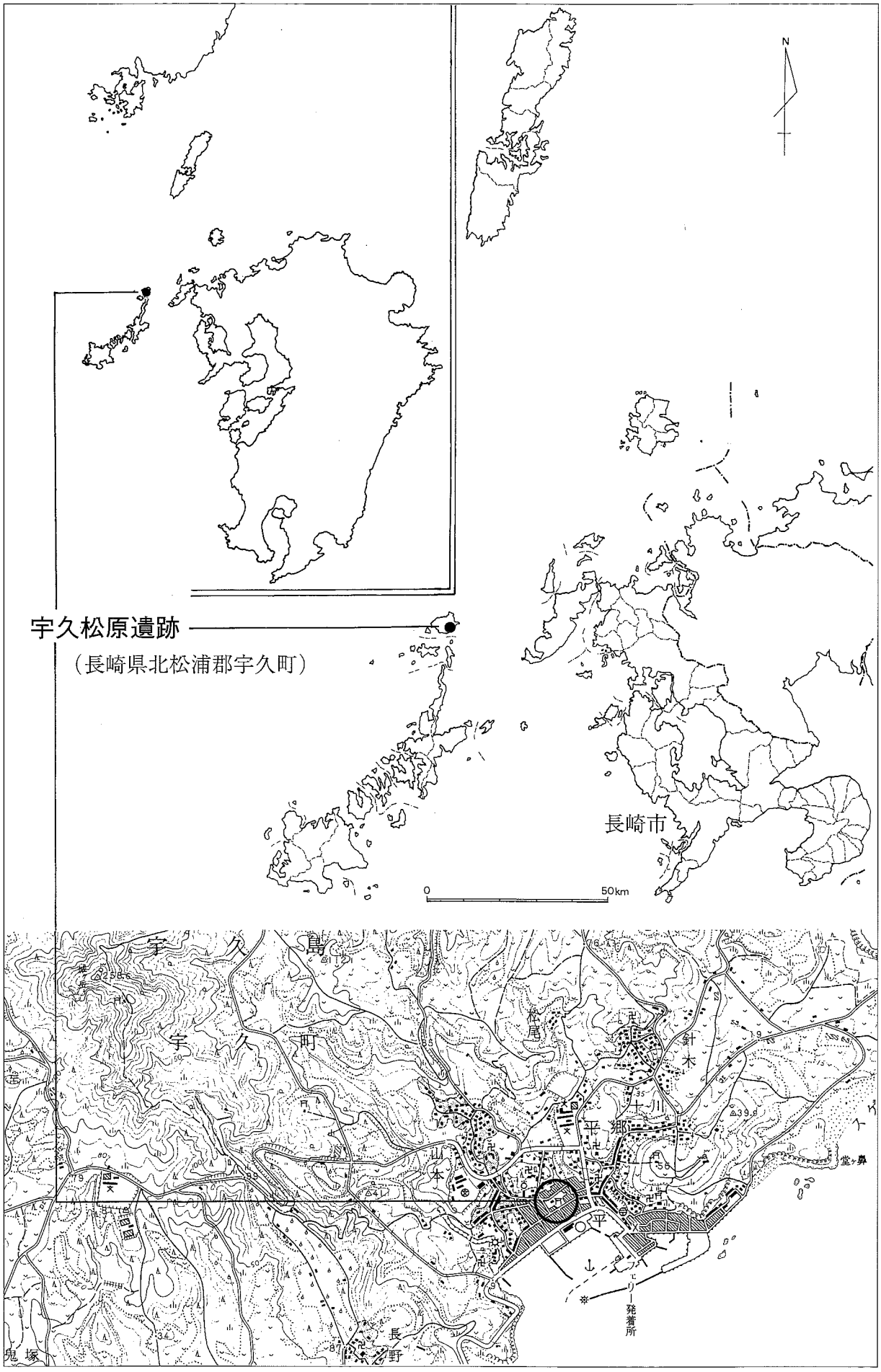
第1図　遺跡の位置……48
第2図　人骨の遺存部位①……49
第3図　人骨の遺存部位②……51
第4図　人骨の遺存部位③……52
第5図　津雲縄文人を基線とした偏差折線……54
第6図　西北九州現代人を基線とした偏差折線……56
第7図　宇久松原人からのPENROSEの形態距離（12項目）……57
第8図　PENROSEの形態距離に基づく主座標分析……57

## 表　目　次

第1表　出土人骨一覧……48
第2表　主要脳頭蓋計測値の比較（女性）……53
第3表　主要顔面頭蓋計測値の比較（女性）……54
第4表　主要四肢骨計測値の比較（女性，右側）……55
第5表　推定身長値の比較（女性）……56
第6表　脳頭蓋計測値……60
第7表　顔面頭蓋計測値……60
第8表　下顎骨計測値……60
第9表　顔面平坦度計測値……60
第10表　上肢帯骨計測値……61
第11表　上腕骨計測値……61
第12表　橈骨計測値……61
第13表　尺骨計測値……61
第14表　大腿骨計測値……62
第15表　脛骨計測値……62
第16表　腓骨計測値……63
第17表　膝蓋骨計測値……63
第18表　推定身長値……63
第19表　頭蓋非計測的形質の出現状態……63

## 図　版　目　次

図版1　1号土壙墓人骨・2号土壙墓人骨の頭骨……66
図版2　1号土壙墓人骨・2号土壙墓人骨の四肢骨……67
図版3　3号土壙墓人骨，4号支石墓人骨・5号支石墓人骨……68




遺跡位置図

# 第Ⅰ章　調査の経緯と方法

## 第１節　調査の経緯

宇久松原遺跡が世に知られるようになったのは土地の古老から「1872（明治５）年７月，畑の下50cm程から，大きさ一畳ほどの平石一枚を掘り起こした。その下には四個の石塊がほぼ矩形状におかれ，その下を更に掘ると，伸長された人骨と剣が現れた」という話を聞き取った桑山龍進がそれを支石墓と認識し，1962（昭和37）年の日本考古学協会の総会で発表したことに端を発する。

その後，1967・68（昭和42・43）年の２年にわたって五島列島の考古学・人類学的な発掘調査が別府大学・長崎大学によって実施された。宇久松原遺跡もその調査の一環として1968年度に調査された。調査は神島神社の境内に２箇所，神社西側の宅地に２箇所の計４トレンチを設定して実施した。その結果，明治５年に再埋葬されたという人骨を確認するとともに，無支石の支石墓１基と石棺墓２基，カメ棺墓７基，土壙墓１基とそれに伴う人骨11体を検出した（小田1970）。

1977（昭和52）年には神島神社の社殿建て替えの基礎工事に伴う緊急発掘調査が長崎県教育委員会によって実施された。この調査では石棺墓３基，カメ棺墓20基，石蓋土壙墓２基，土壙墓２基を検出した。人骨は成人11体，幼・小児12体の計23体であった（宮崎1983）。

1994（平成６）年には長崎県教育委員会による重要遺跡範囲確認調査が行われた。調査は２×２ｍの試掘壙を神島神社を中心に広い範囲にわたって設定し遺跡の広がりを追求した。新たな支石墓の確認はなかったが，神社付近の試掘壙から縄文時代晩期の包含層が確認された（本田1996）。

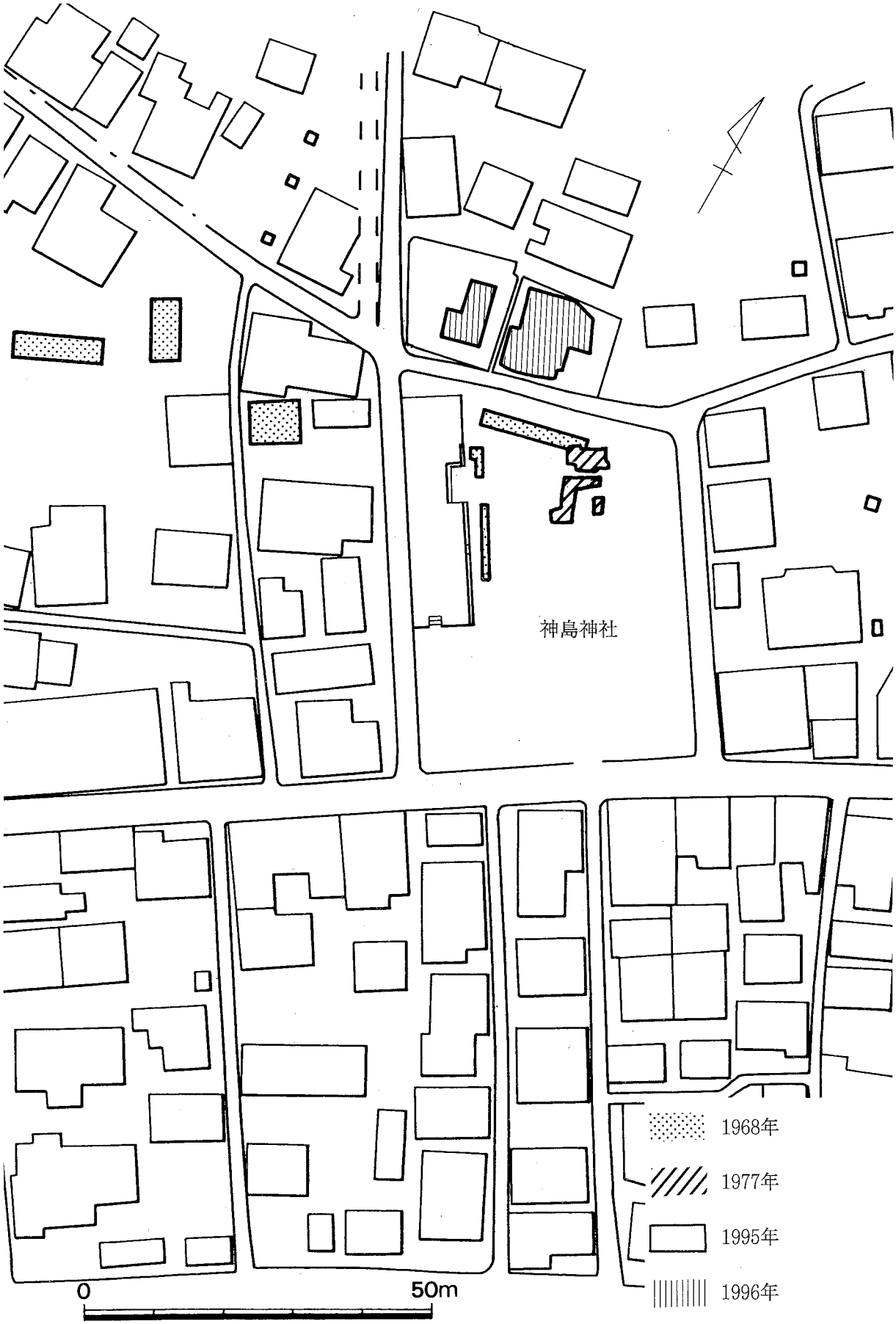
## 第２節　調査の方法

平成６年に火災により焼失した個人住宅建設に先立ち，長崎県教育委員会は宇久町教育委員会の依頼を受けて平成７年３月に小規模な範囲確認調査を実施した。その結果，神社に近い道路側のトレンチから２基の支石墓が確認された。町教育委員会は事態を重視し，個人住宅の宅地300m²について国庫補助を受け，平成８年７月15日～８月９日に発掘調査を実施した。

調査は東側の宅地をＡ区，西側をＢ区とし，前年に２基の支石墓が確認されていたＡ区側から調査を始めた。Ａ区では排土の関係から３ｍの幅で北側12m，東側に７ｍのＬ字形のトレンチを設定し，確認されていた支石墓の検出を急ぐとともに，それ以外の遺構の検出に努めた。その結果，Ａ区の道路側には予想以上の遺構が集中して存在することが明らかになった。支石墓５基，土壙墓２基，板石で囲った土壙墓１基が狭い範囲に密集して存在するものの，それらが切り合うことはなかった。また供献された小形土器やアワビ貝なども出土した。この区の遺構からは人骨も数多く検出されている。特に土壙墓の２体の成人女性人骨は保存状態が良好で，ともに風習的な抜歯が施されていた。

Ｂ区は，Ａ区側の状況から推測して遺構ももっと集中するものと思われたが空白域が広がっていることが確認された。この調査区からは支石墓１基と甕棺墓（壺棺）１基および土壙墓１基の検出だけにとどまり，この支石墓には成人男性が埋葬されていた。Ａ区の人骨がすべて女性であったことを考慮すれば，この支石墓のもつ特異性が際立ってくる。

調査は予想を超える排土に悩まされ，終盤では重機と大型トラックによって一時的に土砂を運び出すという手段によって当初の目的の調査を達成することができた。調査のために尽力された宇久町教育委員会の方々，現地指導をお願いした九州大学教授西谷正先生，人骨の取り上げに来跡され，相次ぐ人骨の出土のためについには調査終了までご面倒をおかけした長崎大学医学部解剖学第二教室の分部・佐伯両先生，足繁く遺跡にお越しいただきご助言を賜った瀬尾，隅両先生や神浦中学校長中島真澄先生など，多くの方々の援助をえてこのような成果をあげえたものと今更ながら感謝しております。




第１図　調査区配置図

調査関係者

【宇久町教育委員会】教育長　中野弥平，教育次長　野宮鶴三，社会教育係長　山下健一郎，社会教育係　泊　浩一，社会教育主事　泊　吉弘

【長崎県教育庁文化課】課長補佐　高野晋司，文化財保護主事　川道　寛，文化財調査員　塩塚浩一

【調査作業員】菅　一広，入口貞広，坂本　均，木場貞夫，辻山善郎，小田松則，宮崎勝美，平山繁幸，内野友樹，出端フジ子，山口ミヤノ，山口郁代，坪井トミ子，丸形光子，山内スミ子，木場登代美，西　光枝，三ケ崎和子，永島敦子，川端セキ子，亀山妙子，坪内アキ子，今村幸代，増山眞知子，辻山万里子，田中茂子，西キクヨ

# 第II章　層位と遺構

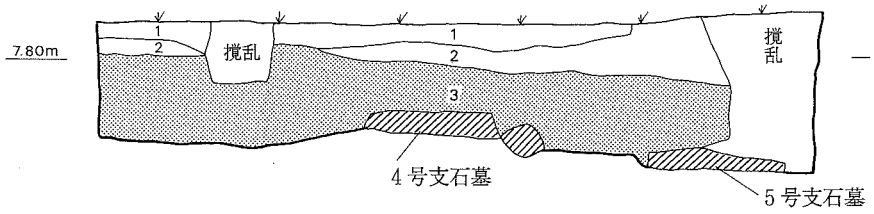
## 第1節　層　　位

調査区の層位は3層に区分される。

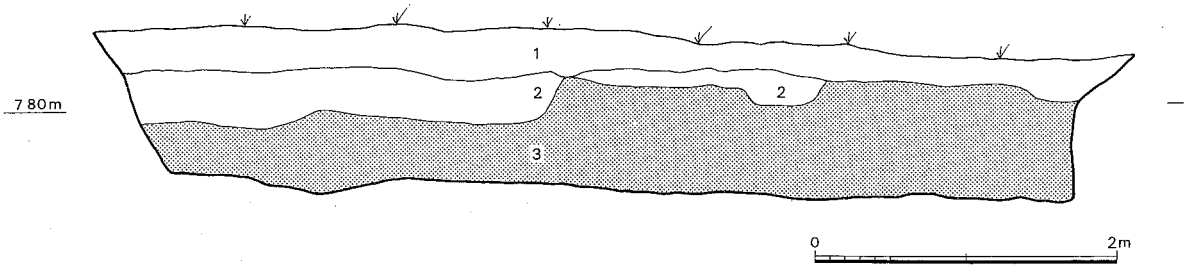
1層：表土。暗灰色砂層で，平均10～20cm程度の層厚である。

2層：赤褐色砂層。近世の家屋造成時に攪乱された土層である。3層の縄文時代晩期の包含層を切り込んでいる。平均40cm程度であるが，家屋の基礎部分は1m以上にもなる。龍泉窯系青磁や近世陶磁器のほか胞衣壺などが出土している。

3層：黄色砂層。きわめてきめの細かいサラサラした砂層。乾燥すると締まりがなくなり軟弱になる。土壙の掘り込みの確認は困難をきわめ，ほとんど不可能であった。縄文時代晩期前半の黒川式土器の小片や黒曜石製石鏃，縦長剝片などが出土した。この層の厚さは不明であるが，遺跡周辺の井戸の深さが約6m程度であることからみてそれくらいの厚さを想定できよう。崩落の危険があるために深掘りができないために正確なことはいえないが，この砂層の下位には縄文時代後期の包含層の存在が予想される。遺物の項で触れる阿高系の土器片がそれを物語る。砂層にはラミナ（葉理）がみられず，粒度がほぼ一定であることから風成砂であろう。貝殻片に富み人骨の保存も良好である。




A区北壁




B区東壁

**第2図　土　層　図**

## 第2節　遺　　構

今回の調査で明らかになった遺構は，支石墓6基，壺棺2基，土壙墓4基の計12基の墓群である。調査地点は従来の調査区の北側にあたり，もっとも標高が高くなる地点である。それらはいずれも3層である縄文時代晩期前半の黒川式土器の包含層に構築されている。

### (1) 支 石 墓

**【1号支石墓】**（第4図）

今回の調査で検出された遺構のなかでもっとも南に位置する。上部構造および下部構造ともに完存する。上部構造は4個の支石と一枚の上石(註1)からなる。上石は約92cm×56cm，厚さ12cmときわめて小さい。支石は上石の長軸方向に2個ずつ同じ大きさに揃えるが，その大きさの差は顕著である。支石は転礫であるが座りのいい平たいものを選んでいる。支石の大きさに比べて上石が極端に小さいことも特徴である。その配置は上石の幅に比べて広めであり，上石からはみ出している。上石の長軸方向は，N21度Wである。

下部構造は，本遺跡の支石墓で唯一の壺棺である。27cm×20cm大の角ばった転礫を蓋とする。日常用器の大形壺を転用した壺棺は，丹塗磨研で底部は平底である。口唇部をほんのわずかに欠くもののほぼ完形である。胴部の最下位に径2.4cm×1.5cmの楕円形の穿孔が丁寧に施され，ほぼ垂直に埋置されていた。壺棺の底には敷石などの構造物はない。墓壙の掘り方の追求に精力を傾けたが砂層のために確認することはできなかった(註2)。壺棺には人骨は残っていなかった。

**【2号支石墓】**（第4図）

1号支石墓の北側に位置し，上部構造および下部構造ともに完全に残っていた。上部構造は4個の支石と上石からなる。上石は約125cm×90cm，厚さ13cmで不整形な五角形をした割と大きめの安山岩の板石を使用している。支石は3個は長さが30cm前後で幅20cm程度の転礫を使用するが，1個は厚さ5cm程度の安山岩の板石を使っている。支石の配置はほぼ矩形で，上石が広いために支石はその下にほぼ隠れてしまう。上石の長軸方向はN47度Wである。

下部構造は土壙であるが，砂層のために掘り方や規模などは不明である。またこの支石墓からは人骨は検出されなかった。

**【3号支石墓】**（第4図）

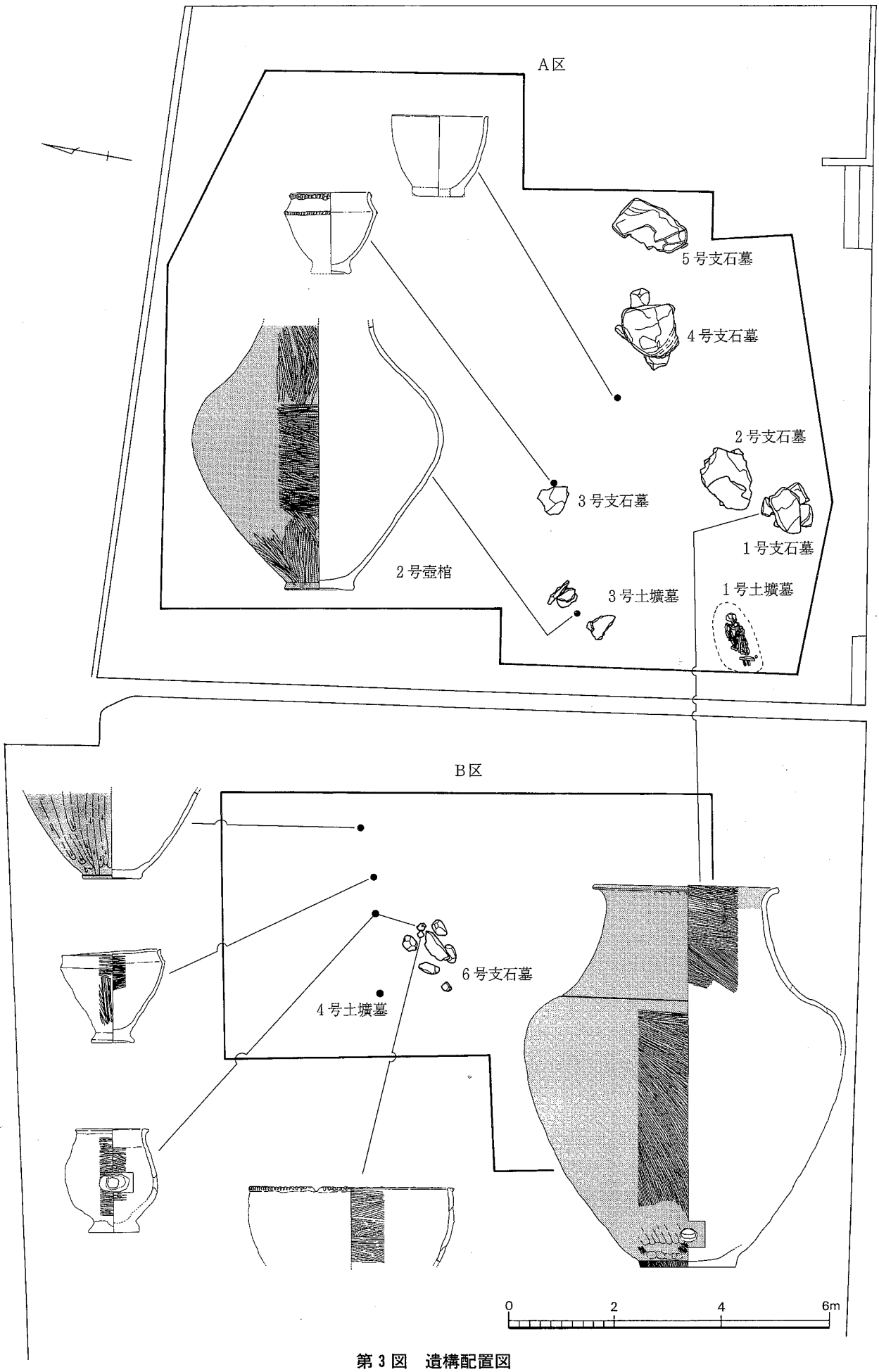
2号支石墓の北約3mの地点に検出された。59cm×55cmで厚さ10cmの小振りの上石を使用している。あまりにも小形であり，しかも支石をもたないことから支石墓と認識することに躊躇したが上石の下に二条の刻目突帯文をもつ小形甕が供献されていたのをもって支石墓と認識した。上石の長軸方向はN52度Wである。

下部構造は土壙であるが掘り方などは不明である。しかし上石の大きさから推測すればその規模はきわめて小さく小児用の可能性が高い。供献されていた小形の甕は口縁部に二条の刻目突帯文をもつ土器であるが，完形にはならず約半分程度が出土した。

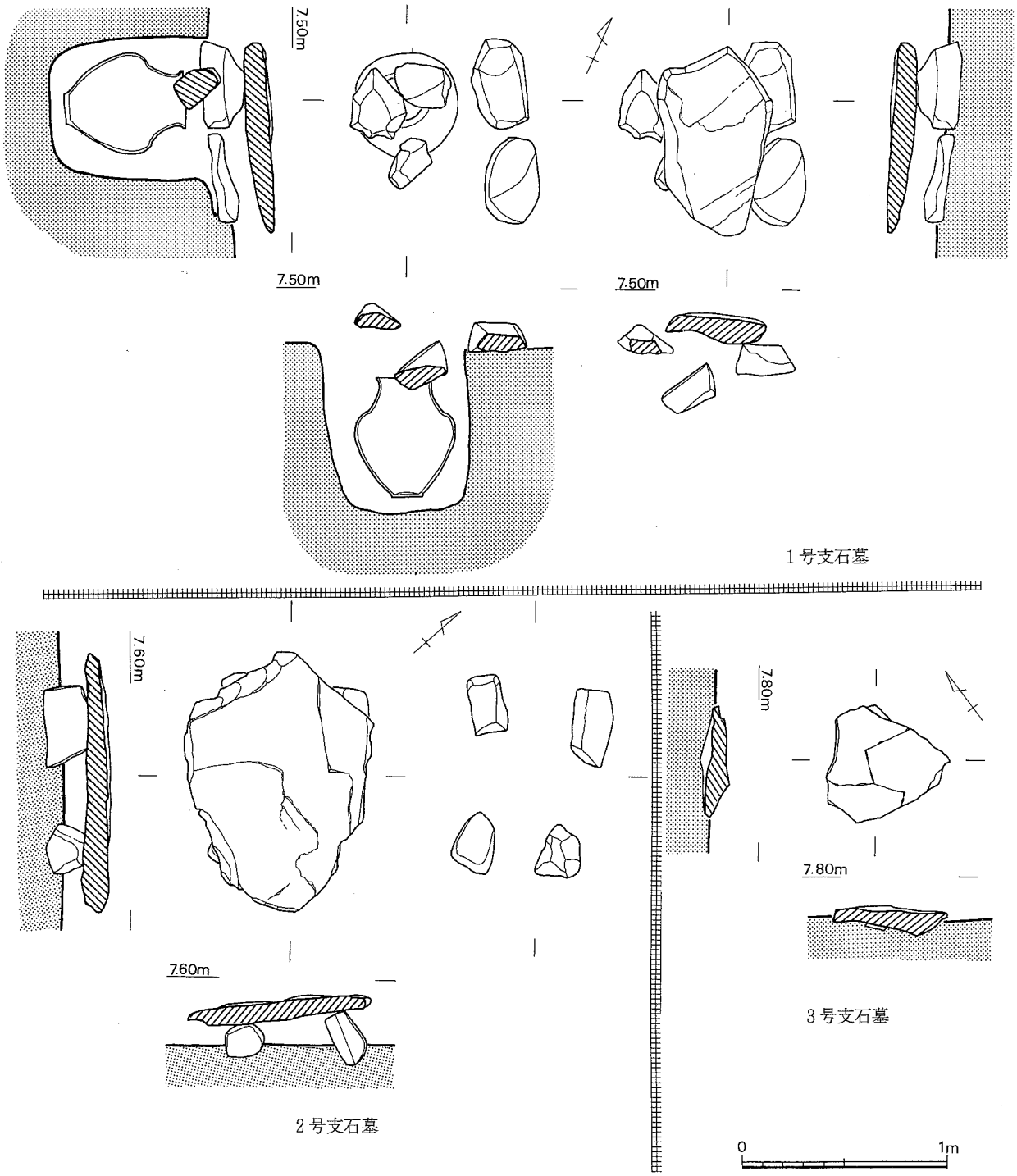
**【4号支石墓】**（第5図）

2号支石墓の北東側3mにある支石墓である。支石は4個であるが，南東側にあるはずの支石が認められず矩形状にならない。そのために上石は南東側に傾斜している。支石は大振りの円礫を2個と角礫2個を使用するが大きさはまちまちである。上石は100cm×100cmで大きく弧を描く扇形の平面形でもっとも厚い部分で25cm程度で全体的に丸みを帯びている。主軸方位はN20度Eをはかる。

下部構造については土壙などの掘り方などは不明である。しかし屈葬された壮～熟年の女性人骨の


A区
5号支石墓
4号支石墓
2号支石墓
3号支石墓
1号支石墓
2号壺棺
3号土壙墓
1号土壙墓
B区
6号支石墓
4号土壙墓
0
2
4
6m

**第3図　遺構配置図**

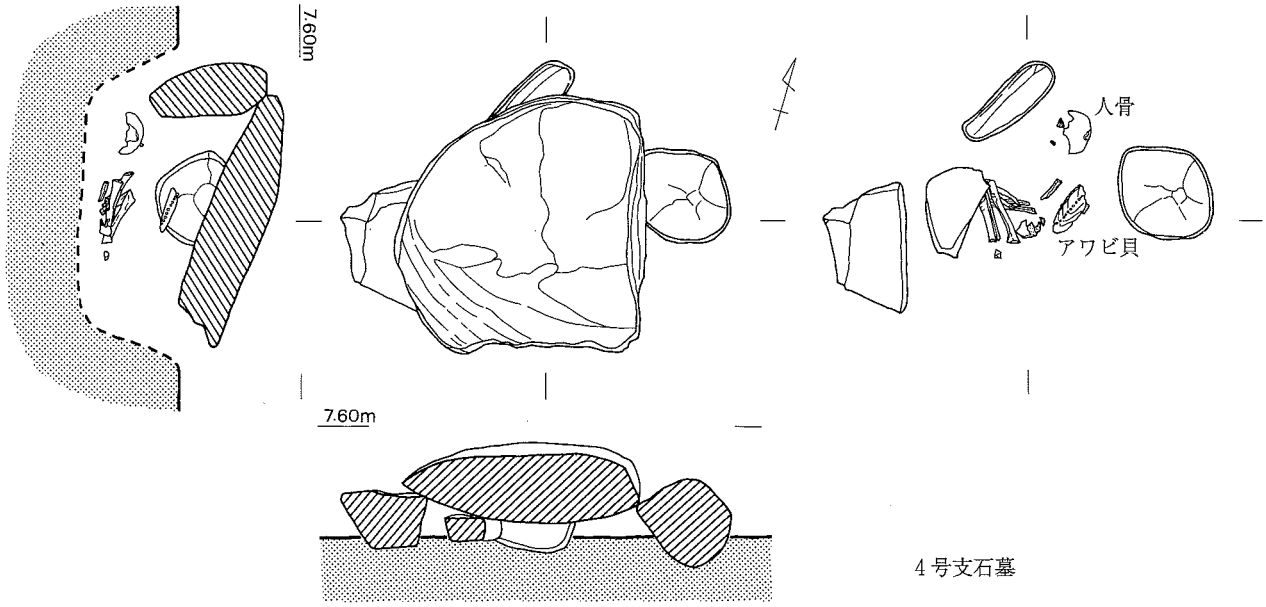


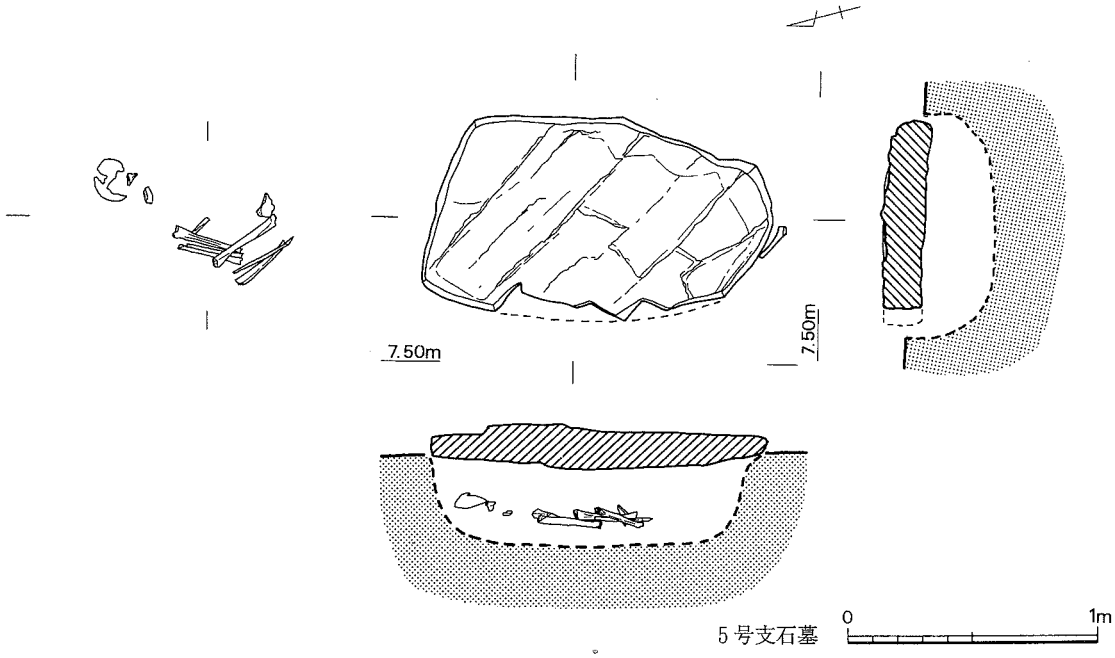

**第4図　1～3号支石墓実測図**

頭蓋片および体肢骨が検出されているのでそれから推測すれば土壙はおおよそ100cm×70cmで深さ30cm程度の規模が考えられよう。人骨の保存状態は劣悪で抜歯などを確認することはできなかった。 支石の間のほぼ中央に大きなアワビ貝が供献されていた。供献土器としては支石の間にはなかったものの約90cm西側の位置から支石とほぼ同レベルで小形の粗製甕が出土しており，4号支石墓に関連するものと考えられる。

**【5号支石墓】**（第5図）

今回の調査でもっとも東に位置する。上部構造は支石を持たない無支石の支石墓である。上石は長さ約135cm×幅約80cm，厚さ16cmと長方形の形をした大きな平たい石である。砂岩と思われるが，節理に沿って風化が激しくぼろぼろに崩れかけている。西側は発掘の際に崩壊し原形を損ねている。上石




**第5図　4・5号支石墓実測図**

を取り除いた際に崩れてバラバラになってしまった。上石の長軸方法はN20度Wである。崩れやすい石質のために支石に乗せられなかったことも考えられる。

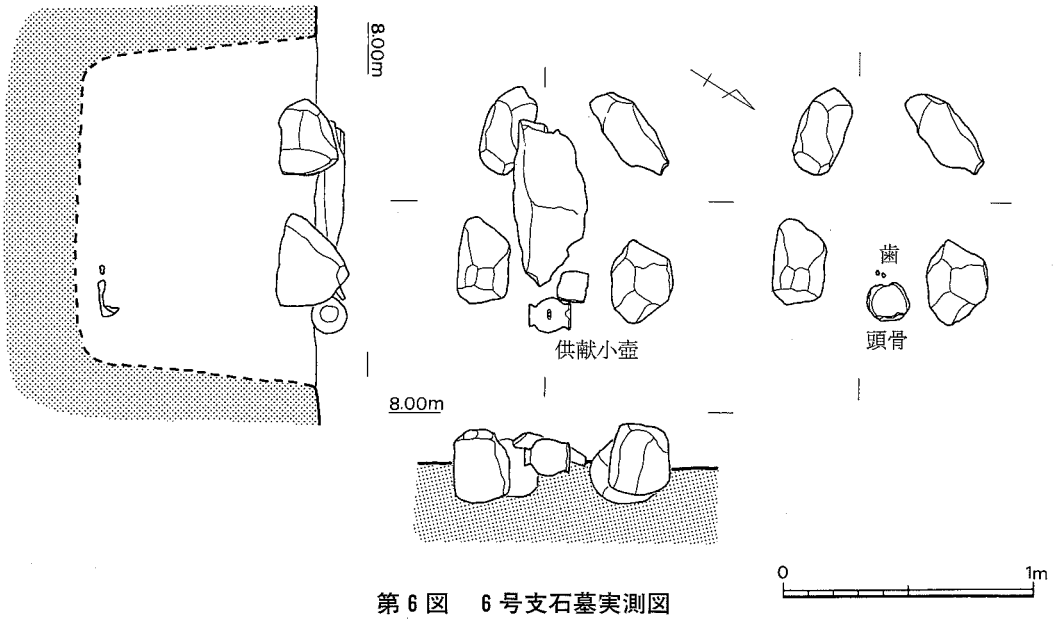
下部構造は土壙であるが，堀り方等は不明である。上石の下約20cmのところに屈葬された壮～熟年の女性人骨の頭蓋片および体肢骨が埋葬されていた。人骨の遺存状況は4号支石墓のそれとほぼ同じであったが，下顎部が遺存しており切歯を抜いた風習的抜歯がかろうじて看取できた。しかし支石墓の周辺は家屋の基礎工事のためにかなり攪乱されており，供献土器の確認はできなかった。また副葬品も検出できなかった。

**【6号支石墓】**（第6図）

1基だけ離れて検出された支石墓である。本遺跡でもっとも標高が高い。家屋の床面からさほど深さがなく，建築の際に上石は除去されたものと思われる。支石は4個あり，矩形状にバランスよく配されていた。半月形の薄い板石が蓋石的に使用されたらしいが土壙上面をすべて覆うには大きさが足りない。6号支石墓の前後に柱状の立石がそれぞれ一つあるが，周囲の攪乱が激しいためにそれらが確実に6号支石墓に属するものかどうかは明らかではない。北側の立石から供献土器が出土している。

下部構造は土壙であるが，堀り方は不明である。しかし支石の下約70cmの部位から熟年男性の頭骸骨が検出されている。人骨は保存状態があまり良好でないため抜歯などについては不明である。

支石の間から供献された丹塗磨研の小壺が横向きに，またそれに接して口唇に1条の刻目突帯をもつ四角形に整形された甕の破片が出土した。この両者は意図的に重ね置かれたもので，原位置を保っている。この甕形土器は夜臼式土器に入ることはまちがいない。




**第6図　6号支石墓実測図**

### (2) 壺棺墓

6号支石墓の北東側約1mにある。家屋建築によって破壊され胴部のおおよそ4分の1ほどしか残っていない。ほぼ直立していたが板石なども認められなかった。丹塗りの壺で器壁は薄く，焼成は良好である。夜臼式土器の新しい段階と考えて大過はないと思われる。

### (3) 土壙墓

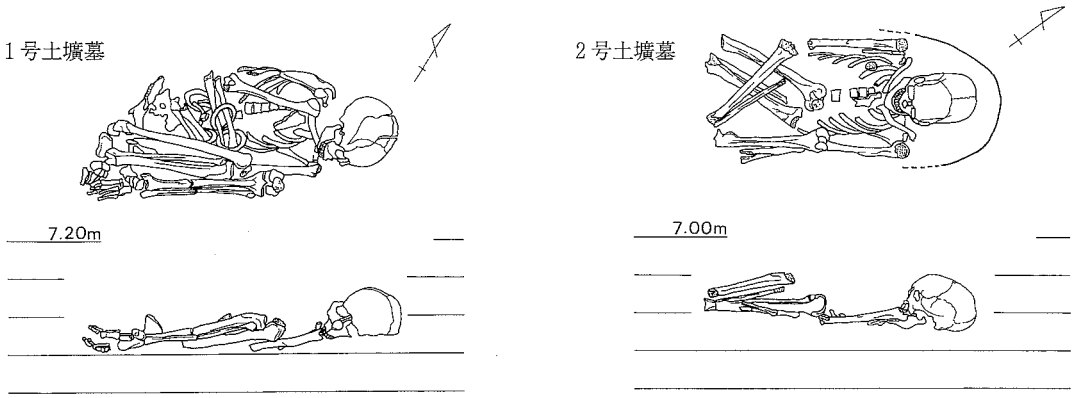
**【1号土壙墓】（第7図）**

1号支石墓の西約2mの地点に検出された土壙墓である。この地点は家屋の基礎部分にあたり頭骨の直上2cm付近まで攪乱されていた。土壙の堀り方は検出できなかった。

埋葬されていた人骨は熟年女性のほぼ全身骨格で良好な保存状態であった。横臥に近い状態で，屈葬されている。両手にそれぞれ2個のオオツタノハ製の貝輪を装着している。また風習的抜歯がみられ，両顎の犬歯4本と下顎の切歯4本が抜かれていた。

**【2号土壙墓】（第7図）**

1号土壙墓の下位に検出された土壙墓である頭部側に堀り方らしきものがみられたものの全体像は不明である。1号土壙墓との主軸が約20度ずれており，しかも垂直レベルが交わらないことから2体

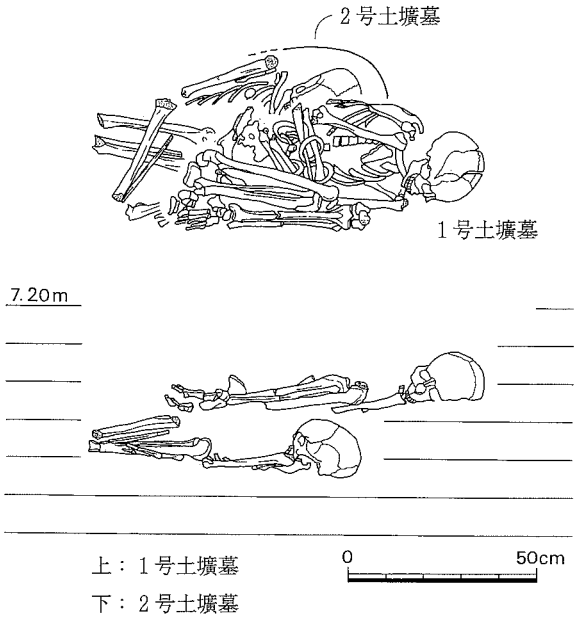



が同時に埋葬された可能性は低いものと思われる。しかし2号土壙墓の人骨が1号土壙墓によってまったく攪乱されておらず，しかも近接して埋葬されていることから追葬された可能性が高いものと思われる。その際には何らかの標式的なものの存在が考えられるが確認できなかった。埋葬されていた人骨は，壮年女性で良好な保存状態であった。人骨は仰臥屈葬され，下顎の左犬歯と切歯4本が抜かれていた。

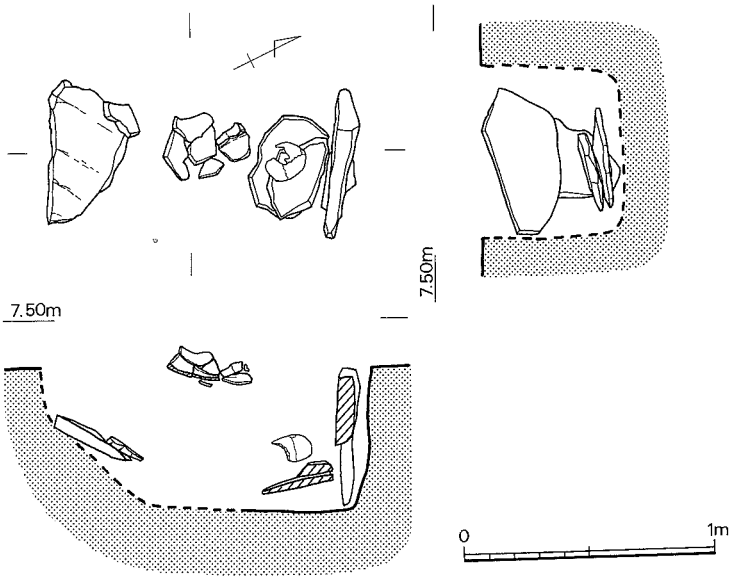
**【3号土壙墓】**（第8図）

板石で両方の小口をつくった土壙墓で側壁には板石が認められない。木製の板材の可能性も考えられる。変形の箱式石棺とでも呼べそうな構造である。土壙からは壮年女性の後頭部が検出されている頭蓋周辺の砂が赤く変色していたので丹が塗布されていたものと思われる。また頭蓋のある位置の壙底には2枚の板石が敷かれている。南西側の板石は外側に大きく倒れている。小口板石を原位置に戻したときの規模は側壁が75cm小口が60cmの長方形で深さ40cmを測る。主軸方位はN25度E。

小口の上面に壺棺がほぼ水平に置かれていた。壺棺の下面と小口の高さがほぼ同じであり，また壺棺の主軸と下部構造の主軸は一致している。壺棺は胴部下半で輪切りに擦り切られていた。壺棺には土壙墓の女性に関係ある幼少児もしくは女性の後頭部以外の部分を埋葬したことが推測されよう。壺棺は口頸部を欠くものの器形からみて夜臼式土器に属する。




**第7図　土壙墓から検出された人骨**




**第8図　3号土壙墓実測図**

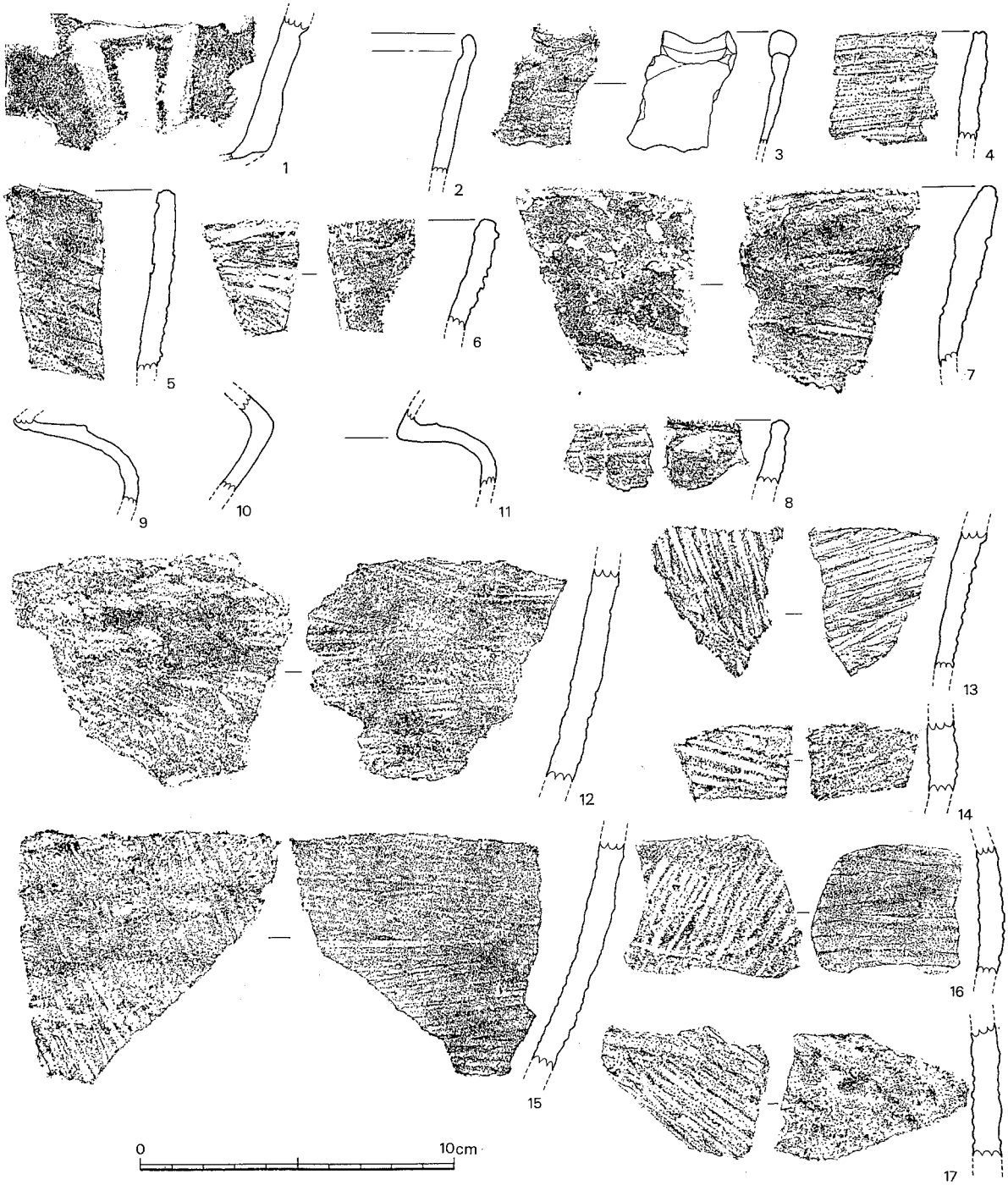
**【4号土壙墓】**

6号支石墓の西側に，小児の頭骨と四肢骨片が若干出土した。直上まで攪乱されており，遺構は不明である。人骨の出土レベルは6号支石墓とほぼ同じであり何らかの関係が想定される。

# 第Ⅲ章　出土遺物

## (1)　包含層出土の土器（第9図1～18）

1は縄文時代後期の阿高系の坂の下式土器である。器種は鉢で，底部付近の破片である。幅広の沈線で文様が施されている。焼成は堅緻で，胎土には大量の滑石や結晶片岩が混入する。外傾接合であ




第9図　包含層出土の土器

る。表採品であるために正確な層準は知ることはできないが，この一帯の砂層の厚さは井戸の深さから判断して約6mほどもあることから砂丘の下位には縄文時代後期の包含層が存在することは間違いないであろう。一点の土器片に過ぎないが本遺跡の開始時期をさらに古く遡のぼらせるものである。

**2** は丹塗り磨研土器である。外面は丁寧に研磨されている。内面には口唇直下に沈線が一条付されている。調整は研磨であるが外面ほど丁寧ではない。**3** は精製土器の口唇部にリボン状突起をもつ口縁部破片で，内外面ともに擦過ののちナデが施されている。

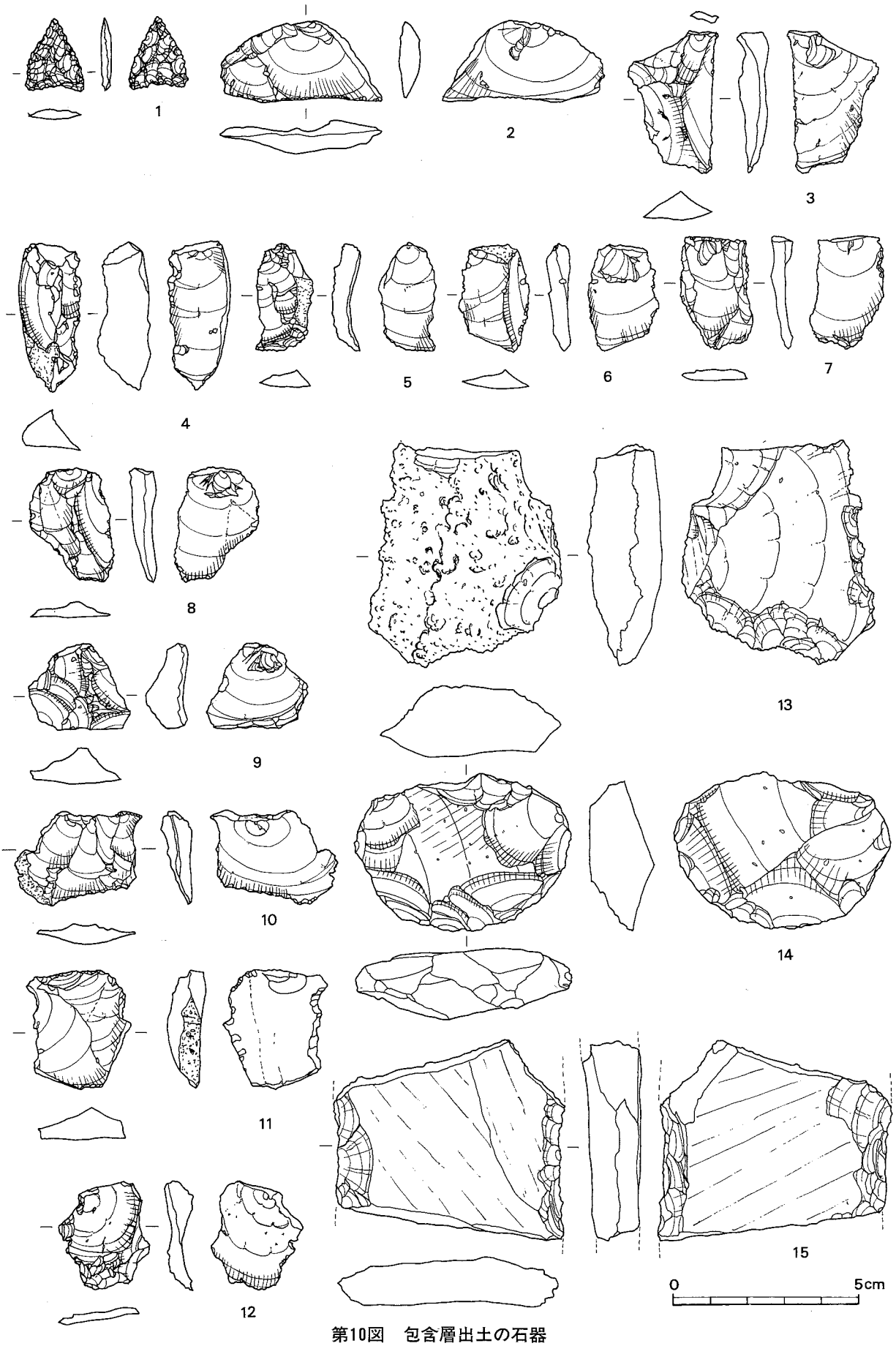
**4**～**8** は粗製土器の口縁部破片である。**4** は深鉢で，調整は外面が擦過条痕，内面にはナデが施されている。**5** は深鉢と思われる破片で，内外面ともに擦過ののちナデが施されている。外面には擦過による条痕がわずかに看取できる。**6** は小破片で器形はわからない。調整は外面が貝殻による条痕ののちその上をナデている。内面はナデが施されている。**7** も深鉢で，内外面ともに粒子の脱落による小さな凹みが多数みられる。口唇直下の内面は丁寧に面取りされている。口唇部は平滑に仕上げられている。調整は内外面ともにナデが施されているが，内面には条痕も看取される。口縁部の内外面に薄く丹塗りされている。**8** は内外面ともに擦過ののちナデが施されている。

**9**～**11**は精製土器の玉縁状口縁をなす浅鉢である。胎土は精選されており，焼成は堅緻である。いずれも胴部の屈曲部の破片で，胴部は斜めにのび，肩部は張っている。頸部は内に張り出すが口縁部は剝落している。

**12**～**17**は粗製土器の胴部破片である。胎土は長石・角閃石・砂粒などを含むものの焼成は良好である。**11**・**13**の調整は内外面に擦過ののちナデが施されている。**14**の外面に斜位の，内面は横位の貝殻条痕が付されたのち内外ともにナデられている。**15**は外面がナデ，内面は貝殻条痕による調整である。**16**は外面に貝殻条痕，内面にケズリが，**17**は内外面ともに貝殻条痕ののちナデが施されている。

| 番号 | 層位 | 品種 | 部位 | 文様・成形手法・特徴 | 胎土 | 焼成 | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 表採 | 深鉢 | 胴部 | 幅広の沈線（外）ナデ（内） | 滑石・結晶片岩 | 良好 | 赤褐色（内外） | 外傾接合 |
| 2 | 2 | 深鉢 | 口縁部 | 研磨（外）<br>口縁部下に沈線・研磨（内） | 長石・砂粒 | 堅緻 | 黄橙色（内外） | |
| 3 | 2 | 深鉢 | 口縁部 | 擦過条痕→ナデ（内外） | 結晶片岩 | 堅緻 | 黄褐色（内外） | リボン状突起 |
| 4 | 2 | 深鉢 | 口縁部 | 擦過条痕（外）ナデ（内） | 長石・細砂粒 | 良好 | 褐色（内外） | |
| 5 | 2 | 深鉢 | 口縁部 | 擦過条痕→ナデ（内外） | 細砂粒 | 良好 | 暗褐色（内外） | |
| 6 | 2 | | 口縁部 | 貝殻条痕→ナデ（外）<br>ナデ（内） | 細砂粒 | 良好 | 黄褐色（内外） | |
| 7 | 2 | 深鉢 | 口縁部 | ナデ（内外） | 細砂粒 | 良好 | 黄褐色（内外） | |
| 8 | 2 | | 口縁部 | 擦過条痕→ナデ（内外） | 細砂粒 | 良好 | 茶褐色（内外） | |
| 9 | 2 | 浅鉢 | 胴部 | 研磨（外）ナデ（内） | 長石 | 堅緻 | 灰黄褐色（外）<br>淡灰褐色（内） | |
| 10 | 2 | 浅鉢 | 胴部 | ナデ（内外） | 長石・角閃石 | 良好 | 淡褐色（外）<br>淡灰褐色（内） | |
| 11 | 表採 | 浅鉢 | 胴部 | ナデ（内外） | 長石 | 堅緻 | 黄褐色（内外） | |
| 12 | 2 | | 胴部 | 擦過条痕→ナデ（内外） | 石英・長石 | 良好 | 暗褐色（外）<br>暗黄褐色（内） | |
| 13 | 2 | | 胴部 | 貝殻条痕→ナデ（内外） | 長石 | 良好 | 赤褐色（外）<br>黄褐色（内） | |
| 14 | 2 | | 胴部 | 貝殻条痕（外）ケズリ（内） | 赤色砂・細砂粒 | 良好 | 黄褐色（内外） | |
| 15 | 2 | | 胴部 | 擦過条痕→ナデ（内外） | 長石・角閃石 | 良好 | 暗茶褐色(内外) | |
| 16 | 2 | | 胴部 | 貝殻条痕→ナデ（内外） | 角閃石 | 良好 | 黄褐色（内外） | |
| 17 | 2 | | 胴部 | ナデ（外）貝殻条痕（内） | 細砂粒 | 良好 | 褐色（外）<br>暗褐色（内） | |

**第1表　土器計測表**




第10図　包含層出土の石器

### (2) 包含層出土の石器（第10図 1 ～15）

1 は小形の三角形をした黒曜石製石鏃である。基部には浅い抉りが入り，片方の側縁は中央部で屈曲している。薄く仕上げられており，丁寧な造りである。第 6 号支石墓の下部構造の土壙の覆土から出土した。2 は黒曜石の不定な横長剝片である。下端に擦痕が顕著に認められる。3 は使用痕のある剝片で，右側縁にほぼ全面に微細な使用痕が認められる。不定形剝片を利用している。5 ～ 8 までは縦長剝片である。剝片剝離技術は退化した姿を呈しており，いずれも寸詰まりで長さに対して幅広である。9 ～12はいずれも黒曜石製の不定形剝片である。13は削器である。安山岩製で，主要剝離面に雑な調整を入れて刃部を作出している。14は両面加工石器である。安山岩製で，求心的な調整加工が施されている。15は安山岩製の扁平打製石斧で，上下両端を欠損している。

| 番号 | 層位 | 器　　種 | 石　　質 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重　量 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | 石鏃 | 黒曜石 | 2.0 | 1.5 | 0.3 | 0.59 | 6 号支石墓土壙出土 |
| 2 | 表採 | 使用痕のある剝片 | 黒曜石 | 2.2 | 4.3 | 0.6 | 5.25 | 下辺に擦痕 |
| 3 | 2 | 使用痕のある剝片 | 黒曜石 | 3.8 | 2.4 | 0.9 | 2.43 | |
| 4 | 2 | 剝片 | 黒曜石 | 4.0 | 1.7 | 1.5 | 7.74 | |
| 5 | 2 | 剝片 | 黒曜石 | 2.9 | 1.5 | 0.8 | 1.87 | |
| 6 | 2 | 剝片 | 黒曜石 | 2.8 | 1.9 | 0.6 | 2.49 | |
| 7 | 2 | 剝片 | 黒曜石 | 3.1 | 1.9 | 0.6 | 2.52 | |
| 8 | 2 | 剝片 | 黒曜石 | 3.1 | 2.2 | 0.7 | 3.12 | |
| 9 | 2 | 剝片 | 黒曜石 | 2.3 | 2.8 | 1.1 | 4.69 | |
| 10 | 2 | 削器 | 安全岩 | 6.0 | 5.2 | 2.0 | 60.09 | |
| 11 | 2 | 剝片 | 黒曜石 | 2.5 | 3.4 | 0.8 | 3.77 | |
| 12 | 2 | 剝片 | 黒曜石 | 3.2 | 2.8 | 1.0 | 7.23 | |
| 13 | 2 | 両面加工石器 | 玄武岩 | 4.2 | 5.8 | 1.7 | 47.15 | |
| 14 | 2 | 剝片 | 黒曜石 | 2.9 | 2.5 | 0.7 | 2.40 | |
| 15 | 2 | 扁平打製石斧 | 玄武岩 | 5.5 | 6.2 | 1.5 | 70.34 | 両端欠 |

**第 2 表　石器遺物計測表**

### (3) 供献土器

**①甕形土器**（第11図 1 ）

供献小壺（第11図 2 ）に一部重なるように置かれていた土器片で，14cm×12cmのほぼ方形に整形されていた。器形は砲弾形を呈する甕形土器で，復元径31.0cmを測る。底部を欠くため全体の形状は不明であるが，浅い甕になるものと思われる。

器表側は口縁部がナデののち刺突，口唇には低い三角突帯を張り付け，刻目を施している。刻目は先の細い工具による刺突であるが，稚拙でその間隔も不揃いであり，時期的に古相である。内面には横方向の研磨状の擦過条痕がみられる。色調は内外ともに黒褐色で，胎土は砂粒を含むものの精選され，焼成は良好である。夜臼式土器の段階である。

**②小壺**（第11図 2 ）

6 号支石墓に供献されていた小壺である。器形は倒卵形を呈し，器高15.6cm，口径11.0cm，胴部中央に最大径があり12.8cmを測る。底部は高さが1.8cmほどで，形状は平滑である。口頸部はやや外傾するが短い。口唇部は頂部をやや平坦に成形しており，全面に丹塗磨研されている。口縁部の先端は弱い折り返しがみられる。

器表は底部まで全面丁寧に細かい横方向の磨研がなされ丹塗りされているが，底部は剝落が激しい。内面は口唇から頸部にかけては条痕ナデ消しの調整の後赤色塗彩が施される。胴部はサルボウなどの二枚貝と推測される強い条痕が横方向に顕著にみられ，それ以下はナデ整形である。胴部のほぼ中央に約1.5cmの不整円形の穿孔がある。方向は内側からである。器表面側にその際生じた剝落の跡があ

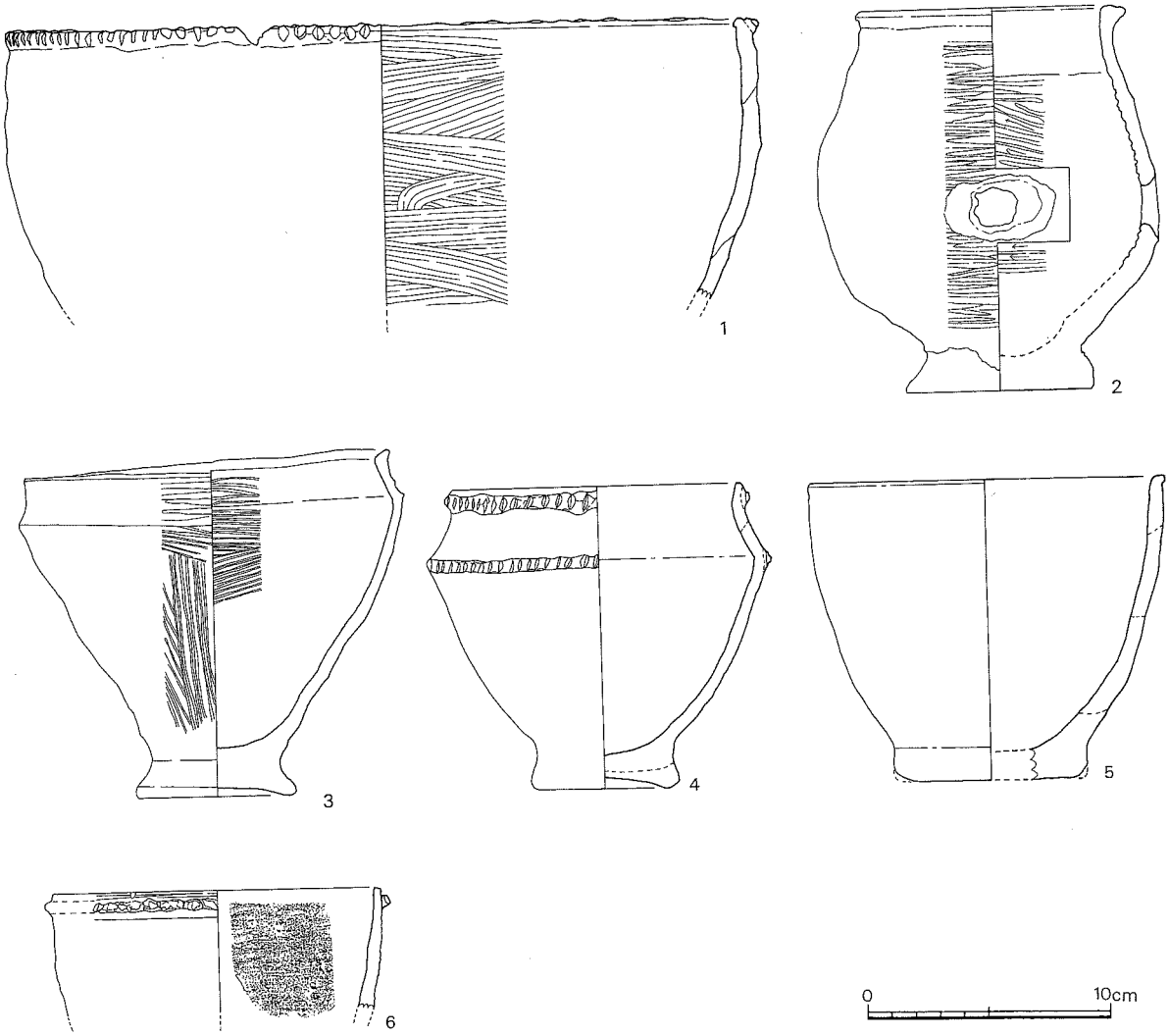
る。胎土は黄橙色を呈し，３㎜程度の石英粒を多く含む。

器形からすれば朝鮮半島系の無文土器の影響を色濃く有するものの，内面に施された貝殻条痕による調整は縄文土器の手法そのものである。また底部は上げ底とならず，平滑な台状になることも特異である。管見にあたってみたが類例を見いだすことはできなかった。強いていえば半島系の無文土器を模倣して在地の縄文土器の技法で作成したものといえよう。

**③小甕**（第11図３）

６号支石墓から１ｍほど離れたところにあった立石の脇に斜め方向で埋置されていた粗製の小形亜深鉢である。胴部の上部で「く」字形に屈曲したのち直線的に内傾する。器高14.0cm，口径14.7cm，屈曲部が胴部の最大径となり15.6cmである。底部は外側に強く張り出し，上げ底で直径6.6cmである。

「く」字に内傾する頸部の器表側は棒状工具による研磨が施される。屈曲部の直下はケンマ状の条痕が、さらにその下位には縦方向の条痕擦過による荒い条痕による調整がみられる。底部はヨコナデである。口唇はケンマ状のナデが施され，内面の上半には横位の条痕が，さらに下半は条痕をナデ消ししている。色調は内外ともに褐色を呈するが，底部付近は外面が赤褐色，内面が黄橙色である。口縁部の内側には煤が顕著に付着している。胎土には若干の砂粒を含むものの精選されている。




**第11図　供献土器実測図**

**④小甕**（第11図４）

３号支石墓の上石の下位にあった粗製の小形甕である。胴部の上位で逆「く」字形に屈曲したのち直線的に内傾し，口唇近くで外反する。下位はやや丸みをおびてすぼまる。底部は，貼り付けされており，外に張り出し，上げ底気味の平底である。口唇部と屈曲部に二条の刻目突帯文をもつ。刻目はヘラ状工具による押引きとみられる。器高12.3cm，口径11.8cm，屈曲部に最大径をもち14.0cmを測る。底部は貼り付けがなされ，直径6.0cmを測る。

調整は器表面は口縁部がナデ，屈曲部から下位には横位の条痕ナデ消しを施し，底部付近はナデとなる。内面は口唇から屈曲部まではナデ，屈曲部から底部付近までは横位の擦過ののちナデ消し，底部はナデとなる。

胎土は雲母・角閃石・長石を含み，なかでも雲母は多い。色調は内外面ともに暗褐色を呈し，焼成は普通である。内傾する口頸部に籾圧痕が付されている。型どりしたところ長さ7.0mm，幅3.0mmを測り，縦条痕が顕著に残っていた。

**⑤小甕**（第11図５）

４号支石墓の西１ｍほどの位置に支石墓の上石とほぼ同じレベルにあった粗製の小形甕で横向きに置かれていた。口径は13.2cmを測り最大径となる。底部は平坦で径7.8cmで，割に大振りである。器壁は全体的に分厚い。

器表面は口縁部から胴部下半までは縦方向に擦過ののちナデ消しがなされ，その下位はナデ，底部の近くはヨコナデが施されている。内面は口唇直下にヨコナデが，それ以下はナデが施されている。胎土は雲母・角閃石・長石を含み，なかでも雲母は大量に含んでいる。色調は内外面ともに褐色を呈し，焼成はやや軟調である。

**⑥小甕**（第11図６）

表採で出土位置は不明である。口縁部直下に刻目突帯文をもつ小形の深鉢である。口径は13.3cmを計る。その大きさから支石墓に伴う供献土器であったことが考えられるが，原位置を遊離しており詳細は不明である。刻目突帯文が突帯一つ分だけ下がった位置に施され，刻目はヘラ状工具による押引きとみられる。刻目はおそらく一条であろうと思われる。調整は外面はナデ，内面は擦過条痕がみられる。胎土は精選されており，焼成は良好で，色調は黄褐色を呈する。この種の色調を呈する土器は本遺跡では知られておらず搬入品の可能性が高い。

### (4)　１号支石墓の下部構造の壺（第12図）

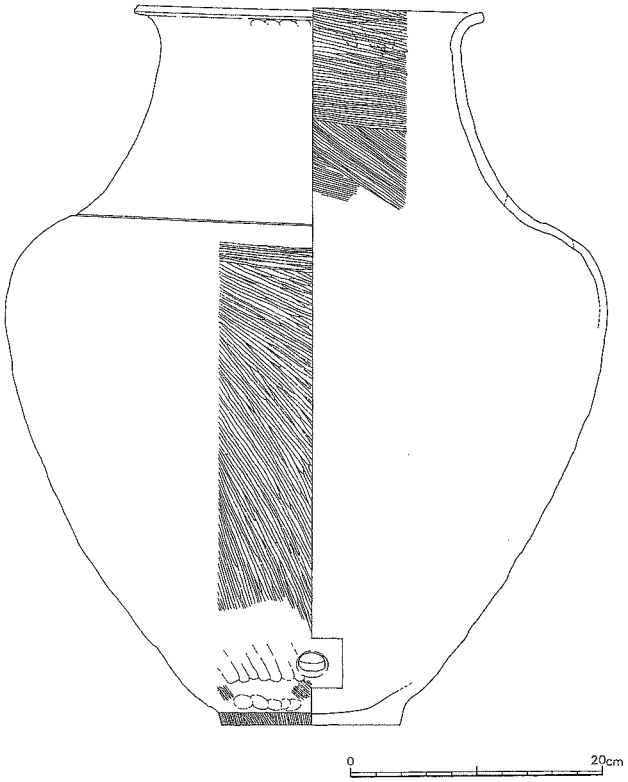
壺棺は，丹塗磨研の壺で平底である。口唇部をわずかに欠くもののほぼ完形である。胴部の最下位に穿孔を施し，垂直に埋置していた。口径28.0cm，器高57.9cm，底部の径14.2cmの大形の壺で，胴部の最大径は胴部の上位にあり48.2cmを測る。薄い平底で，胴部は肩がつよく張り，頸部は胴部と段をなし，沈線で区画したうえ，つよく内傾して伸びる。

器表側の調整は，口唇はナデ，口唇直下の口縁部は指押さえののちヨコナデ，口頸部が横位の研磨ののちヨコナデ，肩部から胴部下半までは左上から右下へかけて研磨，胴部下半から底部付近までは左上から右下方向のナデ，胴部と底部の間には指頭圧痕があり，底部はハケ目が残る。内面は，口唇直下が横位の研磨，口頸部がハケ，その下位がナデとなる。

胎土は砂粒を含むものの精選されており，器表にはベンガラを混ぜたスリップ（化粧土）をかけているために色調は赤褐色を呈するが，胴部は部分的に黒斑がある。底部付近に２cm×1.5cmの楕円形をした穿孔がある。穿孔方向は内外両方からで丁寧に加工されている。均整のとれた器形や洗練された

製作方法など，在地系の土器とは一線を画すものがある。

類例には，いずれも支石墓の下部構造である福岡県新町遺跡20号支石墓甕棺，佐賀県五反田支石墓，同礫石Ｂ遺跡，同久保泉丸山遺跡などがありいずれも夜臼式土器として位置づけられており，本遺跡の例も夜臼式土器の新しい段階に位置づけられよう。




第12図　第１号支石墓の壺棺実測図

### (5) 甕　　棺（壺棺）

**①１号壺棺**（第13図１）

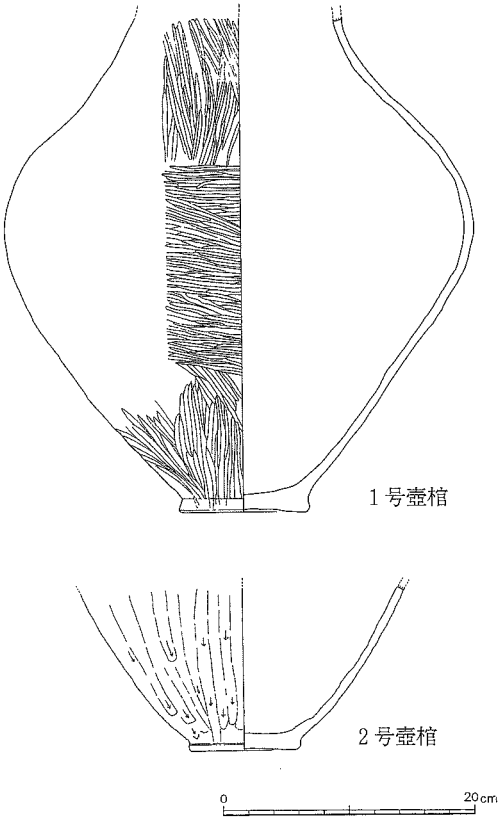
３号土壙墓の上部にあった丹塗磨研の壺棺である。口頸部の大部分を欠く。下部の土壙墓と主軸を合わせており，ほぼ水平に置かれていた。胴部の最大径37.6cm，現存する器高は40.0cm，底部の径10.4cmを測る大形の壺である。

底部はかすかに上げ底になる平底で外側にやや張り出す。また底部には全面をおおうほどの木葉痕がみられる。胴部は最大径の位置が高く，肩が張る。胴部と頸部を区画する沈線や段はみられない。頸部はつよく内傾してすぼまるが，頸部と胴部を区画する沈線や段はみられない。器壁はきわめて薄く精巧につくられている。

器表は頸部が縦方向の，胴部には横方向の，そしてその下位の底部付近には縦方向の丁寧な研磨がなされている。内面は頸部が縦位のつよいナデ，胴部は基本的に横位のハケ調整で部分的にタテハケが入り，また指頭によるケズリや押圧痕や指頭の朱痕がのこっている。

底部付近は風化のために剝落して調整は不明である。胎土には石英粒を多く含むものの精選されており，焼成は良好である。色調は内外面ともに黄橙色を呈する。

あまり類例がなく，しいて求めるとすれば，佐賀県礫石Ｂ遺跡ＳＡ36支石墓の下部構造の身である大形壺，新町遺跡第18号支石墓などをあげることができる。またこの大形壺の編年的位置は器形からみて夜臼式土器の範疇に入ることはまちがいないものと思われる。




第13図　１・２号壺棺実測図

**② 2号壺棺**（第13図２）

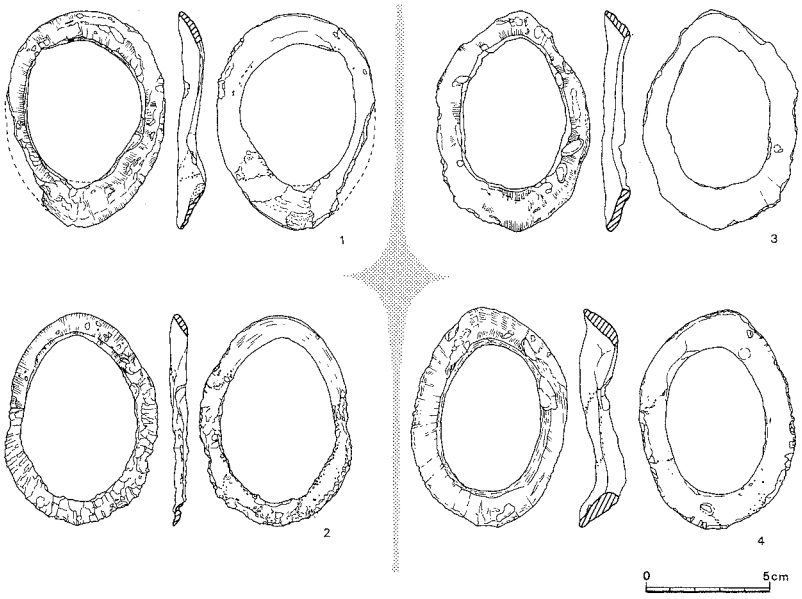
家屋建築時の基礎工事によって破壊されたために，胴下半部のみが残存するにすぎない。直立気味の底部は直径が8.9cmを測る。器面調整は外面は縦方向の研磨を行い平滑にしている。内面は風化剝落により調整は不明である。胎土は石英粒を含むものの精選されており，焼成は良好で，内外面ともに黄橙色を呈する。器壁は薄く精巧につくられており，１号壺棺とほぼ同じ器形になると思われる。

### (6) 貝　輪

第１号土壙墓には熟年女性が若干横向きの屈葬の状態で埋葬されていた。縄文時代の伝統的な抜歯を施されたこの人骨の両前腕にはそれぞれ２個合計４個の貝輪が装着されていた。

貝輪はいずれもオオツタノハ(註3)を使用している。ヨコ切りしたのちに殻表の放射肋をスリ消すように研磨される。１の外径は長径8.7cm，短径6.3cm，内径は長径5.7cm，短径4.6cmを測る。左前腕の手首側に殻表を肘側に向けて装着されていた。２の外径は長径8.5cm，短径6.1cm，内径は長径6.6cm，短径4.6cmを測る。左前腕の肘近くに装着されていた。殻表側の上半分は丁寧に研磨されているが，下半身は放射肋が残っており研磨は認められない。また下半分は風化が顕著である。３の外径は長径8.9cm，短径6.2cm，内径は長径6.0cm，短径4.1cmを測る。右前腕の手首側に貝の内面を肘側に向けて装着されていた。殻表は放射肋を丁寧に研磨されていた４の外径は長径8.9cm，短径6.3cm，内径は長径5.9cm，短径4.0cmを測る。右前腕の肘側に，３と同じ向きに装着されていた。殻表の研磨は部分的である。貝輪の装着方向は左右で逆向きになっていた。この貝輪を装着していた人骨は，遺構の検出状態などの状況からみてほぼ縄文時代晩期終末の夜臼式土器段階において間違いない。

完成したオオツタノハ製貝輪はその形状が縄文時代の在地系の二枚貝貝輪と大差がない。このことはこの貝が依然として縄文の系譜をひく地域で選択的に消費されたものであろうか。ともあれオオツタノハ製貝輪の出現時期を当地方において従来の弥生時代前期から縄文時代晩期終末へ一段階さかのぼらせたことは確実である。




**第14図　１号土壙墓人骨の貝輪**

# 第VI章　総　　括

## 第１節　長崎県における支石墓研究の現状と課題

### (1)　長崎県支石墓研究史抄

#### ①第１期　研究の始まり

日本の支石墓研究は戦前の朝鮮半島における調査を契機として，日本におけるその存在の追求から始まった。福岡県志登支石墓群（文化財保護委員会1956）や佐賀県葉山尻遺跡などの調査が50年代に相次いだ。長崎県では北有馬町原山遺跡と佐々町狸山支石墓がもっとも早い調査例である。

原山遺跡が日本考古学協会西九州総合調査特別委員会の調査対象となった経緯は，板付遺跡で確認された夜臼式土器と板付式土器の共伴の確認から一歩すすんで夜臼式土器の単純段階の追求という側面があった。調査は第II群のほぼ全域を発掘して36基の支石墓を確認した。下部構造は箱式石棺が21基，土壙墓が13基，甕棺が２基であったが，住居跡などの生活遺構は確認できず，支石墓を中心とする遺跡の性格から複雑な問題を投げかけた。調査担当の森貞次郎は，夜臼式土器が相当のちまで残存するのではないかとし，そうした現象を原山遺跡の地理的位置に求め，原山遺跡のあり方を北九州から遠く離れた辺遠の地であり「周辺地域」という位置づけで説明した。

その後森は北松浦郡佐々町の狸山支石墓の概報と日本における初期の支石墓の問題についてのべるなかで（森1969），日本の支石墓を碁盤形であり韓国の南方第III式にあたることを明らかにした。

#### ②第２期　発掘調査の進展

第２期は，1970年代から80年代にかけての時期で，発掘調査の進展とともに支石墓の体系的な総括が行われる時期である。県内では諫早市風観岳支石墓群・鹿町町大野台支石墓群・江迎町小川内（こがわち）支石墓群などが発掘された。これらの成果は研究者の学説にも影響を与え，甲元真之は朝鮮半島の支石墓の編年をもとに西北九州における支石墓の系譜とその出現の時期を明らかにした（甲元1977）。甲元は風観岳支石墓の成果に着目し，朝鮮半島の支石墓との対比を行った。1979（昭和54）年，高野晋司は県内の支石墓を概観したのち，支石墓の構造について支石の有無や下部構造に着目して６型式に分類した（高野1979）。

史跡としての整備が進んだのもこの時期である。1972（昭和47）年には北有馬町原山支石墓群が国史跡に指定され，1979・80年の２年にわたって保存管理計画にしたがって史跡としての環境整備事業が実施され，補完調査が実施された。また1985年には鹿町町大野台支石墓群も国史跡に指定された。

またこの時期の後半は九州横断自動車道などの大規模な行政発掘が行われ，情報が飛躍的に増大する。福岡県新町遺跡，佐賀県久保泉丸山遺跡などの数10基から100基を越えるような大遺跡がほとんど完掘され，支石墓の構造を理解する上で大きな成果を得た。支石墓は一般的に薄葬であるため副葬品に乏しく編年的な位置づけに苦慮してきたが，これらの遺跡の調査によって，甕棺や供献された小形土器をもとにした精緻な土器編年が可能となった。

#### ③第３期　現在

第３期は1990年代つまり現在の段階で，島原半島で新たに西鬼塚遺跡で支石墓が検出された（村川1996）他，西彼杵半島北端の西海町天久保（あまくぼ）遺跡の調査が長崎県教育委員会（安楽1994），ついで九州大学（九州大学文学部考古学研究室1997）によって実施された。九州大学を主体とする「支石墓研究会」の精力的な活動がこの時期を支える原動力であった。また長崎県における調査事例としては宇久松原遺跡の緊急調査や主要遺跡範囲確認調査による原山遺跡・狸山支石墓群の調査など支石墓遺跡に的を絞った発掘調査も３遺跡を数えるなど，支石墓をめぐって新たな研究の一歩が踏み出されようとしている。

### (2) 長崎県における支石墓のあり方

現在長崎県において縄文時代晩期後半から弥生時代前期にいたる支石墓が検出された遺跡は13を数える(註4)。それらは県内各地にまんべんなく分布するわけではない。大陸との架け橋であった対馬・壱岐両島からは依然として発見の報がない。ここでは遺跡のまとまりから3つの地域に区分して支石墓のあり方の特徴を述べる。

**①県北地域の支石墓**

この地域は支石墓の密集地帯であり，遺跡数も7カ所にのぼる。宇久松原遺跡とは平戸島を介して至近距離にあり，その関係が注目されるところである。発掘調査が実施された遺跡は4つを数えるが，完掘されたのは農道工事に伴う江迎町小川内支石墓のみである。鹿町町大野台支石墓群，江迎町小川内支石墓，佐々町狸山支石墓の3遺跡は地理的にも近接しており，立地条件も眼下に沖積平野もしくは海岸線をみる標高25m～60mの丘陵あるいは丘陵先端に位置している。下部構造はいずれも箱式石棺であり，大野台支石墓群は3群60基程度と大規模であるが，小川内・狸山遺跡は10基程度のまとまりをもつ。出土する遺物は少ないが，大野台・狸山支石墓からは縄文時代の鰹節形大珠が出土しており注目される。この地域の支石墓の年代は佐世保市四反田遺跡の弥生時代前期後半（板付II a 段階）を除いて縄文時代晩期終末の夜臼式土器段階に該当する。

**②県央・西彼杵半島の支石墓**

この地域の支石墓は3カ所と少なく，しかも距離的に相当離れており分散している。そのあり方にも共通性はあまりないようである。西海町天久保支石墓は最近調査された遺跡で2群7基程からなり，箱式石棺が周辺に広がる。下部構造は方形に近い箱式石棺で，1基から碧玉製管玉15個が出土した。また出土した土器は夜臼式土器であり縄文時代晩期におくことができる。諫早市風観岳支石墓群は相当数の基数があるものと思われるが詳細は不明である。発掘された2基の下部構造はいずれも土壙であった。7号支石墓から夜臼式土器の小形壺および刻目突帯甕の口縁部が出土している。小長井町井崎支石墓は戦前の鉄道工事の際破壊されており詳しいことはわからないが，供献されていたという小形壺が保存されている。板付II式とされているが，きわめて夜臼式土器に近いものと思われる。

**③島原半島の支石墓**

この地域には縄文時代晩期の遺跡が密集するがその多くは中葉以前の時期で，支石墓を生み出した晩期終末の夜臼式土器を出土する遺跡はそれほど多くはない。支石墓は学史的に著名な原山遺跡と近年明らかになった西鬼塚石棺群の2遺跡にすぎない。なお島原市の景華園遺跡は大石の下から銅矛2点が出土しており，従来支石墓としてあつかわれることがあったが，時期的に中期に下がることや須玖岡本遺跡などの例からここでは標石墓とすることとし，分析の対象とはしない。

原山支石墓は戦後の開拓で発見されたもので，標高250mを測る丘陵に展開している。墓域は3群に分かれ総計100基を越す大規模な日本を代表する支石墓である。研究の初期の段階で調査され，多くの成果を上げるとともに問題点も指摘された。その一つが下部構造であり，もう一つが刻目突帯文土器（いわゆる原山式）の編年的帰属の問題である。前者についてはその箱式石棺の大きさが長さ90cm，幅50cm程度と小形であることから極端な屈葬で埋葬されたことが推測された。このことは屈葬という縄文の伝統を色濃く残すことを意味した。これについては国分直一および橋口達也の反論がある(註5)。

### (3) 各地の支石墓のあり方

#### ①糸島平野の支石墓のあり方

福岡県の支石墓の分布はほぼ糸島地方に限定されるといっても過言でない。そのあり方は1～10基程度の小規模な遺跡が普遍的な姿で，新町遺跡は例外的である。また支石墓は土壙墓・木棺墓などの墓制と混在することが通例で，支石墓の構築が終焉したのちも甕棺墓などの墓域として継続的に営まれる傾向が看取される。つまりこの地方では支石墓は連続する墓制のなかの一部分を占拠するもので

第15図　支石墓遺跡の分布図

| 番号 | 遺跡名 | 所在地 | | 時期 | | | 基数 | | 下部構造 | | | 供献・副葬品 | | | | | | 人骨 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 県 | | 縄晩弥早 | 弥生前期 | 弥生中期 | 群 | 基数 | 土壙墓 | 壺・甕棺 | 箱式石棺 | 磨製石鏃 | 小形壷 | 小形甕鉢 | 貝製品 | 管玉 | 鰹節大珠 | |
| 1 | 宇久松原 | 長崎県 | 北松浦郡宇久町 | ○ | | | 1 | 8＋ | 7 | 1 | | | ○ | ○ | ○ | | | 5体 |
| 2 | 田助 | | 平戸市大久保町 | | | | | 5 | | | | | | | | | | |
| 3 | 里田原 | | 北松浦郡田平町 | ? | | | 2 | 3＋ | | | 3 | | | | | | | |
| 4 | 小川内支石墓群 | | 北松浦郡江迎町 | ○ | | | 1 | 10 | | | 10 | | | | | | | |
| 5 | 大野台支石墓群 | | 北松浦郡鹿町町 | ○ | | | 4 | 70 | 1 | | | | | | | | | ○ |
| 6 | 狸山支石墓群 | | 北松浦郡佐々町 | ○ | | | 1 | 10 | | | | | | | | | ○ | |
| 7 | 四反田 | | 佐世保市下本山町 | | ○ | | 1 | 1 | | 1 | | | ○ | | | | | |
| 8 | 天久保 | | 西彼杵郡西海町 | ○ | | | | 5＋ | | | | | | | | 15 | | |
| 9 | 風観岳支石墓群 | | 諫早市・大村市 | ○ | | | | 20 | | | | | | | | | | |
| 10 | 井崎支石墓 | | 北高来郡小長井町 | | ○ | | | 2＋ | | | | | ○ | | | | | |
| 11 | 西鬼塚支石墓 | | 南高来郡有家町 | ○ | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | |
| 12 | 原山支石墓群 | | 南高来郡北有馬町 | ○ | | | 3 | 100 | | | | | | | | | | |
| 13 | 大友 | 佐賀県 | 東松浦郡呼子町 | | ○ | | 1 | 3 | 1 | | | | | | ○ | | | 1体 |
| 14 | 割石 | | 唐津市柏崎 | ○ | ○ | | | 6 | | | | | | | | | | |
| 15 | 迫頭 | | 唐津市宇木 | ○ | ○ | | | 3 | | | | | | | | | | |
| 16 | 葉山尻支石墓 | | 唐津市半田 | ○ | | | | 5 | | | | | ○ | | | | | |
| 17 | 岸高支石墓 | | 唐津市半田 | ○ | | | 2 | 9 | | | | | ○ | ○ | | | | |
| 18 | 森田支石墓 | | 唐津市宇木 | ○ | ○ | | | 16 | 16 | | | | | | | | | |
| 19 | 瀬戸口支石墓 | | 唐津市宇木 | | | | | | | | | | | | | | | |
| 20 | 徳須恵 | | 東松浦郡北波多村 | | | ○ | | 10 | | 10 | | | | | | | | |
| 21 | 五反田 | | 東松浦郡浜玉町 | ○ | | | | 5 | | | | | ○ | | | | | |
| 22 | 佐織 | | 小城郡三日月町 | ○ | | | | 1 | | 1 | | | | | | | | |
| 23 | 南小路支石墓 | | 佐賀郡大和町 | | ○ | | | 1 | | 1 | | | | | | | | |
| 24 | 礫石A・B | | 佐賀郡大和町 | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| 25 | 黒土原 | | 佐賀市金立町 | ○ | ○ | | | 8 | 8 | | | | ○ | | | | | |
| 26 | 久保泉丸山 | | 佐賀市久保泉町 | ○ | ○ | | 5 | 118 | 111 | 6 | 1 | | ○ | ○ | | | | |
| 27 | 四本黒木 | | 神埼郡神崎町 | | ○ | | | 1 | | 1 | | | | | | | | |
| 28 | 伏部大石 | | 神埼郡神崎町 | | ○ | | | 1 | | 1 | | | | | | | | |
| 29 | 戦場ケ谷 | | 神埼郡東脊振村 | ○ | | | | 1 | 1 | | | | | | | | | |
| 30 | 西石動 | | 神埼郡東脊振村 | | ○ | | | 1 | | 1 | | | | | | | | |
| 31 | 船石 | | 三養基郡上峰町 | | | ○ | | 2 | 1 | 1 | | | | | | | | |
| 32 | 香田 | | 三養基郡中原町 | ○ | | | | 1 | 1 | | | | ○ | | | | | |
| 33 | 小田支石墓 | 福岡県 | 福岡市西区 | ○ | | | | 2 | | | | | ○ | | | | | |
| 34 | 新町 | | 糸島郡志摩町 | ○ | ○ | | | 57 | ○ | ○ | | 1 | ○ | | | 2 | | 14体 |
| 35 | 志登支石墓群 | | 前原市志登 | ○ | ○ | | | 10 | 10 | | | 6 | | | | | | |
| 36 | 井田用会支石墓 | | 前原市井田 | | ○ | | | 1 | 1 | | | | | | | 22 | | |
| 37 | 石ケ崎 | | 前原市曽根 | | ○ | | | 1 | | | 1 | | | | | 11 | | |
| 38 | 三雲加賀石支石墓 | | 前原市三雲加賀石 | ○ | | | | 1 | 1 | | | 6 | | | | | | |
| 39 | 曲り田 | | 糸島郡二丈町 | ○ | | | | 1 | 1 | | | | ○ | | | | | |
| 40 | 石崎矢風 | | 糸島郡二丈町 | | ○ | | | 3 | ○ | ○ | | | | | | | | |
| 41 | 長野宮ノ前 | | 前原市長野 | ○ | | | | 2 | 1 | 1 | | | | | | | | |
| 42 | 年の神 | 熊本県 | 玉名郡岱明町 | | | ○ | | 1 | | | | | | | ○ | | | |
| 43 | 塔の本 | | 鹿本郡植木町 | | ○ | | | 2 | | | | | | | | | | |
| 44 | 藤尾支石墓群 | | 池郡旭志町 | | | ○ | | 9 | 3 | | | | | | | | | |

**第3表　支石墓遺跡地名表**

ある。橋口編年でいうと弥生早期の曲り田（古）式から曲り田（新）式段階および夜臼式段階とそれに後続する板付Ⅰ式・Ⅱ式の弥生時代前期の時期である。下部構造は土壙墓・木棺墓を主体にして，幼少児埋葬の大形壺を転用した甕棺などである。長崎県本土部にあるような箱式石棺や，佐賀平野に顕著な石蓋土壙などはみられない。

**②唐津平野の支石墓のあり方**

唐津湾に北流する松浦川の河口付近に注ぐ宇木川・半田川という小河川の流域にある沖積平野に面した丘陵の先端部に立地している。そのあり方は５基から10数基の支石墓が一群をなして存在する。下部構造は土壙がほとんどで、葉山尻遺跡・徳須恵遺跡の弥生中期の甕棺を除けば，夜臼式土器の壺棺が出土する。縄文時代晩期終末（弥生時代早期）に集中的に営まれている。

**③佐賀平野の支石墓のあり方**

背振山系から佐賀平野に伸びる丘陵の先端部が支石墓の墓域に選択されている。久保泉丸山遺跡・礫石遺跡のように大規模なものもある。下部構造は石蓋土壙が大部分であるが，小児用と思われる甕棺もある。後世の古墳造営によって上部構造は破壊されている場合が多く，上石の多くは残っていない。支石が確認できるものは約半数で，本来はすべての支石墓に支石を有していたものと考えられている。時期的には縄文時代晩期終末（弥生時代早期）から弥生時代前期後葉・中期にいたるものもあるが，概して平野部に位置するものが後出する傾向にある。

以上を要約するとつぎのようになろう。

| 地　　域 | 遺　跡　の　立　地 | 下　部　構　造 |
|---|---|---|
| 宇久松原遺跡 | 海岸近くの標高の低い砂丘 | 土壙墓＋大形壺の甕棺 |
| 県北地域 | 沖積平野や海岸を見下ろす丘陵 | 箱式石棺 |
| 県央・西彼杵半島 | 沖積平野や海岸を見下ろす丘陵 | 箱式石棺（主体）＋土壙墓 |
| 島原半島 | 高い標高の丘陵 | 箱式石棺＋土壙墓 |
| 糸島地方 | 標高の低い平野部 | 土壙墓・木棺墓＋大形壺の甕棺 |
| 唐津平野 | 沖積平野に突き出る丘陵の先端 | 土壙墓，甕棺墓 |
| 佐賀平野 | 沖積平野に突き出る丘陵の先端 | 石蓋土壙墓 |

**(4)　宇久松原遺跡の支石墓のあり方**

前項において長崎県内およびその他の地域の支石墓のあり方について，その内容を分析してきた。つづいて宇久松原遺跡の支石墓のあり方を検討してみたい。まず遺跡の営まれた地理的環境であるが，立地する場所は海岸部の砂丘地帯で標高は10m程度を測る。遺跡の北側には海岸を見下ろす丘陵が展開するが墓地としては選択されていない。他の地域では糸島地方を除くといずれも丘陵地帯が舞台であるのと対称的である。

本遺跡の初期段階つまり縄文時代晩期の墓地は支石墓と土壙墓の二者で構成される。墓域は砂丘の標高のやや高いところから選択的に利用されていったものと思われる。その後その墓域の周縁部に時期的に後出する弥生時代前期の墓地群が営まれる。つまり縄文時代晩期の支石墓とそれに続く弥生時代前期の墓地が複合する遺跡である。

また支石墓の基本的形態は碁盤形で下部構造は土壙墓であるが，支石をもたないものも，ある程度の比率を占める。支石墓に埋葬された人骨と同じ高さに埋葬された土壙墓の人骨はいずれも仰臥屈葬であった。熟年女性の一体はオオツタノハ製貝輪を装着しており，４Ⅰ２Ｃ型の風習的抜歯があった。その下位の壮年女性は４Ⅰ１Ｃ型の風習的抜歯をしており，いずれも縄文時代晩期人の特徴である低顔・低頭であった。一方，支石墓でも人骨は基本的に屈葬されており，土壙墓と同じような風習的抜

歯が看取されるものもある。また過去の調査で支石墓から検出された人骨にも風習的抜歯があり，オオツタノハ製貝輪を装着し，貝製の臼玉を足首に巻く（小田1970）など，今回の調査例と酷似する発見があった。このことは過去に調査された支石墓と今回の支石墓が一体のものとして理解すべきものであること，宇久松原遺跡の支石墓の時期が長期にわたらないこと，およびその数が10基を越えてもそう多くはならないことを予想させるものである。

## 第2節　宇久松原遺跡の位置づけ

### (1)　宇久松原遺跡支石墓の年代観の変遷

宇久松原遺跡の支石墓は桑山龍進による紹介および小田富士雄による報告によって知られることとなるが，残念なことに支石墓から供献土器などが出土しておらず，その時間的な位置づけについては周辺の遺構から類推するより方法がなかった。しかも1968年の調査では遺構配置の状況が明らかにされておらず，また1977年の県による調査では支石墓が検出されなかったことから，その年代について研究者間に齟齬を来すことになった。

1968年の調査を担当した小田は，宇久松原遺跡の支石墓の年代について明記はしていないが「この遺跡では副葬土器や壺・甕棺から弥生時代初頭（板付Ⅰ式）から中期前半に及び・・」（小田1970）とし，時期的に幅をもたせている。

下條信行は「宇久島の松原遺跡から，箱式石棺や甕棺とともに二基の支石墓が出土した。なかの一基から検出された男性人骨は，足首に貝製小玉を着装していたが，他の一基の女性人骨は，腕に南島産オオツタノハ貝の釧を着装していた。彼らは縄文的遺制を強く残した貝輪社会のなかに生存していることを示していたが，弥生中期初頭に位置づけられるらしい支石墓の下から，そのような風習を伝える人骨の出土をみたことは，新来の墳墓型式が旧来の社会のなかに受入れられた事を物語っていないだろうか。」とし，弥生時代中期までその年代を下げる。また人骨にみられる貝輪などを縄文的遺制の残存で理解した（下條1976）。

岩崎二郎は北部九州の支石墓の集大成をなした（岩崎1980）。宇久松原遺跡の年代については「箱式石棺墓は2基あり一号石棺墓には板付Ⅰ式小壺が副葬されていた。壺・甕棺墓は板付Ⅱ式が4基，城ノ越式が2基，後期に属するものが6基ある。支石墓の時期は不明であるが，小田富士雄氏は板付Ⅰ式土器の存在や五島列島において板付Ⅱ式以降に弥生文化が流入した小値賀島以南に支石墓がみられないことなどから，弥生初期に板付Ⅰ式文化が宇久島にはじめて流入したとき支石墓も流入したと考えておられる。」とし，小田の見解を引用しながら弥生初期という年代観を示した。さらに1987年の論考では「五島列島の松原遺跡では甕棺墓が配石墓や支石墓と共存している。墓地は板付Ⅰ式から中期前半に及ぶが，支石墓は前期末～中期初頭で埋葬主体は土壙とみられる。」とし（岩崎1987），前期末から中期初頭という年代を想定した[註6]。

こうした弥生時代前期から中期という年代観のぶれはひとえに年代決定の決め手となる支石墓に伴う土器が検出されなかったことに起因するものであり，支石墓の周辺から出土した甕棺（壺棺）の年代に依拠した結果である。

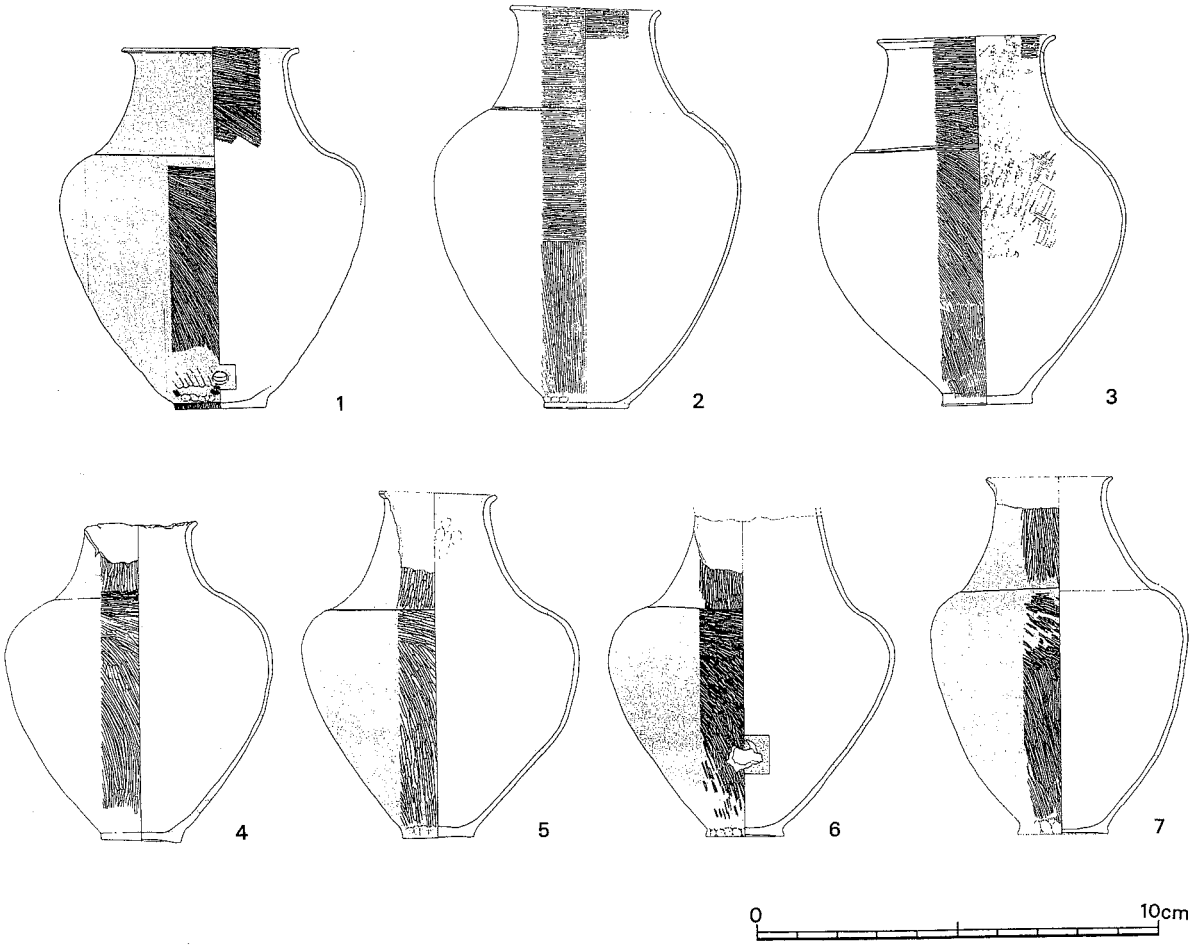
### (2)　宇久松原遺跡の編年的位置

#### ①1号支石墓の大形壺の系譜と編年

この大形壺棺の諸元をもう一度記しておく。口径28.0cm，器高57.9cm，胴部最大径48.1cm，口頸部長17.4cm，胴部最大径高33.0cm。薄い平底で，胴部は肩がつよく張る。頸部は胴部と段をなし，沈線

で区画したうえ，つよく内傾して伸びる。調整は口頸部から肩のうえまでが横方向のケンマののちナデ，肩から胴部下半まで斜め方向のナデ。丹塗磨研で，内面には口頸部にハケ，その下はナデている。

ここでは管見できる資料から数点の大形壺を抽出して数字的にその近縁性を追求してみたい。その計測値については藤尾慎一郎の壺の計測（藤尾1990）を踏襲して分析する。比較対象とした大形壺は，福岡県新町遺跡・佐賀県五反田遺跡・同県礫石B遺跡から出土したいずれも支石墓の下部構造で，藤尾のいういわゆる「埋葬専用」の壺である。氏によれば「早期の唐津・佐賀・島原半島・熊本に集中して分布する壺棺であり，日常用の広口壺とは形態的に大きくかけはなれた，長い胴部に狭く短い頸




**第16図　各遺跡出土の大形壺**

| | 宇久松原 | 新町20号 | 新町18号 | 五反田 | 礫石36号 | 礫石27号 | 礫石35号 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 口頸部率 | 28.5 | 26.6 | 28.8 | 23.4 | 33.3 | 32.3 | 31.0 |
| 最大径の位置 | 82.0 | 77.6 | 71.2 | 79.6 | 80.4 | 76.1 | 81.6 |
| 扁平率 | 72.0 | 67.8 | 82.4 | 67.9 | 74.3 | 80.0 | 63.8 |

**第4表　大形壺計測表**

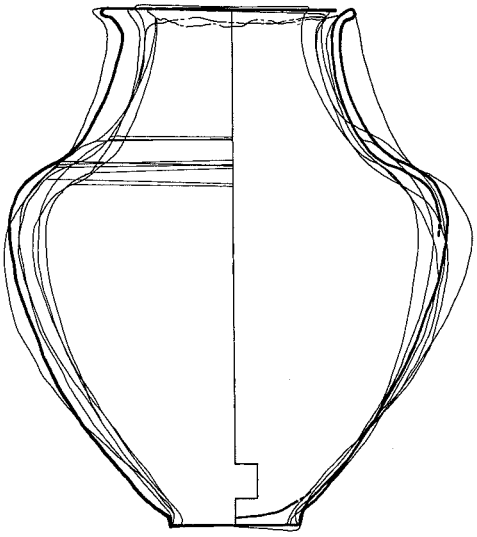
がつく器形を呈し，外面に赤色顔料を塗布する場合が多い。「長胴壺」と呼んでいる埋葬専用の土器である。この段階には壺棺が単独で墓地を構成することはほとんどなく，支石墓の内部主体として使われている場合が多い。」（藤尾 1990）としている。第16図にそれらの8分の1大の図を集成したが，器形や調整方法などよく似ていることが理解されよう。氏の計測に基くと本例は，肩が張る壺の系列に入り，大形壺$A_2$に該当するであろう。大形壺$A_2$は口頸部率が30％前後と$A_1$の20％前後からすると口

頸部が発達している。

橋口達也もまたこの大形壺について，曲り田（新）式から板付Ⅰ式の各段階における甕（壺）棺の編年を論じている。そのなかで板付Ⅰ式以前の夜臼式とされた資料のうち新町20号，同18号支石墓の下甕は本遺跡のそれとの近縁性を指摘できるものである。氏によれば「夜臼式の大形壺の特徴は口縁は外反し、頸の内傾度は弱くなり、頸と肩の境には段・沈線をつくる。胴部最大径は上半にあるが肩の張りもやや弱くなり次第になで形を呈してくるといえよう。長胴であるが口頸部の発達にしたがって次第に胴高は低くなる傾向にある。底部は平底を呈する。そのほとんどが丹塗り磨研が施されている。」という（橋口1992）。

まず新町遺跡との比較であるが，橋口によれば20号と18号の時間的関係は，20号が肩が強く張ることから古いものとする。本遺跡例と口頸部率はほぼ同じだが，最大径の位置の数値が小さくなで肩になる。扁平率では20号は小さく「長胴」を示すのに対し18号は横に張る。

宇久松原の例はそのちょうど中間である。丹塗磨研で調整方法は宇久松原と18号はほとんど同じである。こうしたことから新町20号→宇久松原→新町18号という変遷が考えられる。ところで18号は橋口によれば夜臼式土器最終末に位置づけられるもので，研究者によってその編年的位置が異なる問題となっている土器である。ここでは宇久松原遺跡の資料がこの位置にはいることが重要であり，明確に夜臼式土器段階と認識できることを指摘したい。



**第17図　大形壺の形状比較**

次に礫石Ｂ遺跡36号支石墓の壺は，宇久松原遺跡のそれと比較すると口頸部率は30％を上回っているものの，最大径の位置や扁平率は近似している。全体の器形および調整方法も酷似している。

これらの壺を藤尾論文（藤尾1990）の図５にあてはめてみると，宇久松原遺跡と礫石Ｂ遺跡の壺が$A_2$グループに属し，ほかはそのまとまりから分散する傾向にある。ところでこの$A_2$グループの編年はどうであろうか。藤尾編年ではこのグループの大形壺はII期に該当する。藤尾編年のII期は山崎編年の夜臼IIａ式・中島編年の夜臼式単純・橋口編年の夜臼式の古い部分に対応するらしい。とすれば少なくとも板付Ⅰ式の登場以前と考えてもおかしくはない。しかしこの大形壺の編年については議論の分かれるところであり，未だに決着を見ていない(註7)。第17図には比較した土器を宇久松原遺跡のものと同じ大きさになるように拡大縮小してそれらのプロポーションを重ね合わせたものである。この図からもこれらの土器の近縁性をみてとることができよう。

**②３号支石墓の二条甕の編年**

ここでも刻目突帯文土器の二条甕の詳細な分析をとおして該期の編年まで論じた藤尾の業績を援用する（藤尾1990）。氏は甕形土器を形態と文様から４類８種に分類する。二条甕はIII類とされ，さらに４つに細分されている。

宇久松原遺跡の二条甕は，３号支石墓の上石の下から出土したもので，その形態から氏のIIIＡ類に該当する。屈曲する小形の甕で屈曲部と口唇部に二条の刻目突帯文をもつ。刻目はヘラ状工具による押引き。器高12.3cm，口径11.8cm，屈曲部に最大径をもち14.0cmを測る。底部は貼り付けがなされ，直径6.0cmを測る。調整は器表面は口縁部がナデ，屈曲部から下位には横位の条痕ナデ消しを施し，底部付近はナデとなる。内傾する口頸部に籾圧痕が付されている。

この土器の属性を抽出すると，

(1)器形はa（屈曲する），(2)突帯の位置と大きさはb，(3)刻目の施文法は押し引き法，(4)突帯の大きさは「同」，(5)器面調整は二次調整，(6)突帯調整の有無は無し

いまこのデータを藤尾論文の西北九州地域IIIA類バリアントにあてはめると，量的にもっとも多い$A_2$バリアントに属する。この$A_2$グループの入る編年的位置は，藤尾編年ではII期にあたる。

以上，大形壺と刻目突帯二条甕の2点の土器をもとにしてその編年的な位置について検討した結果，両者はいずれも藤尾編年のII期に該当することが確認された。両者が近接しており同一の墓域内からの出土であることから，この両者の間に時間差があまりないものと思われる。またその他の供献土器，例えば6号支石墓の脇から出土した口縁部が屈曲する甕形土器や同じく6号支石墓の砲弾形を呈する甕形土器などもほぼ同じ時期か，若干古く位置づけることができよう。こうしたことから判断して，今回の調査で検出した支石墓およびその他の遺構については板付I式土器以前の夜臼式土器の単純段階で縄文時代晩期終末と考えられる。

### (3) 宇久松原遺跡支石墓の出自と系譜

#### ①日本支石墓の系譜

日本においては北九州西半とくに長崎・佐賀・福岡に分布する支石墓は，縄文時代の墓制から出現したものでなく，朝鮮半島から招来したものであることは疑いようのない事実である。

森貞次郎は日本の初期の支石墓を碁盤形を呈するものとし，韓国の南方第III式にあたるとし，それが朝鮮半島西南部の全羅道に集中するとした（森1969）が日本への経路には触れなかった。西谷正は下部構造の箱式石棺に注目して，原山遺跡C群第3号墓などは朝鮮半島西南部との関連があると強調する。そしてその経路として，

a．東南部から対馬・壱岐を経由して西北九州にいたる北方説

b．西南部から済州島を経て西北九州へいたる西方説

の2案を示し，aには経路にあたる壱岐・対馬から支石墓が発見されていないという難点があることを指摘したうえで，bは当時の航海技術では困難でありほかに物証もないことから，aの北方説を想定するとした。そして弥生時代に入ると，下部構造が土壙墓になることや糸島地方の志登支石墓のように半島から舶載した有茎式の磨製石鏃などを副葬するなど，朝鮮半島東南部とのつながりが強くなるとした（西谷1980，1997）。

西方説を想定するのが本間元樹である。氏は長崎県西北部の支石墓をもっとも古い段階に位置づける。その根拠として時期がほぼI期（従来の縄文時代晩期終末で，橋口のいう弥生時代早期）に限定されること，支石墓のみで構成し，ほかの墓制と複合しないこと，下部構造が石棺であることなどをあげる。そして「朝鮮半島と北部九州の間の支石墓であるが，現状では対馬・壱岐の両島では発見されて」いないことから北方経路をとらず，「朝鮮半島の支石墓の分布が，半島の西側に偏在している」ことから考えて「朝鮮半島最南部の全羅南道地域から，済州島を経由して長崎県の北西部へ」という経路を想定する（本間1991）。その時期は半島では支石墓制の末期にあたり，日本に流入した支石墓は長崎県北西部を起点として，東は唐津平野・糸島半島へ，南は島原半島などへ拡散し，その過程で徐々に在地の墓制に組み込まれたとし，支石墓の日本への波及は一系であるとした。

森田孝志は，「五島列島宇久島の松原遺跡から初期の支石墓が多数発見されていることから，支石墓が五島列島を経由してわが国へ伝来し，ごく短期間のうちに北松浦半島・島原半島・唐津地域・糸島半島・佐賀地域に広がったと考えるほうが無理がないように思える」とする（森田1997）。本間の説か

ら一歩進んで五島列島の地理的位置に注目しての論考である。

日本の支石墓の基本的な形態である碁盤形が朝鮮半島西南部に分布の中心があることを考えれば，西方説は理解しやすいところもあるが，半島西南部あるいは済州島からの距離は200kmを越えることから通常の往来を想定することは困難で，不時的な漂着の可能性が指摘できる程度であろう。また西谷が指摘するように長崎県西北部と朝鮮半島西南部もしくは済州島との交流を示す遺物がまったく存在しないこともこの経路をとったとすることに否定的な材料である。また供献土器などからみて宇久松原遺跡の編年的位置は支石墓として最古期におくことはできないことから森田の説にもいま一歩説得力がない。たしかに対馬・壱岐両島には支石墓はみられない。それどころか縄文時代晩期後半の遺跡は皆無ではないが，きわめて少ない。この時期にはこの地域は半島と九州の中継地としての性格よりも通過地点と位置づけたほうが良さそうである。とりあえずここでは西谷説を支持しておきたい。

**②宇久松原遺跡支石墓の出自と系譜**

宇久松原遺跡は海岸部の砂丘地帯に営まれた縄文時代から弥生時代後期にわたる息の長い墓地である。県内の支石墓が丘陵もしくは丘陵先端部に占地する傾向が強いなかで異質な感じが強い。類例としては呼子町大友遺跡(註8)や福岡県新町遺跡・志登支石墓などがあげられよう。とくに大友遺跡は砂丘地帯という条件も同じである。また支石墓は基本的には碁盤形を呈し，下部構造は土壙墓もしくは大形壺を使う甕棺である。箱式石棺が主流をなす県本土部とは大きな差異である。遺跡周辺には箱式石棺の素材となる板石は無数に存在するがそれを使用していない。

砂丘地帯は人骨の保存も良好であることが多い。支石墓で人骨が検出されたのは本遺跡と大友遺跡・新町遺跡であるが，検出された人骨は屈葬されており低顔・低頭の縄文人の系譜をひくものである点で共通している。時期的には宇久松原遺跡と新町遺跡の例が縄文時代晩期終末（弥生時代早期）であり，大友遺跡は若干後出する弥生時代前期とされるが夜臼段階までさかのぼる可能性もある。

県本土部は支石墓のみで構成される遺跡がほとんどである。本遺跡は墓域を移しながら縄文時代晩期終末から弥生時代まで続く複合的な墓地である。こうしたあり方は糸島地方や唐津地方に普遍的にみられるものである。さらに１号支石墓の大形壺を使った甕棺について，夜臼式土器に入ることが明らかなこの土器は県本土部には出土例が皆無である。支石墓分布圏の東半部に一般的にみられるものである。そのほか宇久松原遺跡から出土した土器には藤尾編年のⅠ期，橋口編年の曲り田段階にあたるものは認められないことから，本遺跡を最古期の支石墓とすることはできない。

こうした要素をもとに考察すれば，距離的にもっとも離れた糸島地方の支石墓と宇久松原遺跡の共通項が多いのではなかろうか。佐賀県呼子町大友遺跡の支石墓のあり方にも共通するものが多い。想像をたくましくすれば玄界灘を介した海上ルートの存在を想定することも可能ではないだろうか。

**③朝鮮半島系丹塗磨研小壺について**

６号支石墓に供献されていたこの土器は器形や調整方法，特異な底部などわが国では未だに出土例を聞かない。この土器は朝鮮半島においても同一のものを見いだすことができないところから，その系譜については不明なところが多い(註9)。この土器についてのデータをまとめると次のようになる。

半島系とみられる要素

・倒卵形を呈する器形

・器表面の調整が丹塗磨研であり，薄い黒斑もある

縄文系とみられる要素

・胴部内面調整が二枚貝を使った強い横方向の条痕

どちらともいえない要素

・底部の形状

この壺は，縄文時代晩期終末の夜臼式土器のなかに見いだすことができず，全体の器形が倒卵形を呈することから片岡宏二のいう「松菊里型甕」にあたるものであろう。氏によると「松菊里型甕」の概念は「中期無文土器に見られる壺とも甕ともつかない樽型の胴部に緩やかに外反する口縁を持つ土器」である（片岡1990）とし，その年代としては縄文晩期から弥生時代前期におくことができることを指摘した。さらに「日本出土の松菊里型甕を半島との関連でとらえるべきかどうかで諸意見あるが，私は当時の土器組成にこのタイプの器形が無いことや日本からの出土時期が断面円形の朝鮮系無文土器出現直前に整合することなどから半島の土器に系譜を求めるべき」とした（片岡1990）。こうしたことから本遺跡出土の小壺が半島の系譜をひくであろうことは推測される。ではそのあり方はどうであろうか。小壺は胴部内面の調整方法などからみて相当に日本ナイズされていることは確実であり，半島からの搬入品である可能性はほとんどないものと思われる。考えられる可能性としては，宇久松原遺跡の縄文人が半島系小壺の器形や器面調整などの情報を伝達され，それに基づいて製作したものの情報が欠落した胴部内面の調整は旧来の縄文的なものとなったと推測される。

### (4) 宇久松原遺跡の墓域の推移

宇久松原遺跡は墓地の構造を過去3度の調査を総合すると時期別分布図を描くことができる。

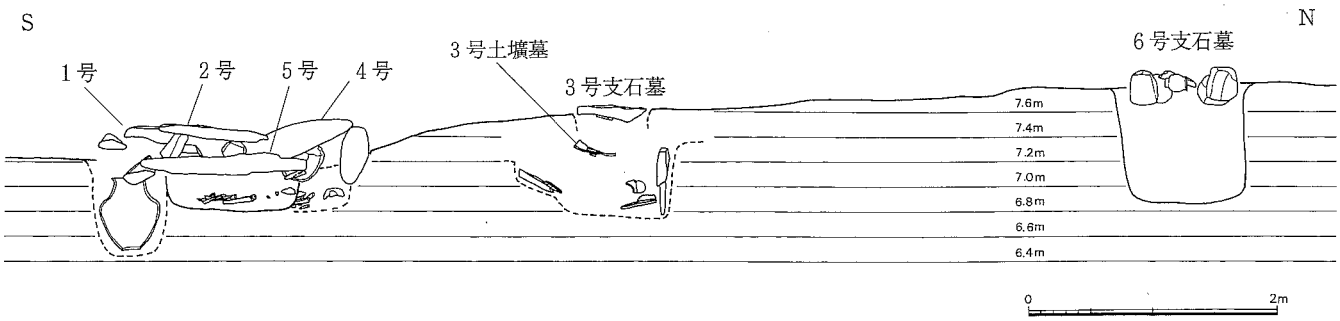
【第1期】墓域が形成され始めた時期で，縄文時代晩期後半の夜臼式土器の段階である。その分布は神島神社社殿北側から神社西側の民家一帯で，本遺跡において標高の高い部分を占拠する。支石墓を主要な埋葬主体として土壙墓・甕棺墓からなる。

【第2期】弥生時代前期の時期で，神島神社の境内を中心に第1期の地域の南側（海岸側）を取り囲む区域で，甕棺墓・箱式石棺からなる。

【第3期】弥生時代中期から後期の時期で，神島神社境内に分布し第2期の地域と重なり合い，前期の遺構に切り合っている遺構も少なくない。

本遺跡では墓域の形成が標高の高い地域から始められ，順次，時代を追って海岸部へとその標高を下げていくことは，時期別の分布図をみると一目瞭然である。この墓地を形成した集落の候補地は砂丘上には見あたらず，宮崎が指摘するように後背の丘陵がもっともふさわしい（宮崎1983）。そうすれば地理的にもっとも近いところから墓地形成が始まったと解されよう。また第1期の墓域が後世の遺構による切り合いを受けていないことも特筆されよう。支石墓はその形態から地表上に上石という象徴的なものをもつことから遺構同士の切り合いが認められないことは当然であろう。この地域が占地されてその周辺に墓域が拡大していく第2期には，地表上に標識的なものはなくなりすべて地下に埋設されるようになる。そのために遺構同士の切り合いも当然多くみられることとなる。

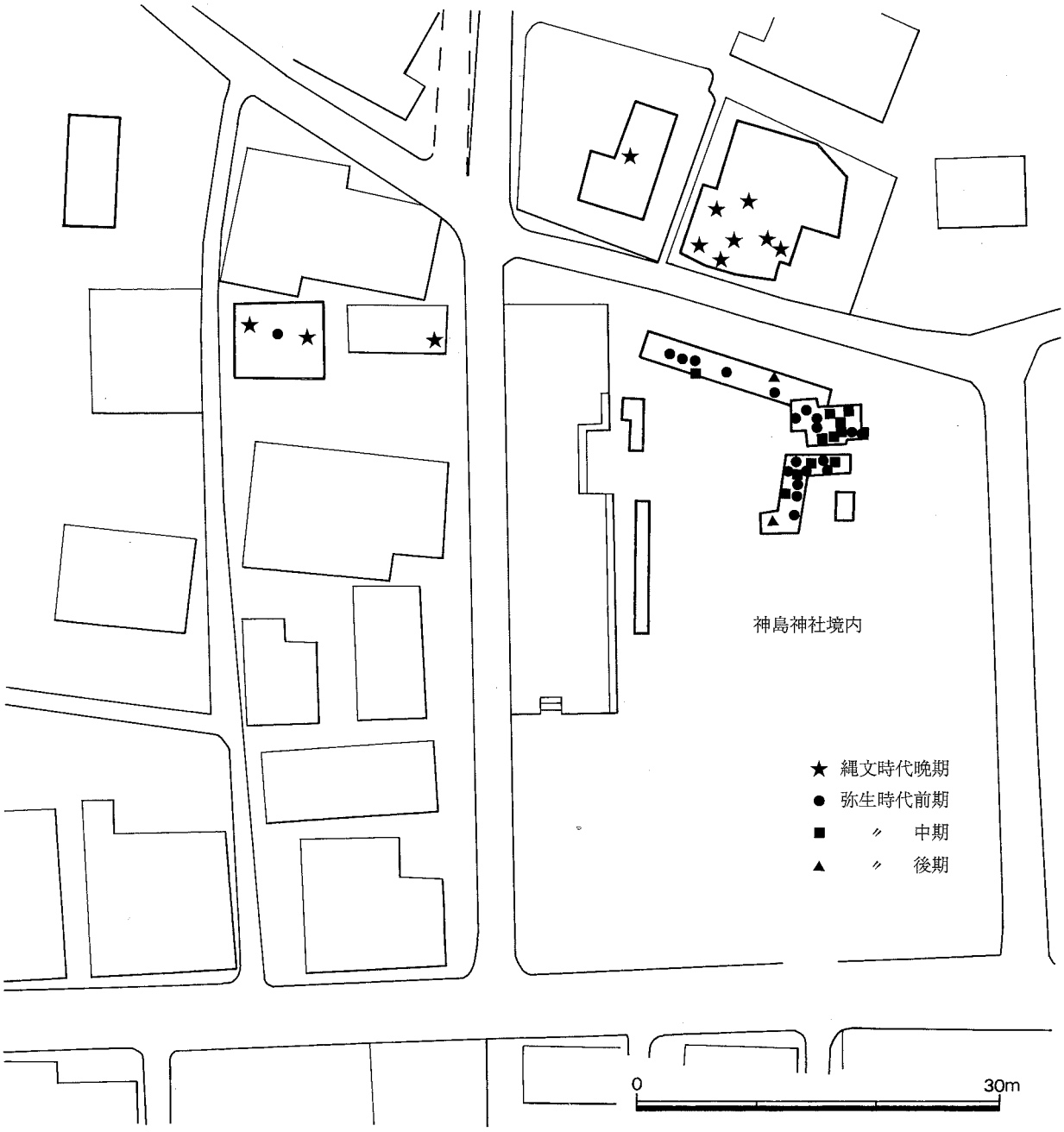
6号支石墓はすでに上石が除去されているものの，本遺跡の支石墓のなかでは特異な地位にあり，




**第18図　宇久松原遺跡の遺構垂直分布**

次のような点でほかの支石墓とはその性格が峻別される。第一にもっとも標高が高く，支石の上面で7.8mを測る。第二に供献された小形土器が朝鮮半島系の無文土器の影響を受けた小壺と小形の甕の2個体と一条甕の大破片があったこと。第三に埋葬された人骨が頭骨のみの検出ではあったが熟年男性でしかも相当な深度があったこと。第四にこの周囲には支石墓などの遺構が構築されておらず径5mほどは空白地帯となることなどがあげられる。こうした点からみてこの支石墓の被葬者が生前占めていた地位が問題となろう。

宇久松原遺跡はその全貌を調査したわけではなく片鱗を垣間みたに過ぎない。神島神社境内を中心に墓域はかなりの広がりをもつことが想像される。しかし支石墓は時期的な制約もあり，その分布する範囲は神島神社の北側から西側にかけての限られた範囲で収まるものであろう。




**第19図　宇久松原遺跡の時期別遺構分布図**

（資料提供　長崎大学医学部解剖学第二教室）

# 第V章　総　　括

## (1) まとめ

宇久松原遺跡の所在する宇久島は，九州西北端の五島列島の最北に位置し，行政的には北松浦郡に属する。宇久島の周囲は37.7km，標高258mの城ヶ岳を頂点とする低平な溶岩台地の島である。北部海岸には急峻な海蝕崖が形成されているが，南海岸には半島部と砂丘が交互に展開する。遺跡は島の南東側の標高6～9mの南面する砂丘に営まれ，南側に緩く傾斜し高度を下げながら海へと続いている。遺跡はもともと弥生時代の墓地として有名で，過去には昭和43年および昭和52年に調査されており，支石墓2基，甕（壺）棺29基，石棺墓5基，土壙墓5基の埋葬遺構が検出され，時期的には弥生時代前期から中期前半に位置づけられている。また砂丘遺跡のため人骨の保存状態も良好であった。

今回の発掘調査では，支石墓6基，板石挟み墓1基(註10)・甕棺墓1基，土壙墓3基の計10基の埋葬遺構を検出した。支石墓は，4個の支石の上に上石を載せる碁盤形のものと支石をもたないものの2種類がある。前者が4基，後者が2基を数える。下部構造は，大形壺を使った甕棺が1基のほかはすべて土壙墓である。残念ながら砂層のために土壙などの構築面をとらえることができなかった。

1・2・4・6号支石墓は碁盤形支石墓である。1号は支石に比べて上石が極端に小さい。下部構造は精巧な作りの丹塗りの大形の壺棺で，山崎編年の夜臼II a段階のものと思われる。蓋には大きめの角礫を使用する。2号・4号・6号支石墓の下部構造は土壙であり，4・6号からは人骨が検出された。4号は壮年女性で，屈葬されていた。支石の間にアワビ貝が供献されていた。6号支石墓は少し離れたところに検出された。標高がもっとも高く，山側に位置する。供献された3個体の土器があった。人骨は，保存状態は悪いものの，今回検出された人骨では唯一の男性であった。

3・5号支石墓は支石をもたない支石墓で，下部構造は土壙である。3号には二条の刻目突帯文をもつ小形の甕が供献されていた。この土器には籾圧痕が明瞭についていた。5号からは屈葬された成人女性人骨が出土した。

本遺跡の支石墓の大きさは周辺の遺跡のものと比較すると概して小振りである。また下部構造についても長崎県内の他の支石墓が石棺を基本とするのに対して土壙であり，糸島平野・唐津平野と様相を同じくする。

土壙墓から発見された2体の人骨は保存状態が良好であった。1号土壙墓の人骨は熟年女性で，やや横向きに屈葬され，両腕に各2個の南海産のオオツタノハの貝輪が装着されていた。2号土壙墓の人骨は仰臥屈葬された壮年女性である。2体には下顎の切歯および犬歯を抜く縄文的な抜歯がみられることや，支石墓などとの位置関係および埋葬された層位からみて縄文時代晩期後葉に属するものと考えられる。

遺物には，支石墓の下部構造の壺棺と供献された各種の小形土器がある。いずれも縄文時代晩期後葉の夜臼式土器の段階のものである。器形は変化に富み，壺形・甕形などがある。6号支石墓に供献されていた丹塗り磨研の小壺は，器形が倒卵形を呈しており朝鮮半島の無文土器と深い関係があるものと思われるが，台状の底部や内面の貝殻条痕など縄文的な要素も色濃く併せもっている。朝鮮半島系の土器が在地化したものと思われるが類例がなく、その系譜は朝鮮半島に求められるものと推測される。そのほかの供献土器としては，口縁部が屈曲する甕，同じく口縁部が屈曲するもので，口唇部と屈曲部の二条の刻目突帯文をもつ甕，砲弾形で口唇部に一条の刻目突帯文をもつやや浅い甕，一条の刻目突帯文をもつ甕などがある。いずれも縄文時代晩期後葉の夜臼式系土器の範疇に入るものであろう。

### (2) ま と め (ハングル版)

宇久松原遺蹟은 九州서북단 五島列島의 가장 북쪽에 있는 宇久島에 위치하며 행정상으로는 長崎縣 北松浦郡에 속한다. 宇久島는 주위가 37.4km이며, 표고 258m의 城ケ岳을 정상으로 하는 저평한 용암대지의 섬이다. 북부해안에는 가파른 海蝕崖가 형성되어 있으나 남해안에는 半島部와 砂丘가 전개되고 있다. 유적은 남동측 표고 6~9m의 사구에 형성되어 있는데 남쪽으로 약간 경사지고 고도가 낮아지면서 바다로 이어지고 있다. 유적은 이전부터 弥生時代의 墓地로서 유명하다. 과거 1968년·1977년에 조사되어 支石墓 2기, 甕(壺)棺 29기, 石棺墓 5기, 土壙墓 5기의 매장유구가 검출되어, 시기적으로는 弥生時代 전기부터 중기전반에 해당한다. 또한 砂丘유적인 관계로 인골의 보존상태도 양호하다.

이번 발굴조사에서는 支石墓 6기, 板石으로 둘러싸인 墓 1기, 甕棺墓 1기, 土壙墓 3기, 計 10기의 매장유구가 검출되었다. 支石墓는 2종류가 있는데 4개의 支石위에 上石이 놓여진 碁盤形 4기와 支石이 없는 것 2기가 검출되었다. 하부구조는 大形壺을 사용한 甕棺 1기외에는 모두 土壙墓이다. 유감스럽게도 砂層이라서 土壙등의 構築面을 확인할 수 없었다.

1·2·4·6호 支石墓는 碁盤形支石墓이다. 1호는 支石에 비해 上石이 매우 작다. 하부구조는 정교하게 만들어진 丹塗大形甕棺으로 山崎편년의 夜臼Ⅱa단계로 추측된다. 蓋에는 큰 角礫이 사용되고 있다. 2호·4호·6호 支石墓의 하부구조는 土壙으로 4·6호에서는 인골이 검출되었다. 4호의 매장주체는 壯年女性으로 屈葬되어 있으며 支石 사이에는 전복이 供獻되어 있었다. 6호 支石墓는 좀 떨어진 곳에서 검출되었다. 표고가 가장 높고 산쪽에 위치한다. 토기 3점이 供獻되어 있었다. 인골의 보존상태는 좋지 않지만 이번에 검출된 인골중에서 유일한 남성이다.

3·5호 支石墓는 支石이 없는 支石墓로 하부구조는 土壙이다. 3호에는 2條刻目突帶文의 小形甕이 供獻되어 있었으며 이 토기에는 籾壓痕이 선명하게 남아 있다. 5호에서는 屈葬된 성인 여성인골이 출토되었다.

본유적의 支石墓 크기는 주변 유적과 비교했을 경우 대체로 작은 편이다. 또한 하부구조에 있어서도 長崎縣內의 다른 支石墓가 보편적으로 石棺임에 비해 이 유적의 支石墓는 土壙이며, 이는 糸島平野·唐津平野와 같은 양상을 나타내고 있다.

土壙墓에서 발견된 2체의 인골은 보존상태가 양호하다. 1호 土壙墓의 인골은 熟年女性으로 약간 옆으로 屈葬되어 있으며 양팔에는 각각 2개의 남방계 오츠타노하(オオツタノハ)貝輪이 장착되어 있었다. 2호 土壙墓의 인골은 仰臥屈葬된 壯年女性이다. 2체에는 下顎의 切齒 및 犬齒를 빼내는 拔齒가 보이며 支石墓등과의 위치관계 및 매장된 층위로 보아 縄文時代晩期後葉에 속한다고 본다.

유물에는 支石墓 하부구조의 甕棺과 供獻된 각종 소형토기가 있다. 어느것이나 縄文時代晩期後葉의 夜臼式土器 단계의 것이다. 기형은 다양하며 壺形·甕形등이 있다. 6호 支石墓에 供獻된 丹塗磨研小壺는 기형이 倒卵形이며 한반도의 무문토기와 깊은 관계가 있는 것으로 생각되나 굽다리모양의 底部나 내면의 貝殼條痕등 縄文的인 요소도 함께 강하게 남아있다. 한반도계 토기가 在地化된 것으로 생각되나 유례가 없고 그 계보는 한반도에서 찾을 수 있다고 추측된다. 그밖에 供獻토기로서는 口緣部가 굴곡되는 甕, 구연부가 굴곡되면서 口唇部와 굴곡부에 2條의 刻目突帶를 갖는 甕, 砲彈形으로 口唇部에 1條의 刻目突帶를 갖는 약간 얕은 甕, 1條의 刻目突帶文을 갖는 甕등이 있다. 어느것이나 縄文時代晩期後葉의 夜臼式系土器의 범주에 속하는 것으로 본다.

## [註]

**註1**　支石墓の上部構造である上石は，従来撑石と表記されることが多かった。ところでこの撑石は本来「支石」を指す語であるところから最近では支石墓研究会などで撑石の表記をさけ上石で統一しようという方向が打ち出されている。ここではそれに従うこととする。

**註2**　福岡県新町遺跡は本遺跡と同じく砂丘に営まれた支石墓を含む大規模な墓地であり，砂層に掘り込んだ土壙が明瞭に残されていた。ところが宇久松原遺跡では散水などの方法をこころみたが結果は思わしくなく，遺構の掘り方の検出はできなかった。これは今回に限ったことではなく，過去の調査においても同様であった。

**註3**　オオツタノハ Penepatellaoptima(PILSBRY) は腹足綱ツタノハガイ科に属し，奄美以南に棲息する南海産の巻貝である。熊本大学木下尚子教授の教示によれば，縄文時代のオオツタノハ貝を使った貝輪は九州には例はなく，関東・東北地方にその類例を認められるがそれらは伊豆七島あたりから供給されたもので，南海地方からのものではない。西北九州地方でオオツタノハの貝輪を出土した遺跡は宇久松原遺跡および佐賀県大友遺跡の2遺跡のみである。

**註4**　この数字は夜臼式土器を出土する当該期の遺跡数からすればそれほど多いものではない。支石墓は当時の一般的な墓制であった可能性は低いものと思われる。長崎県内に限定すれば，福江市白浜遺跡，佐世保市宮ノ本遺跡などの例が示すように縄文時代晩期終末夜臼式土器段階では土壙墓が一般的であったといえよう。

**註5**　箱式石棺の規模が成人の伸展葬はもとより屈葬においても埋葬できないほど小形であるとし，その克服のために国分は一旦別の場所に葬られた遺体を改めて支石墓に埋葬したとする再葬説をとる。

一方橋口達也は縄文時代後期後半の西平式段階に甕棺葬が始まることや晩期の埋葬人骨の出土例がきわめて少ないこと，福岡県浄土院遺跡（縄文後期後半）の甕棺から成人女性の火葬骨が出土したことなどから，九州の縄文時代後・晩期の墓制は火葬が一般的な姿であったとする（橋口1995)。それは日本に支石墓が導入された当初まで残存するとし，その例証として福岡県曲り田遺跡と原山遺跡をあげる。小形の箱式石棺への成人の埋葬は困難であるという理由である。橋口によれば支石墓の導入直後に葬制は大きな日本的変容を遂げるとする。そのあり方は，福岡県新町遺跡の支石墓の下部構造にみられ，成人は木棺墓に，乳幼児は甕棺に埋葬するようになる。しかも成人は屈葬で，縄文的な抜歯が認められるなど変容したその姿はきわめて縄文色の濃いものである。

縄文時代後晩期の葬制は火葬一色ではなく，坂本嘉弘がいうように「火葬もあるが屈葬を主とする土壙墓もまた普遍的であった」(坂本1997) とする見解が妥当であろう。

原山遺跡のような小形の箱式石棺については，外海町出津遺跡の例からみてもわかるように，長崎県に分布する支石墓の箱式石棺に十分に埋葬できるものである。また支石墓の下部構造に大形壺棺を使用する甕棺墓が相対的に少ないことからみて，規模の小さい石棺は小児用として大過ないものと思われる。

**註6**　田崎博之はこの土器を板付Ⅰ式古段階においている。また礫石B遺跡の報文を執筆された田平徳栄はこの種の大形壺を板付Ⅰ式に並行する土器であり，板付Ⅰ式をもたない佐賀平野では弥生時代に入る夜臼土器との認識をしている。

**註7**　岩崎によれば「長崎県地方では支石墓に鰹節型大珠や土偶など縄文的遺物」が伴い，また「支石墓の埋葬主体の大きさから他地域に比べ屈葬の度合いが強いなど縄文的要素は長崎県の支石墓に最も強く残って」おり，一方「唐津地方や背振南麓の土壙は規模が大きくなり，遺物も佐賀県の支石墓は縄文的色彩が相対的に希薄である」という。さらに岩崎は「糸島平野になると朝鮮半島直系の遺物」が出土し，「ここを中心に佐賀県，その外延に長崎県という同心円的構造をなし周辺部へ行くほど縄文的要素が強くなる」とし「稲作技術をもたらした渡来者集団がしだいに縄文社会のなかに拡散していく」姿ととらえ，同心円論を説く。

**註8**　呼子町大友遺跡の支石墓は宇久松原遺跡とその性格がよく似ている。遺跡は砂丘に営まれ，弥生時代前期の箱式石棺を主とするが，3基の支石墓が検出されている。弥生時代前期とされる57号支石墓は良好な状態で残って

おり，上石を合計13個の支石が円形に配置されて支えていたらしい。下部構造は土壙墓で，性別不明の壮年人骨が仰臥屈葬されていた。この人骨には，上顎の犬歯を抜くO型の風習的抜歯がみられ，ゴホウラおよびタマキガイ製の貝輪が装着されていた。

**註9**　第15回支石墓研究会の席上でこの土器を参加者の方々に実見していただいた。その時の意見としては半島系とするもの，夜臼系の土器とするものなど，まちまちな見解であった。

**註10**　3号土壙墓のことである。あたかも板石で挟むような構造のために，調査時点で呼称していたものである。

## ［引用・参考文献］


安楽勉編1980『白浜貝塚』（福江市文化財調査報告書第2集）福江市教育委員会

岩崎二郎1980「北部九州における支石墓の出現と展開」『鏡山猛先生古稀記念　古文化論攷』

岩崎二郎1987「支石墓」『弥生文化の研究』8　雄山閣出版

岡部裕俊1989『長野川流域の遺跡群Ⅰ』（前原町文化財調査報告書第31集）前原町教育委員会

小田富士雄1970「五島列島の弥生文化総説編」『長崎大学人類学考古学研究報告』第2号

小田富士雄1974「大野台遺跡－縄文晩期墳墓群の調査－」『古文化談叢』第1集

小田富士雄・韓炳三編1991『日韓交渉の考古学　弥生時代編』六興出版

片岡宏二1990「日本出土の朝鮮系無文土器」『古代朝鮮と日本』古代史論集4　名著出版

唐津市周辺遺跡調査委員会編 1982『末盧国－佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究－』六興出版

川道寛1996「速報・長崎県北松浦郡宇久松原遺跡の調査」『考古学ジャーナル』411　ニューサイエンス社

甲元真之1978「西北九州支石墓の一考察」『熊本大学法文論叢』41

甲元真之1980「朝鮮支石墓の再検討」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』

後藤直1987「朝鮮系無文土器再論－後期無文土器系について」『東アジアの考古と歴史』岡崎敬先生退官記念論集

坂田邦洋1978「長崎県・小川内支石墓発掘調査報告」『古文化談叢』第5集

坂本嘉弘1997「九州における縄文時代の葬制」『古文化談叢』第37集

下條信行1976「韓から飛んできた石」『北部九州の古代文化』　明文社

正林護1976「小長井町の先史・古代」『小長井町郷土誌』

正林護・高野晋司1981『国指定史跡原山支石墓群　環境整備事業報告』北有馬町教育委員会

正林護1983『大野台遺跡』（鹿町町文化財調査報告書第1集）鹿町町教育委員会

高野晋司1979「長崎県の支石墓」『考古学ジャーナル』161　ニューサイエンス社

高野晋司1975「考察」『風観岳支石墓群調査報告書』（諫早市文化財調査報告書第1集）諫早市教育委員会

田川肇編1975『風観岳支石墓群調査報告書』（諫早市文化財調査報告書第1集）諫早市教育委員会

田崎博之1994「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会

田中良之1986「縄文土器と弥生土器－西日本－」『弥生文化の研究』4　雄山閣

田平徳栄1989『礫石遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（9）（佐賀県文化財調査報告書第91集）佐賀県教育委員会

田平徳栄1990「佐賀県の支石墓」『アジアの巨石文化－ドルメン・支石墓考－』

中島直幸1982『菜畑遺跡』（唐津市文化財調査報告書第5集）唐津市教育委員会

中島直幸1982「初期稲作期の凸帯文土器」『森貞次郎博士古稀記念　古文化論集』上

中橋孝博1990「渡来人の問題－形質人類学の立場から－」『古代朝鮮と日本』名著出版

西谷正1980「日朝原始墳墓の諸問題」『東アジア世界における日本古代史講座』1　学生社

西谷正1997『東アジアにおける支石墓の総合的研究』科学研究費補助金研究成果報告書

日本考古学協会編1961『日本農耕文化の生成』東京堂
橋口達也編1983『石崎曲り田遺跡』Ⅰ（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第８集）福岡県教育委員会
橋口達也編1984『石崎曲り田遺跡』Ⅱ（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第９集）福岡県教育委員会
橋口達也編1985『石崎曲り田遺跡』Ⅲ（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第11集）福岡県教育委員会
橋口達也1987『新町遺跡－福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査－』Ⅰ（志摩町文化財調査報告書第７集）志摩町教育委員会
橋口達也1988ａ『新町遺跡－福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査－』Ⅱ（志摩町文化財調査報告書第８集）志摩町教育委員会
橋口達也1988ｂ「九州における縄文と弥生の境」『季刊考古学』第23号　雄山閣出版
橋口達也1990『新町遺跡－福岡県糸島郡志摩町所在支石墓群の調査－』Ⅲ（志摩町文化財調査報告書第10集）志摩町教育委員会
橋口達也1992「大形棺成立以前の甕棺の編年」『九州歴史資料館研究論集』17
橋口達也1995「墓制の変化（一）北部九州－支石墓と大形甕棺の登場－」『弥生文化の成立』角川書店
原田大六1952「福岡県石ケ崎の支石墓を含む原始墳墓」『考古学雑誌』第38巻４号
春成秀爾1990『弥生時代の始まり』ＵＰ考古学選書11 東京大学出版会
東中川忠美1986『久保泉丸山遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（５）（佐賀県文化財調査報告書第84集）佐賀県教育委員会
久村貞男1980『宮ノ本遺跡』佐世保市埋蔵文化財調査報告書　佐世保市教育委員会
藤尾慎一郎1984「弥生時代前期の刻目突帯文土器－「亀の甲タイプ」の再検討」『九州考古学』59
藤尾慎一郎1987a「板付Ⅰ式甕形土器の成立とその背景」『史淵』124
藤尾慎一郎1987b「稲作受容期の甕形土器研究」『岡崎敬先生退官記念献呈論文集　東アジアの考古と歴史』中　同朋舎出版
藤尾慎一郎1988「縄文から弥生へ－水田耕作の開始か定着か－」『永井昌文教授退官記念論文集　日本民族・文化の生成』六興出版
藤尾慎一郎1990「西部九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第26集
藤尾慎一郎1991「水稲農耕と突帯文土器」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ　日本における初期弥生文化の成立』
藤口健二1985「６朝鮮系無文土器と弥生土器」『弥生文化の研究』３　弥生土器Ⅰ　雄山閣
古田正隆1974『重要遺跡の発見から崩壊までの記録－縄文晩期原山埋葬遺跡－』（百人委員会埋蔵文化財報告第３集）
文化財保護委員会1956『志登支石墓群』埋蔵文化財発掘調査報告４
本間元樹1991「支石墓と渡来人」『児嶋隆人先生喜寿記念論集　古文化論叢』
松尾禎作1957『北九州支石墓の研究』
宮崎貴夫編1983「宇久松原遺跡　－北松浦郡宇久町所在の弥生墳墓－」『長崎県文化財調査集報Ⅵ』（長崎県文化財調査報告書第66集）長崎県教育委員会
森貞次郎・岡崎敬1960「島原半島の考古学調査　１．島原半島・原山遺跡」『九州考古学』10
森貞次郎1962「島原半島の考古学調査第二次調査概報　－原山遺跡－」『九州考古学』14
森貞次郎1969「日本における初期の支石墓」『金載元博士回甲記念論集』

# 図　　版

遺跡遠景

遺跡見学会

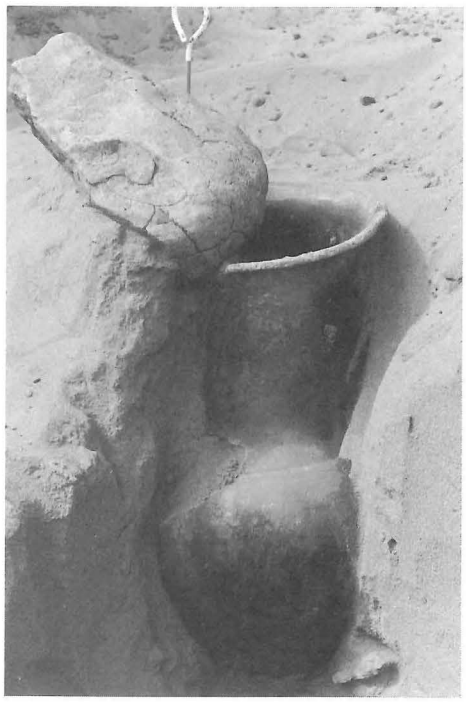
北壁土層断面

図版１　遺跡遠景・遺跡見学会・北壁土層断面

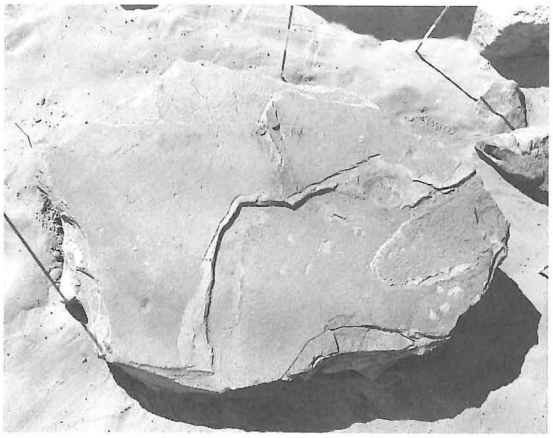
1号(右)・2号(左)支石墓

1号支石墓

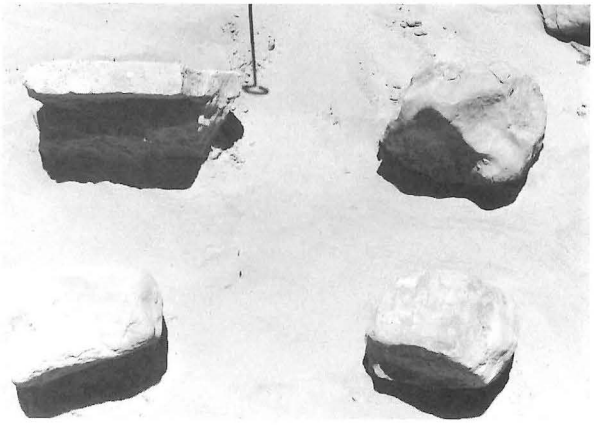
1号支石墓壺棺の蓋石



1号支石墓の壺棺

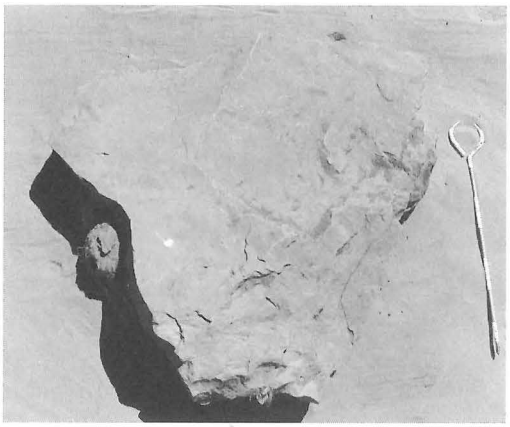


2号支石墓の上石

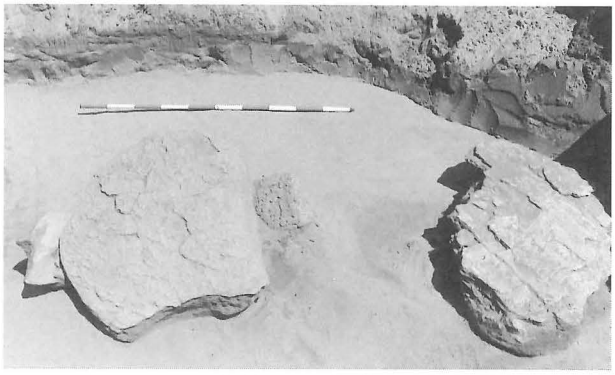


2号支石墓の支石

図版2　1号支石墓・2号支石墓



3 号支石墓



4 号(左)・5 号(右)支石墓

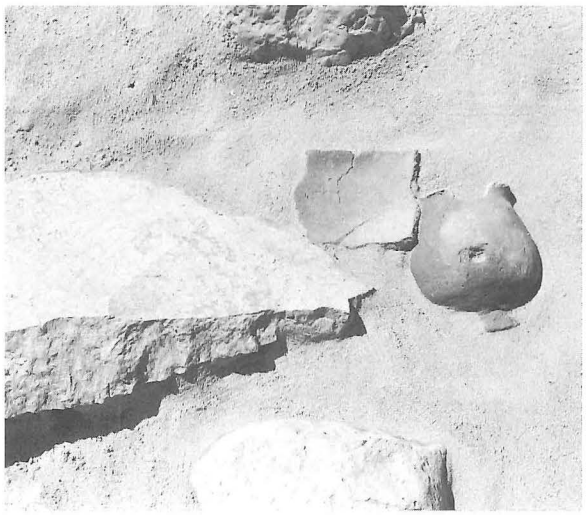
4 号支石墓の支石と供献されたアワビ貝

4 号支石墓の人骨

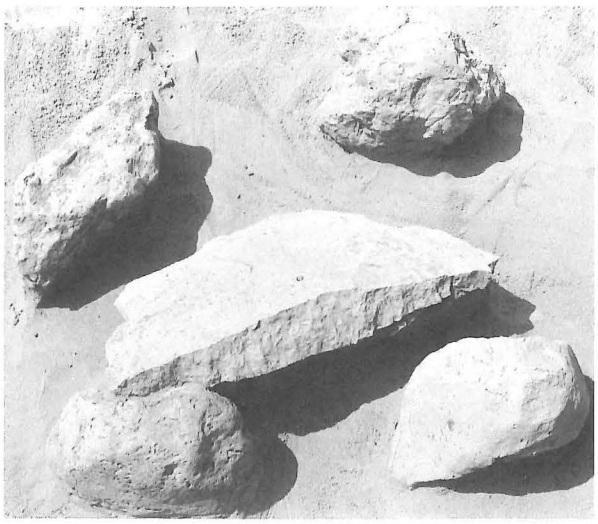
5 号支石墓の上石

5 号支石墓の人骨

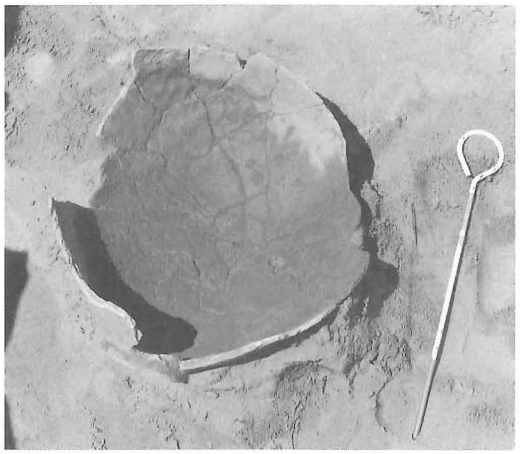
図版 3　3 号・4 号・5 号支石墓



6 号支石墓の供献土器



6 号支石墓の支石

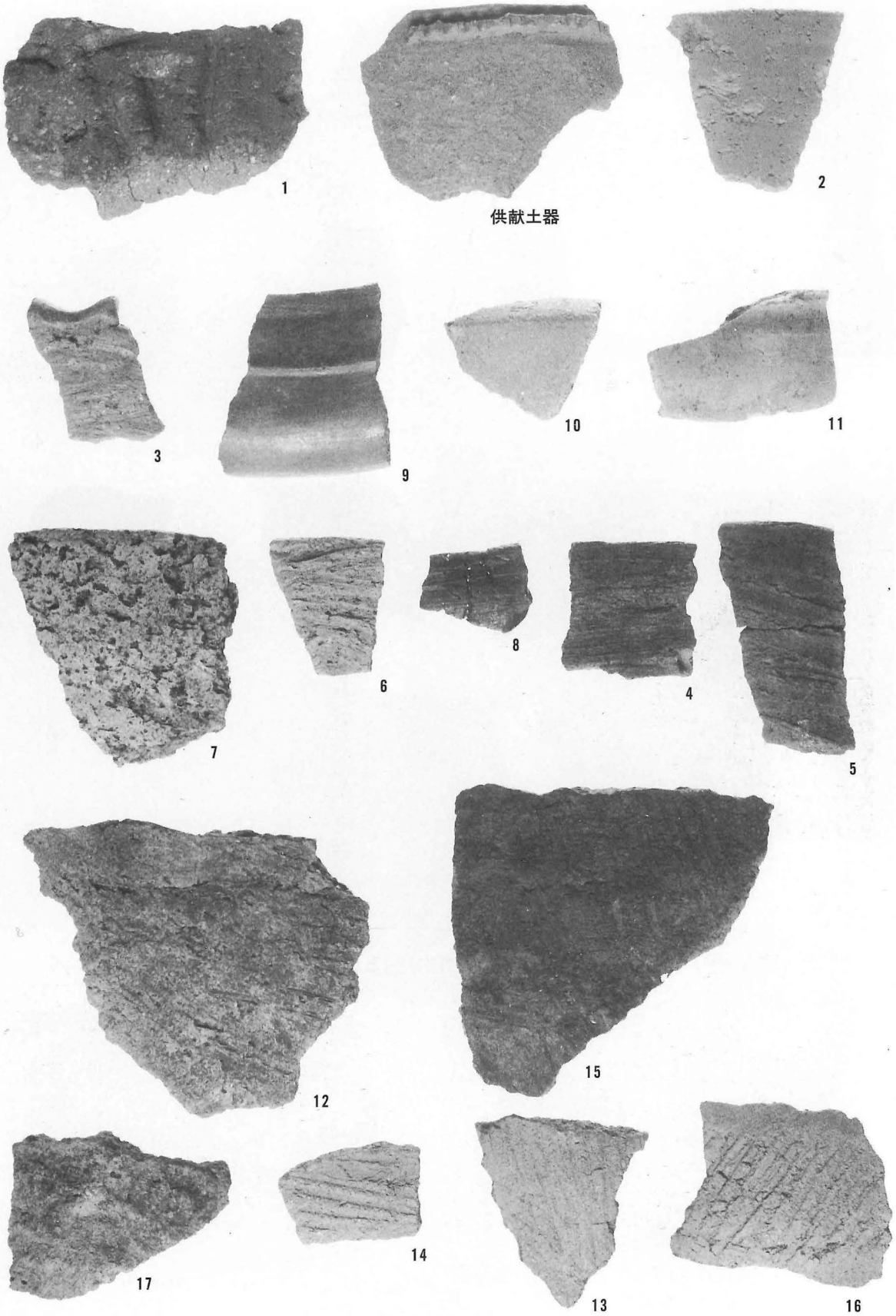


3 号土壙墓上部の壺棺

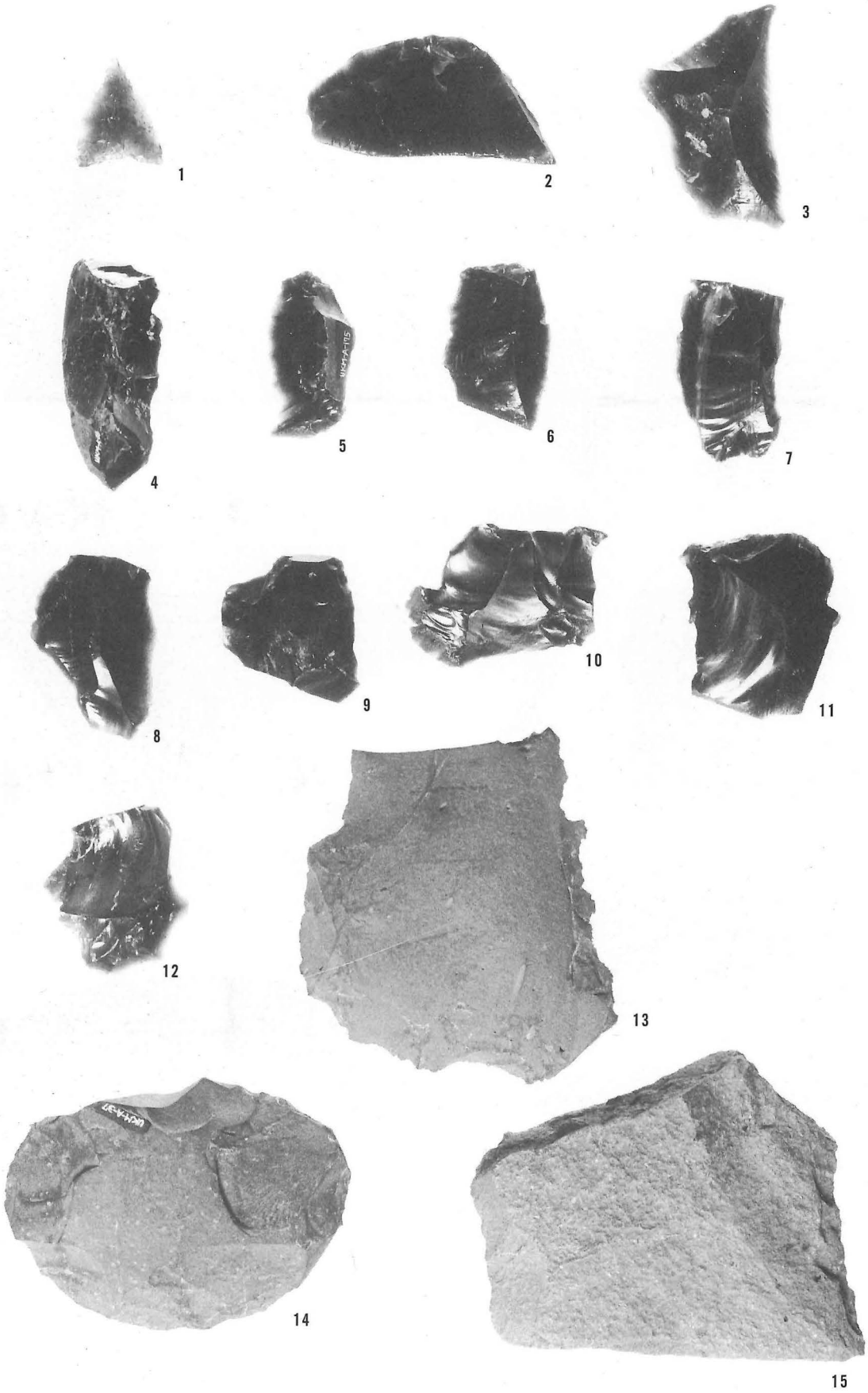
3 号土壙墓の頭骨

3 号土壙墓の下部

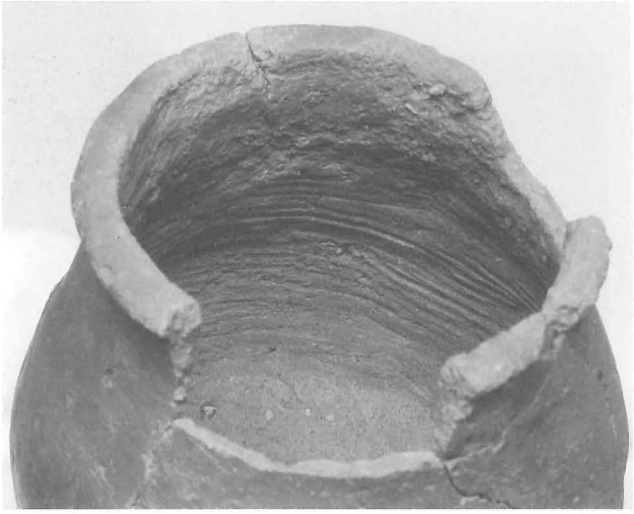
図版 4　6 号支石墓と 3 号土壙墓



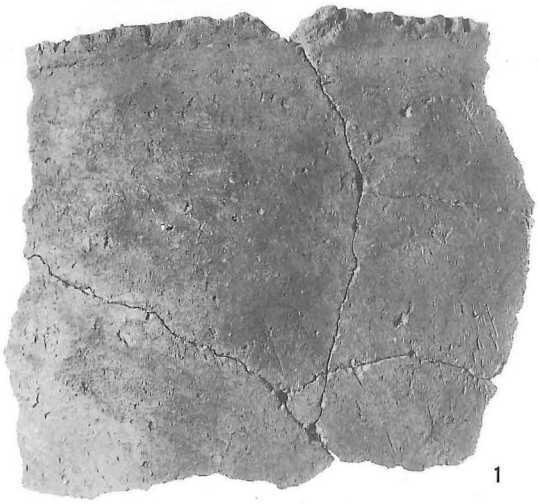

図版 5　包含層出土の土器

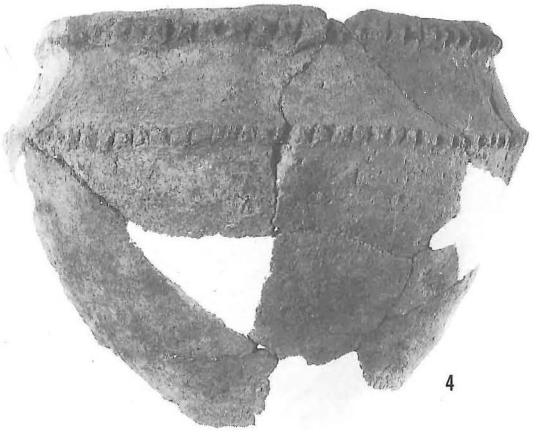



図版 6　包含層出土の石器



2の内面



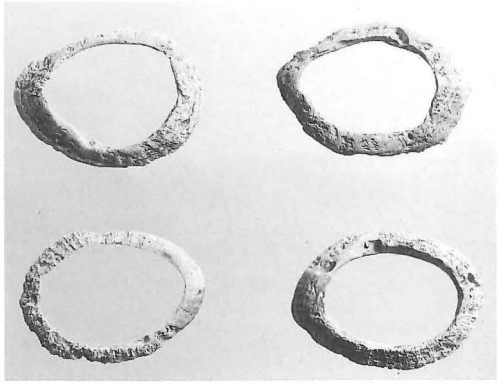


図版7　供献土器

1号土壙墓人骨（熟年女性）

同左　貝輪出土状況

2号土壙墓人骨（壮年女性）



貝輪

1号支石墓の下部構造の壺棺

1号壺棺

図版8　1号・2号土壙墓の人骨，1号支石墓の壺棺，1号壺棺

図版 9　昭和初期の宇久松原

# 長崎県五島列島宇久松原遺跡出土の縄文・弥生時代移行期人骨

佐伯和信*・分部哲秋*・長島聖司*

## はじめに

長崎県五島列島の宇久島（北松浦郡宇久町）に所在する宇久松原遺跡は，海岸砂丘に営まれた縄文時代晩期から弥生時代後期の埋葬遺跡である。過去，昭和43年（1968年）と昭和52年（1977年）にも調査が行われている[1]が，今回の発掘調査は，平成８年（1996年）７月から８月にかけて個人の住宅建設に先立って行われたもので，調査の結果，縄文時代と弥生時代の移行期に属すると考えられる土壙墓および支石墓から計７体の人骨が検出された。

離島を含む長崎県の海岸部を中心とした地域（西北九州地域）からは，長崎市の深堀遺跡，五島列島の浜郷遺跡など弥生時代中期を主体する時期の人骨が比較的多く出土し，これらをまとめた内藤は「この地域の弥生人は，低顔・低身長を形態的特徴とし，生活基盤を狩猟・採集に依存していたと考えられることなどから，縄文人の継続であり新しい種族の影響を受けたとは考えにくい」[2,3]とし，渡来者の影響を受けていると考えられる佐賀県三津永田遺跡[4]や山口県土井ケ浜遺跡[5]の人骨に代表される北部九州・山口地域の高顔・高身長の弥生人骨と区分して，西北九州の弥生人骨として一地方型を設定した。

本遺跡は，地域的には西北九州地域に位置するが，今回出土した人骨は，時代的には上記の人骨に先行する縄文から弥生時代への移行期にあたり，土壙墓だけではなく墓制の由来が朝鮮半島とされる[6]支石墓からも人骨が出土していることから，埋葬された人々がどういう形質をしていたのか発掘当初より注目されていた。

今回，これら宇久松原遺跡出土の縄文時代から弥生時代の移行期人骨の人類学的調査を行い興味ある所見を得たので，その結果を報告する。

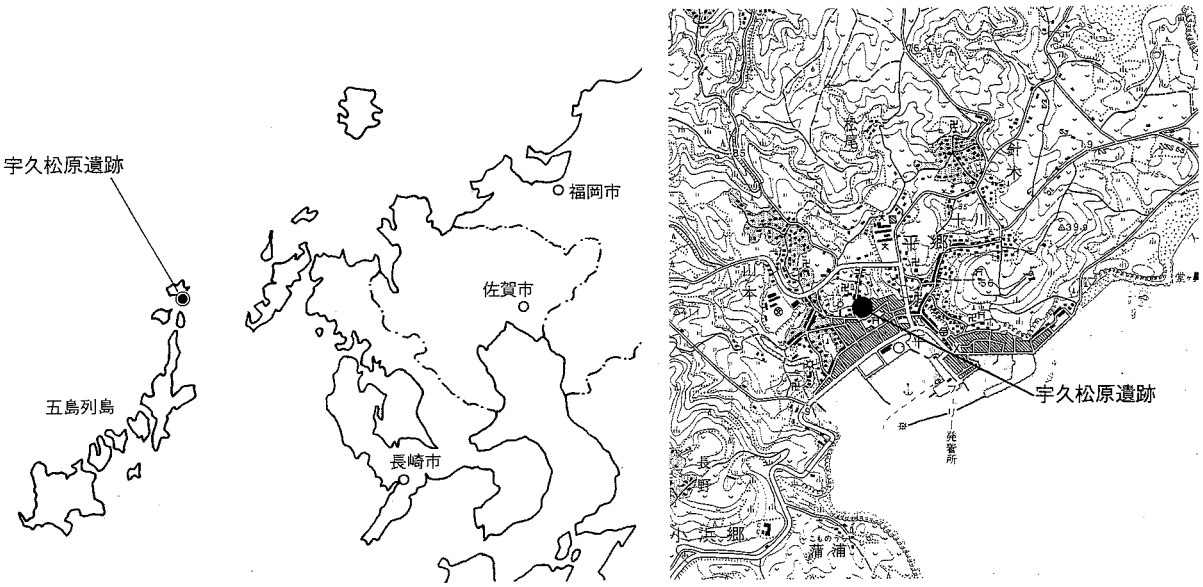
## 資料・方法

宇久松原遺跡は図１に示すように，五島列島の最も北にある宇久島の南海岸，標高６～９ｍの砂丘に位置している。今回の発掘調査において，４基の土壙墓と６基の支石墓が検出され，そのうち土壙墓４基および支石墓３基から小児１体を含む計７体の人骨が出土した。これらの人骨について性別および年齢を推定した結果を表１に示す。

計測法は主として Martin-Saller[7]によったが，脛骨の横径は Vallois[8]の方法で計測し，顔面平坦度の計測については Woo&Morant[9]，Alekseev&Debets[10]および Yamaguchi[11]の方法を用いた。また，頭蓋の非計測的形質の出現状態については，Dodo[12]の判定基準に従い，歯冠の咬耗度は Broca[13]

＊長崎大学医学部解剖学第二教室

に準拠した。年令は，小児については歯の萌出状態[14]から推測し，成人については縫合の癒合状態と歯冠の咬耗度から推定を行なった。




**第１図　遺跡の位置**

**第１表　出土人骨一覧**

| 人骨番号 | 性別 | 年齢 | 備　考 |
|---|---|---|---|
| １号土壙墓人骨 | 女性 | 熟年 | 貝輪装着 |
| ２号土壙墓人骨 | 女性 | 壮年 | |
| ３号土壙墓人骨 | 女性 | 壮年 | |
| ４号土壙墓人骨 | － | 小児 | |
| ４号支石墓人骨 | 女性 | 壮年 | |
| ５号支石墓人骨 | 女性 | 壮年 | |
| ６号支石墓人骨 | 男性 | 壮年 | |
| 散乱骨 | － | － | 永久歯など |

# 人骨の所見

埋葬姿勢，観察および計測結果について各人骨ごとに記載していく。なお，遺存部位は図２～図４に，個々の計測値および頭蓋の非計測的形質の出現状態は文末の表６～表19に一括して掲げている。

### １号土壙墓人骨（女性，熟年）

埋葬姿勢は頭位が北東方向で，上肢，下肢ともに屈曲し，体をやや左側に向けた仰臥である。遺存状態は良好で，ほぼ完成である。左右の前腕にはオオツタノハ製の貝輪を各２個着装している。

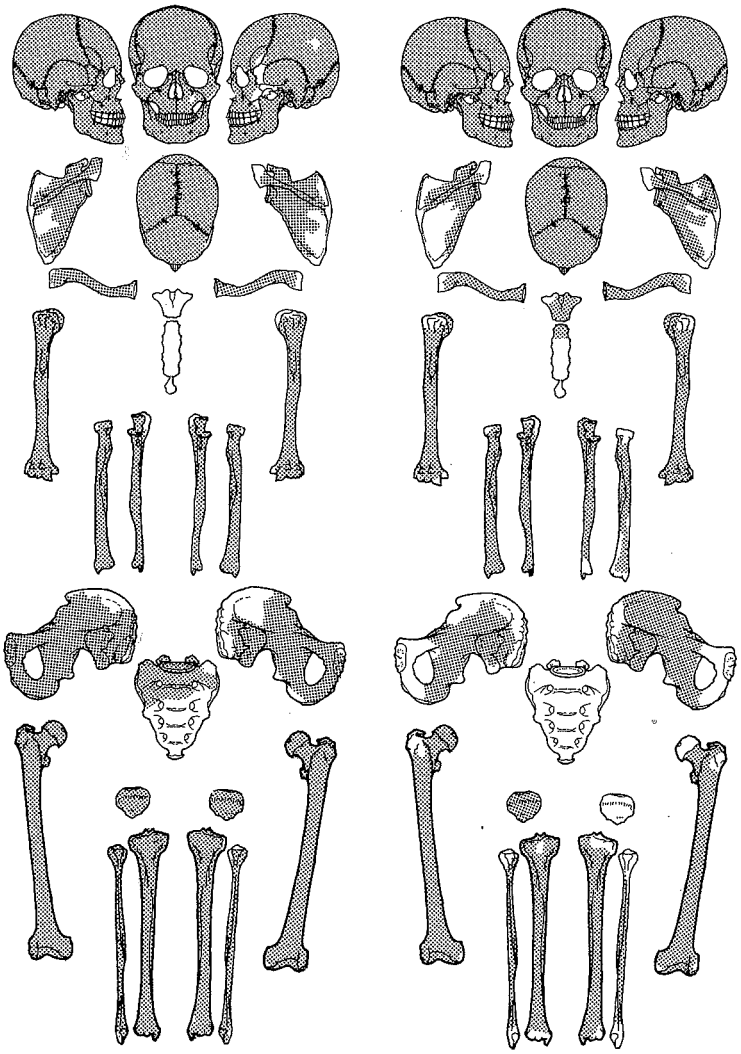
脳頭蓋は，蝶形骨を一部欠くがほぼ完全で，丸く形の良い卵形をしている。眉間および眉上弓の隆起は弱く，前頭結節が明瞭である。乳様突起は小さく，外後頭隆起も発達していない。三主縫合の癒合状態は，冠状およびラムダ縫合については，内板の一部が閉鎖し，外板は全て開離している。矢状縫合については，内板がほぼ全長で閉鎖し，外板も一部で閉鎖が始まっている。計測値は，頭蓋最大長が178㎜，最大幅が143㎜で，幅径は女性としては大きい。頭蓋長幅示数は80.3となり，頭型は中頭

に近い短頭型を示す。バジオン・ブレグマ高が計測できないので高径は不明であるが，低頭傾向がうかがえる。

顔面頭蓋は，全体的には立体的な印象を受けるが，鼻根部の陥凹は弱く，鼻骨の隆起もそれほど強くはない。眼窩は角張っており，眼窩上縁も直線的である。計測値は頬骨弓幅と中顔幅の復元値がそれぞれ134mm，98mm，顔高が105mm，上顔高が68mmで，津雲縄文人に比べて上顔高がかなり大きいものの顔高は近似して小さく，顔面型を表すKollmanおよびVirchowの顔示数がそれぞれ78.4，107.1でかなり小さいことから，顔面全体には低顔傾向がみられる。下顎骨の抜歯による歯槽萎縮のためにいくぶん顔高は低くなっていると考えられるが，この影響を考慮しても顔高はかなり低かったものと推測される。また，眼窩は比較的低く（眼窩示数78.6），鼻部も広鼻（鼻示数54.2）の傾向を示す。上顎骨と下顎骨に釘植している歯と歯槽の状態を歯式に示すと次のとおりである。

$$\frac{M_3M_2M_1P_2P_1●I_2I_1}{M_3M_2M_1P_2P_1●●●}\Big|\frac{I_1I_2●P_1P_2M_1M_2M_3}{●●●P_1P_2M_1M_2M_3}$$ ［●：歯槽閉鎖］

歯の咬耗度はBroca 2度から3度で，2度のものも磨耗は進行しており，咬耗の程度はかなり強い。上顎の犬歯，下顎の切歯および犬歯は風習的な抜歯が施されたと考えられ，この抜歯型式はこれまでに津雲縄文人や大友弥生人などにもみられている[15]。上顎の歯槽側面角は88度で，歯槽性突顎の傾向は全く認められない。




**第2図　人骨の遺存部位①（アミかけ部）**

四肢骨については，全般に細い印象を受ける。上腕骨は，骨体に外側に凸の弱い彎曲がみられ，右側骨体には扁平傾向（骨体断面示数70.0(右)，78.9(左)）も認められる。大腿骨は，骨体が細く，弱い柱状形成が認められる。脛骨は，骨体が細くやや扁平（中央断面示数66.7(右)，69.2(左)）である。腓骨には両側ともに外側面縦溝がみられる。右側大腿骨の最大長からの推定身長値は147.7cmで，低身長である。

性別は，寛骨の大坐骨切痕が広いこと，前耳状溝がみられることから女性と推定される。年齢は，三主縫合の内板および外板の癒合が進行していることから熟年と推測される。

**2号土壙墓人骨（女性・壮年）**

埋葬姿勢は頭位が北東方向で，

上肢を伸展，下肢を屈曲させた仰臥である。遺存状態は良好で，頭蓋は完全である。四肢骨は骨端を欠くものが多いが，全身的に残存している。

脳頭蓋は，眉間はわずかに膨隆するが，眉上弓の隆起は弱い。前額部の膨隆は弱く，後方にやや傾斜している。また，乳様突起は小さく，外後頭隆起も発達していない。縫合は，三主縫合すべての内板，外板が開離している。計測値は，頭蓋最大長が184mm，最大幅が145mmで女性としてはかなり大きい。長幅示数は78.8を示し，頭型はやや短頭に傾く中頭型である。バジオン・ブレグマ高は130mmで，長径や幅径の割には小さく，低頭である。

顔面頭蓋は，幅が広く立体的で，一見男性的な印象を受ける。鼻根部の陥凹は強くはないが，鼻骨はやや隆起する。また，眼窩は低く角張っている。計測値は頬骨弓幅と中顔幅がそれぞれ139mm，99mm，顔高と上顔高がそれぞれ102mm，64mmで，幅径の割には高径がかなり低い。下顎骨の抜歯による歯槽萎縮の影響を考慮しても顔高はかなり低かったものと推測される。顔面のプロポーションを示す顔示数は73.4(K)，103.0(V)，上顔示数は46.0(K)，64.6(V)といずれも小さく，低・広顔傾向が著しい。また，眼窩も低く（眼窩示数72.7(右)）76.2(左)），鼻部も広鼻（鼻示数54.2）の傾向を示す。上顎骨と下顎骨に釘植している歯と歯槽の状態を歯式に示すと次のとおりである。

| | |
|---|---|
| $-\ M_2M_1P_2P_1C\ I_2I_1$ | $I_1I_2CP_1P_2M_1M_2M_3$ |
| $M_3M_2M_1P_2P_1C$ ●● | ●●●$P_1P_2M_1M_2M_3$ |

（－：欠損　●：歯槽閉鎖）

歯の咬耗度は大部分がBroca 2度で，一部は3度まで進行しており，咬耗の程度は比較的強い。下顎の切歯および左側犬歯は，1号土壙墓人骨と同様に風習的抜歯が施されたと考えられる。また，上顎骨の歯槽側面角は76度で，歯槽性突顎の傾向は認められない。

四肢骨については，1号土壙墓人骨と同様に全般に骨体が細く。きゃしゃである。しかし，1号土壙墓人骨にみられた上腕骨の扁平傾向，大腿骨の柱状形成，脛骨の扁平傾向はみられない（上腕骨骨体断面示数76.2(右)，80.0(左)，脛骨中央断面示数79.2(右,左)）。その他の特徴として，腓骨の骨体に両側ともに外側面縦溝が認められる。

推定身長値は，大腿骨の最大長からは得られないが，橈骨の最大長が1号土壙墓人骨と近似することや，大腿骨の骨体の長さも同程度であることから，本人骨の身長も低身長であったと予想される。

性別は，寛骨の大坐骨切痕が広いことや前耳状溝がみられることから女性と推定される。年齢は，三主縫合が全て開離していることから壮年と推測される。

**3号土壙墓人骨（女性，壮年）**

埋葬姿勢は不明である。本人骨は，遺存部位が頭蓋に限られ，壁石で挟まれる土壙の範囲がやや狭いことから，頭部のみが再埋葬された可能性もある。残存部は後頭から頭頂部が中心で，頭頂骨，側頭骨および後頭骨，下顎骨が残存している。

頭蓋の骨壁は比較的薄く，径も大きくない。外後頭隆起の突出は弱く，上項線と下項線も不明瞭である。観察が可能であった矢状およびラムダ縫合は，内板，外板ともに開離している。下顎骨は下顎体の左側部が残存しているが，低くて厚みもなくきゃしゃである。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

| | |
|---|---|
| $M_3M_2M_1$／／／／／／ | ／／／／／／$M_1M_2M_3$ |
| $M_3M_2$／$P_2$／／／／／ | ／／／●$P_2M_1M_2M_3$ |

（／：不明　●：歯槽閉鎖）

歯の咬耗度はBroca 2度で，あまり強くはない。

性別は，頭蓋の形態から女性と推測され，年齢は，矢状およびラムダ縫合が内板も癒合していない

ことから壮年と推測される。

**4号土壙墓人骨（小児）**

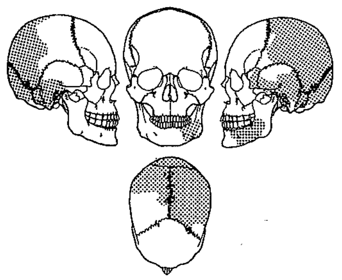
本人骨の遺存状態は悪く，頭蓋冠の一部，歯，部位不明の四肢骨片が少量残存しているに過ぎない。頭蓋冠はブレグマ周辺の前頭骨および頭頂骨が残存しており，その骨壁は薄く，縫合も開離している。残存歯はすべて遊離歯で歯式で示すと次のとおりである。

| | |
|---|---|
| $(M_3)M_2M_1$／／／／／ | ／／／／／／／$(M_3)$ |
| ／／／／／／／／ | ／／／／$P_2M_1M_2(M_3)$ |

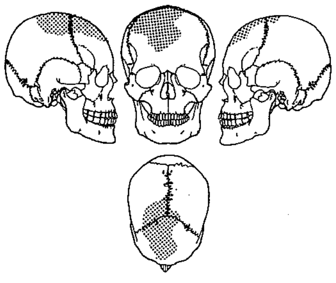
（／：不明　( )：歯槽内埋伏）

第3大臼歯（$M_3$）はいずれも歯根が形成されていないので，歯槽内に埋伏していたと考えられる。残りの歯の咬耗度はいずれもBrocaの1度で弱い。特に，第2大臼歯（$M_2$）の咬耗は著しく弱く。萌出後ほとんど年月を経ていないと推測される。

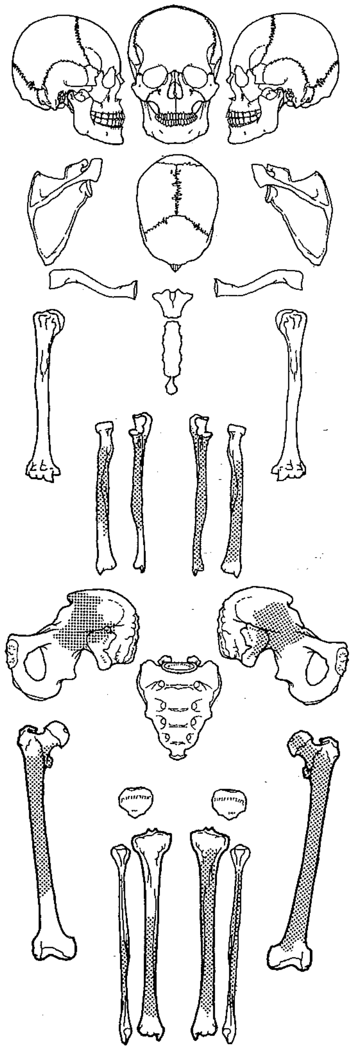
本人骨の年齢は，現代人での第2大臼歯の萌出時期が上顎で12－13才，下顎で11－13才であることから，13才前後の小児と考えられる。性別は不明である。



3号土壙墓人骨



4号土壙墓人骨



4号支石墓人骨

**第3図　人骨の遺存部位②**

**4号支石墓人骨（女性，壮年）**

埋葬姿勢は頭位が北方向で，下肢を屈曲した仰臥である。上肢は遺存状態が悪く姿勢は不明である。頭蓋片，橈骨，尺骨，大腿骨，脛骨，腓骨および寛骨が遺存している。

頭蓋は小片化しており，部位の同定は困難である。遊離歯を歯式で示すと次のとおりである。

| | |
|---|---|
| ／／／$P_2P_1C$／／ | ／／／／／／／／ |
| ／／／／／／／／ | ／／／／／$M_1$／$M_3$ |

[／：不明]

歯の咬耗度はBrocaの2度で，軽度である。

四肢骨は女性としては骨体が太く頑丈である。大腿骨には骨体中央断面示数130.4(右)，120.8(左)で示されるように顕著な柱状形成がみられ，脛骨には第4稜の形成もみられるが，脛骨骨体の扁平性は弱い(中央断面示数72.4(左))。推定身長値が算出できないので大腿骨骨体の長さを1号土壙墓人骨と比べるとほぼ同じぐらいであるので，本人骨の身長は低身長であったものと推測される。

性別は，寛骨に前耳状溝がみられることから，女性と推定される。年齢については，歯の咬耗が弱いことから壮年と推測される。

**5号支石墓人骨（女性，壮年）**

埋葬姿勢は頭位が北東方向で，下肢を屈曲した仰臥である。上肢骨はほとんど遺存しておらず，その姿勢は不明である。頭蓋片，下顎骨，尺骨，大腿骨，脛骨，腓骨および寛骨が遺存している。

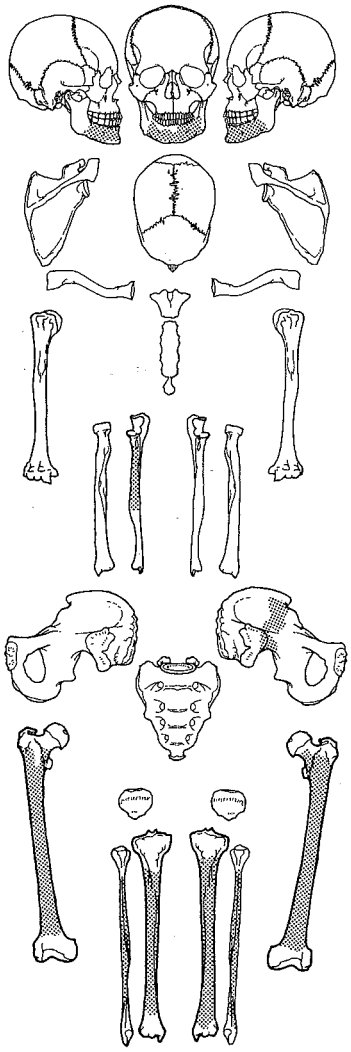
頭蓋片は頭蓋冠の一部と判断されるが，部位の同定は困難である。下顎骨は下顎体の大部分が残存しており，高径は低くてきゃしゃである。残存する下顎の歯と歯槽の状態を歯式で示すと次のとおりである。

／$M_2M_1$／／／／／｜●●／○○○$M_2$／　（●：歯槽閉鎖　／：不明　○：歯槽開存）

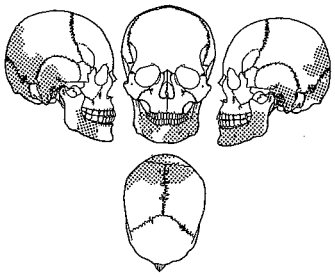
歯の咬耗度はいずれもBrocaの2度で，咬耗はあまり進行していない。また，切歯および犬歯部の歯槽の状態が1号および2号土壙墓人骨のそれと似ていることから，本人骨も風習的抜歯が施れていた可能性が高い。

四肢骨では，大腿骨は骨体が細くて粗線も発達していないが，弱い柱状形成がみられ，脛骨は骨体が細くやや扁平である（中央断面示数66.7(右)，69.2(左)）。本人骨の身長も大腿骨の骨体の長さが1号土壙墓人骨と比べほぼ同程度であるので，低身長であったと予想される。

性別は左側寛骨の大坐骨切痕が広いことや、前耳状溝がみられることから，女性と推定される。年齢は，歯の咬耗が軽度であることから壮年と推測される。



5号支石墓人骨



6号支石墓人骨

**第4図　人骨の遺存部位③**

**6号支石墓人骨（男性，壮年）**

頭部と上部の頸椎が遺存しているにすぎず、埋葬姿勢は不明である。遺存部位は，後頭骨，頭頂骨，側頭骨，下顎骨および第1～第3頸椎である。頭蓋の骨壁は比較的厚く，外後頭隆起および乳様突起の発達はよい。矢状縫合とラムダ縫合は内板，外板ともに開離している。下顎骨は，下顎体が低く，厚く頑丈である。残存する歯を歯式で示すと次のとおりである。

$M_3$／／／／／／／$I_1$｜／$I_2$ C $P_1$／$M_1M_2M_3$　（／：不明　●：歯槽閉鎖）
$M_3M_2M_1$ $P_2P_1$／／／｜／／ ●●●$M_1M_2$●

歯の咬耗度はBrocaの2度～4度とかなり強く，特に大臼歯で顕著である。

性別は，頭蓋の形態から男性と推測され，年齢については，歯の咬耗度はかなり強いものの観察できた縫合に癒合が全くみられていることから壮年と推定される。

**散乱骨**

永久歯５本と部位不明の小骨片２点が一群として検出されている。残存歯の歯種は，上顎の左右の第２，第３大臼歯および左側第１小臼歯で，歯に重複はみられない。また，第２大臼歯の大きさや形態が左右で似ており，咬耗度も Broca の２度で軽度でそれぞれの歯の咬耗の状態も均一であることから，同一個体と判断され年齢も若い（壮年）と考えられる。

# 考　　察 －宇久松原人の形態的特徴－

今回の宇久松原遺跡の調査で出土した人骨は少数例であるが，土壙墓，支石墓人骨ともに計測が可能で，特に土壙墓人骨２例については全身的な形態を知ることができた。ここでは，宇久松原遺跡土壙墓出土の縄文・弥生移行期の女性人骨（以下，宇久松原人）の形態的特徴について，周辺地域から出土している弥生人骨および岡山県出土の津雲貝塚縄文人骨と比較する中で明らかにしていく。支石墓出土人骨についても埋葬姿勢や四肢骨の形態などから，それらの特徴について検討する。

## １．土壙墓出土の人骨

### (1) 頭　　蓋

主要な脳頭蓋の計測値を津雲縄文人[16]，西北九州弥生人[2]および渡来系とされている福岡市金隈遺跡出土の弥生人[17]の成績と比較すると（表２），宇久松原人の脳頭蓋の三主径のうち最大長，最大幅は比較群の中で最も大きく，バジオン・ブレグマ高については津雲縄文人や西北九州弥生人より大きく，金隈弥生人よりやや小さい。また，頭水平周および正中矢状弧長も最大値を示しており，脳頭蓋の径は全体に大きい。頭型を表す長幅示数は79.6で本例は短頭に近い中頭型を示すが，比較集団間で大きな差は認められない。長高示数と幅高示数はそれぞれ70.7，89.7を示して，津雲縄文人や西北九州弥生人と同様に金隈弥生人に比べてかなり小さく，低頭傾向を示す。すなわち，宇久松原人の脳頭蓋はサイズ的には大きく，そのプロポーションは低頭傾向を示す津雲縄文人や西北九州弥生人に類似し，高頭の金隈弥生人とは異なっている。

**第２表　主要脳頭蓋計測値の比較（女性）**　　（単位：mm）

| | | 宇久松原土壙墓 | | 津雲縄文 | | 西北九州弥生 | | 金隈弥生 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | N | M | N | M | N | M | N | M |
| 1 | 頭骨最大長 | 2 | 181.0 | 18 | 175.7 | 15 | 178.1 | 26 | 175.8 |
| 8 | 頭骨最大幅 | 2 | 144.0 | 21 | 141.9 | 15 | 139.3 | 26 | 138.3 |
| 17 | バジオン・ブレグマ高 | 1 | 130 | 14 | 126.1 | 7 | 128.3 | 24 | 131.0 |
| 8/1 | 頭長幅示数 | 2 | 79.6 | 18 | 80.8 | 15 | 78.2 | 25 | 78.0 |
| 17/1 | 頭長高示数 | 1 | 70.7 | 14 | 71.5 | 7 | 71.2 | 23 | 74.2 |
| 17/8 | 頭幅高示数 | 1 | 89.7 | 14 | 89.3 | 7 | 92.5 | 23 | 95.3 |
| 23 | 頭水平周 | 2 | 522.0 | 14 | 506.0 | 14 | 502.1 | 23 | 514.4 |
| 24 | 横弧長 | 2 | 308.0 | 19 | 298.4 | 11 | 309.1 | 27 | 305.8 |
| 25 | 正中矢状弧長 | 2 | 369.0 | 12 | 358.7 | 13 | 363.1 | 16 | 364.9 |

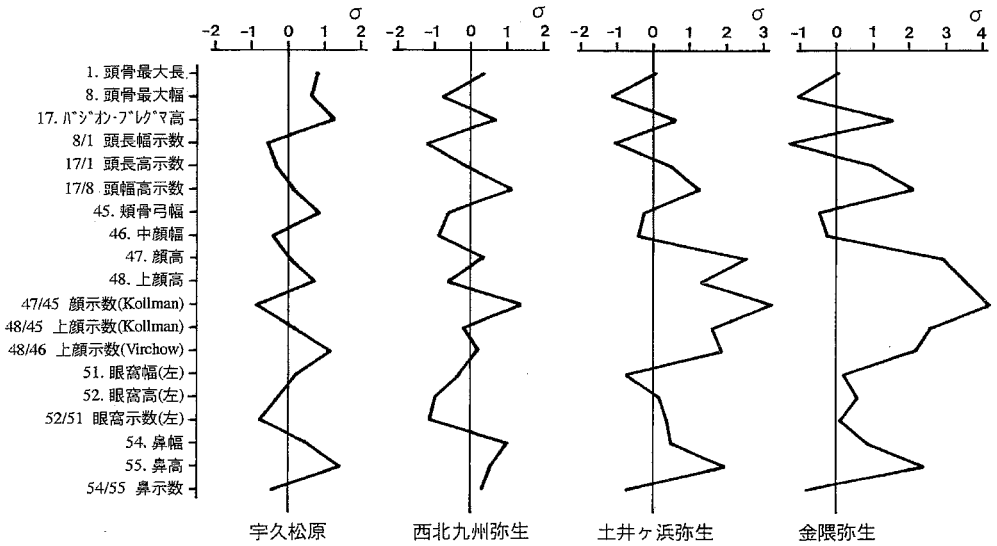
主要な顔面頭蓋の計測値の比較では(表3)，宇久松原人の幅径は，顔面全体の幅を示す頬骨弓幅が広顔の津雲縄文人よりもさらに大きく，中顔幅はやや小さい。高径については，上顔高は金隈弥生人と津雲縄文人の中間的な大きさを示しているが，顔面全体の高径を表す顔高は津雲縄文人や西北九州弥生人に近似して著しく小さい。したがって，顔面のプロポーションを表す示数値は，高顔の金隈弥生人よりもかなり小さく，全体的に津雲縄文人や西北九州弥生人に近似しており低・広顔傾向を認める。また，眼窩示数は西九州弥生人に近似してかなり小さな値を示し，鼻示数については津雲縄文人や西北九州弥生人ほどではないが比較的大きな値を示しており，眼窩や鼻部の形態にも顔面部同様に幅広い低い傾向がみられる。

**第3表　主要顔面頭蓋計測値の比較（女性）**

(単位：mm，度)

| | | 宇久松原土壙墓 | | 津雲縄文 | | 西北九州弥生 | | 金隈弥生 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | N | M | N | M | N | M | N | M |
| 45 | 頬骨弓幅 | 2 | 136.5 | 9 | 132.8 | 6 | 130.2 | 24 | 130.7 |
| 46 | 中顔幅 | 2 | 98.5 | 12 | 100.8 | 11 | 95.9 | 26 | 99.4 |
| 47 | 顔高 | 2 | 103.5 | 9 | 103.3 | 9 | 104.9 | 21 | 115.9 |
| 48 | 上顔高 | 2 | 66.0 | 10 | 63.1 | 12 | 60.9 | 26 | 70.4 |
| 47/45 | 顔示数（Kollman） | 2 | 75.9 | 6 | 78.1 | 6 | 81.7 | 19 | 89.0 |
| 48/45 | 上顔示数（Kollman） | 2 | 48.4 | 6 | 48.0 | 6 | 47.6 | 22 | 54.1 |
| 47/46 | 顔示数（Virchow） | 2 | 105.1 | | — | 9 | 109.5 | 20 | 116.8 |
| 48/46 | 上顔示数（Virchow） | 2 | 67.0 | 8 | 62.8 | 11 | 63.5 | 24 | 70.5 |
| 51 | 眼窩幅（左） | 2 | 42.0 | 10 | 41.6 | 10 | 41.1 | 25 | 41.9 |
| 52 | 眼窩幅（左） | 2 | 32.5 | 7 | 33.0 | 10 | 31.2 | 23 | 34.0 |
| 52/51 | 眼窩示数（左） | 2 | 78.6 | 7 | 81.0 | 10 | 75.9 | 22 | 81.4 |
| 54 | 鼻幅 | 2 | 26.0 | 11 | 25.4 | 12 | 26.6 | 25 | 26.4 |
| 55 | 鼻高 | 2 | 48.0 | 11 | 45.2 | 12 | 46.3 | 25 | 49.8 |
| 54/55 | 鼻示数 | 2 | 54.2 | 10 | 56.1 | 12 | 57.4 | 23 | 52.7 |
| 72 | 全側面角 | 2 | 85.0 | 10 | 81.8 | 10 | 81.5 | 19 | 84.4 |
| 74 | 歯槽側面角 | 2 | 82.0 | 11 | 69.6 | | — | 19 | 69.8 |

次に，頭蓋計測値の全体的な傾向をみるために，比較には土井ケ浜弥生人[5]を追加して津雲縄文人を基線とする偏差折線を描いてみた(図3)。金隈弥生人と土井ケ浜弥生人の折線は基線からの振幅が大きく，特に顔面の高径に関連した項目では大きい方への振れが顕著である。これに対して，西北九州弥生人の振幅は全体に小さく，折線が基線近くを推移している。宇久松原人は振れの方向で異なる部




**第5図　津雲縄文人を基線とした偏差折線**

分もあるが，振幅の傾向は西北九州弥生人とよく似ている。この偏差折線から，宇久松原人の計測値の傾向が津雲縄文人および西北九州弥生人に類似し，金隈および土井ケ浜弥生人とは異なることが示される。

顔面平坦度については，最近，分部が西北九州地域の弥生人骨について調査し，この地域の弥生人骨は従来の計測的結果と同様に縄文人との類似を認め，顔面の平坦性は弱く立体的であることを報告している[18]。宇久松原人の2体の平均値は，前頭骨平坦示数が15.2，鼻骨平坦示数が27.0(文末表9参照）を示し，西北九州弥生人ほどではないが，顔面が平坦な渡来系とされる弥生人よりも大きな値を示すことから，顔面の平坦性は弱く比較的立体的である。

また，土壙墓人骨2体には風習的抜歯が施され，その抜歯形式は1体が上顎犬歯，下顎の切歯と犬歯をすべて抜去し，もう1体は下顎の全切歯と左側犬歯を抜去しており，ともに春成のいう4Ⅰ系にあたる。春成によれば，下顎の全切歯を抜く4Ⅰ系は，縄文時代晩期の愛知県以西の西日本で普遍的に認められ，長崎県平戸市根獅子遺跡や佐賀呼子町大友遺跡など西北九州地域の弥生時代人骨にみられる4Ⅰ系の例は，その様式を踏襲したものとされている[15]。一方，高頻度で抜歯が行われていた土井ケ浜弥生人は，4Ⅰ系の抜歯はみられず上・下顎の犬歯あるいは上顎側切歯を基本として抜歯を行っており，北部九州の甕棺人骨については，抜歯風習そのものがほとんどみられなくなっており，金隈弥生人などに上顎犬歯，側切歯を対象とした抜歯例がわずかにみられるのみであることから，宇久松原人の抜歯型式もやはり縄文人の風習を引き継いだものと考えられる。

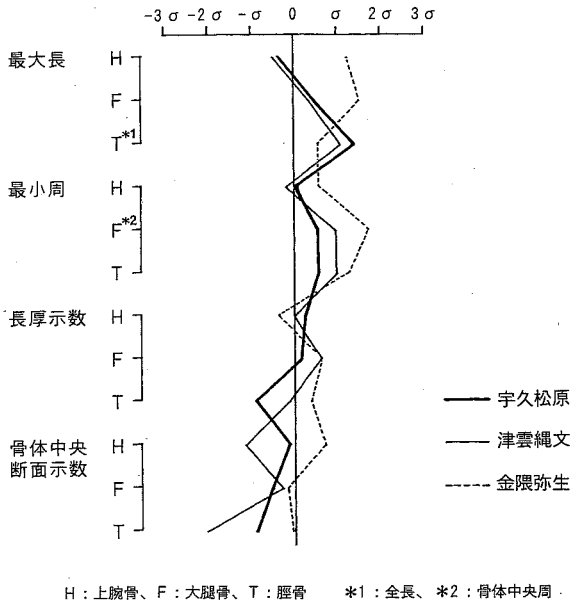
### (2) 四肢骨

次に，主要な四肢骨の計測値について，津雲縄文人[20,21]，金隈弥生人，佐賀県呼子町の海岸部から出土している縄文人的な特徴を備える大友弥生人[22]と比較すると(表4)，上腕骨については，宇久松原人は扁平傾向が弱いことを除いて長さ，太さなど津雲縄文人および大友弥生人に近似し，金隈弥生人と比べると，長さに対する太さの割合は大差ないがかなり短い。大腿骨については，宇久松原人は，長さは津雲縄文人と同程度で短いが骨体の周径もそれ以上に小さいので，長厚示数は比較群の中で最

**第4表　主要四肢骨計測値の比較（女性，右側）**

(単位：mm)

| | | | 宇久松原 土壙墓 | | 宇久松原 支石墓 | | 津雲縄文 | | 大友弥生 | | 金隈弥生 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | N | M | N | M | N | M | N | M | N | M |
| 上腕骨 | 1 | 最大長 | 1 | 268 | | — | 13 | 266.2 | 5 | 270.2 | 4 | 292.3 |
| | 7 | 骨体最小周 | 2 | 56.0 | | — | 23 | 55.3 | 20 | 57.7 | 18 | 58.0 |
| | 7/1 | 長厚示数 | 1 | 20.9 | | — | 13 | 20.5 | 5 | 21.2 | 4 | 19.9 |
| | 6/5 | 骨体断面示数 | 2 | 73.1 | | — | 26 | 69.0 | 25 | 71.5 | 5 | 76.7 |
| 大腿骨 | 1 | 最大長 | 1 | 385 | | — | 16 | 382.9 | 2 | 391.5 | 9 | 404.8 |
| | 8 | 骨体中央周 | 2 | 75.5 | 2 | 78.0 | 26 | 77.4 | 28 | 80.3 | 29 | 80.7 |
| | 8/2 | 長厚示数 | 1 | 19.9 | | — | 16 | 20.5 | 2 | 20.3 | 3 | 20.5 |
| | 6/7 | 骨体中央断面示数 | 2 | 102.1 | 2 | 119.8 | 26 | 103.9 | 30 | 104.1 | 29 | 104.8 |
| | 10/9 | 上骨体断面示数 | 2 | 76.8 | 2 | 83.6 | 25 | 76.6 | 32 | 78.4 | 23 | 79.8 |
| 脛骨 | 1 | 全長 | 1 | 323 | | — | 14 | 318.1 | 2 | 311.5 | 5 | 310.8 |
| | 1a | 最大長 | 1 | 332 | | — | 14 | 322.7 | 3 | 323.0 | 11 | 326.2 |
| | 10b | 最小周 | 2 | 65.5 | 1 | 67 | 19 | 67.1 | 23 | 68.2 | 22 | 68.1 |
| | 10b/1 | 長厚示数 | 1 | 20.1 | | — | 13 | 21.0 | 2 | 21.9 | 5 | 21.7 |
| | 9/8 | 中央断面示数 | 2 | 73.0 | 1 | 66.7 | 26 | 65.4 | 27 | 71.8 | 14 | 78.4 |




**第6図　西北九州現代人を基線とした偏差折線**

小値を示す。したがって，宇久松原人の大腿骨は短くて細い。脛骨については，宇久松原人は比較3集団と比べて最大長が最大で，最小周と長厚示数は最も小さい。中央断面示数は金隈弥生人よりも小さい値を示すが，扁平傾向の強い津雲縄文人よりは大きな値を示している。したがって，宇久松原人の脛骨は細長く，骨体の扁平性は弱い。また，縄文人の特徴の一つとされている大腿骨に対して脛骨が相対的に長いという特徴は，宇久松原人にも共通してみられる。

次に，全体的傾向をみるために西北九州現代人[23,24,25,]を基線とする偏差折線を作成して比較すると(図4)，宇久松原人の折線は，金隈弥生人とは両者の折線が離れる部分が多く傾向が異なり，宇久松原人と津雲縄文人は，骨体中央断面示数などやや離れている部分もあるが，全体として折線の傾向は似ている。

したがって，宇久松原人の四肢骨は，渡来系とされている金隈弥生人の大腿骨および脛骨と比べてかなり細く，上腕骨や脛骨の扁平傾向はそれほど強くないが四肢骨の全体的な傾向は津雲縄文人に類似している。

**第5表　推定身長値の比較（女性）**
(Pearsonの式，右大腿骨より)

| | | N | M |
|---|---|---|---|
| 縄文 | 宇久松原土壙墓 | 1 | 147.7cm |
| | 津雲 | 16 | 147.3 |
| | 吉胡 | 18 | 147.7 |
| 弥生 | 西北九州 | 8 | 147.9 |
| | 大友 | 2 | 149.0 |
| | 土井ケ浜 | 24 | 151.1 |
| | 金隈 | 17 | 151.3 |
| | 三津 | 2 | 151.9 |

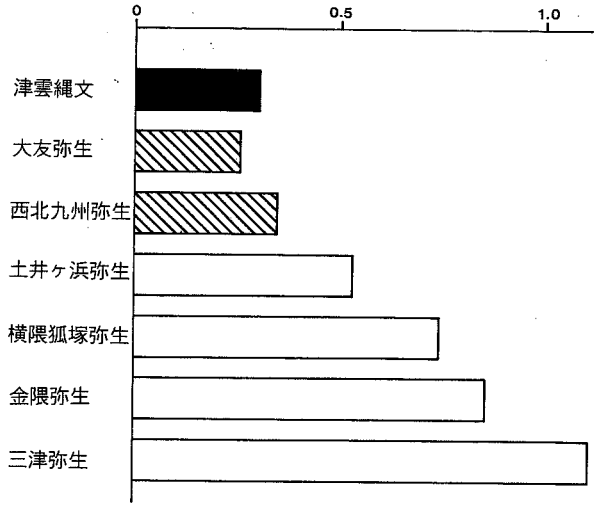
### (3)　推定身長値

大腿骨の最大長から求めた推定身長値は1例から得られ，147.7cmを示す。また，1例は大腿骨の最大長の計測はできないが，骨体の大部分が残っており，これから推測すると，計測できた個体とほぼ同程度の身長であったと思われる。1例の推定身長値で諸集団と比較すると(表5)，宇久松原人は，津雲および吉胡縄文人[26)]や西北九州弥生人とほぼ一致し，渡来系とされている土井ケ浜，金隈および三津弥生人に比べて明らかに低身長である。

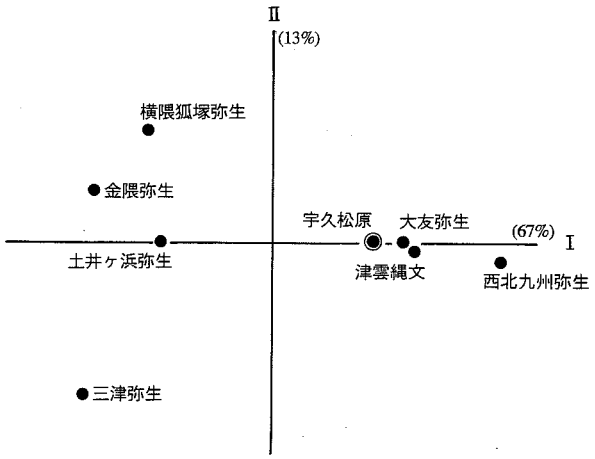
### (4)　多変量解析による分析

ここまでの計測値からの直接的な比較では，宇久松原人が渡来系と考えられている弥生人とは頭蓋の形態のみならず推定身長値など多くの点で異なり，縄文人や西北地域の弥生人に類似している結果を得たが，頭蓋形態の類似度を総合的にみるために統計的な分析を行ってみた。分析には前述の縄文人，弥生人の他に福岡県小郡市横隈狐塚遺跡の弥生人[27)]を追加している。まず，主要な頭蓋計測9項目(Martin's No.1,8,17,46,48,51,52,54,55) と顔面平坦度に関する計測3項目（前頭骨垂線，鼻骨弦，鼻骨垂線）の計12項目の計測値から，各集団間のPenrose形態距離を求めて，宇久松原縄文人からの距離を図示してみた(図5)。宇久松原人は，津雲縄文人，大友弥生人および西北九州弥生人との距離は近く，この3集団との距離に比べると横隈狐塚，金隈および三津弥生人とはかなり遠い関係にあり，

土井ケ浜弥生人は，これらの中間的な距離を示している。さらに，Penrose 形態距離を基に主座標分析を行い，２次元の展開図を作成すると(図６)，II 軸を境に２つのグループが形成され，宇久松原人は距離的に近い津雲縄文人などの３集団と同じグループをなし，土井ケ浜弥生人を含めた距離的に遠い集団－いわゆる渡来系とされる弥生人－で作られるグループと対峙している。




**第７図　宇久松原人からの Penrose の形態距離（12項目）**




**第８図　Penrose の形態距離に基づく主座標分析**

すなわち，多変量解析による総合的な分析によっても，宇久松原人はこれまで出土している縄文人および縄文人的な特徴を備える弥生人との類似性が強く，渡来系とされる弥生人とは形態的に異なることが示される。

## ２．支石墓出土の人骨

支石墓は，考古学的には朝鮮半島に由来し日本では主に九州の西北地域に見られる墓制であり，墓そのものの出土例は少なくないが，人骨の出土例は福岡県糸島半島の新町遺跡[28]，佐賀県呼子町の大友遺跡[29]，昭和43年調査の宇久松原遺跡[1]など数えるほどである。今回の調査では３基の支石墓から１体の成人男性，２体の成人女性と推定される人骨が出土し，貴重な追加例となった。遺存状態の比較的良好の女性人骨２体についての特徴を整理すると次のようにまとめられる。

①埋葬姿勢は，上肢については保存状態が悪く不明であるが，２体ともに仰臥で下肢を屈曲している（仰臥屈葬)。

②１体には下顎骨の切歯部に風習的抜歯の形跡が認められる。また，下顎体の高径が低いことがうかがえる。

③大腿骨の骨体には２体ともに柱状形成が認められ，そのために骨体中央断面示数もかなり大きい値を示す（表４)。

④脛骨骨体の中央断面示数は，津雲縄文人ほどではないが小さい値を示し(表４)，骨体には扁平傾向が認められる。

⑤推定身長値は算出できないが，骨体の大部分が残存している大腿骨で長さを前述の１号土壙墓人骨と比較すると，２体ともに同程度かやや短いことから，低身長であったものと推測される。

この中で大腿骨の柱状形成および脛骨の扁平性については，生活環境によって大きく変化すると考えられている形質でもあるが，一般的には両形質ともに狩猟・採集生活を営んでいた縄文人に強くみら

れる特徴とされている。これらは土壙墓人骨よりも傾向が顕著である。埋葬姿勢，風習的抜歯および低身長の特徴は，土壙墓人骨にも共通し，同時に縄文人に認められる特徴でもある。すなわち，支石墓から出土した人骨には，渡来系と考えられている弥生人にみられる特徴は見出せず，顔面部の形態などが不明であるので確実とはいえないが，支石墓に埋葬された人々も土壙墓に埋葬された人々と同様に縄文人的な容姿を備えていたと考える方が適当であろう。

以上，宇久松原遺跡から出土した縄文・弥生移行期の女性人骨は，土壙墓人骨については頭蓋，四肢骨の形態的特徴，推定身長，また風習的抜歯の型式などいずれにも縄文人および西北九州地域の弥生人との間に強い類似が認められ，また，支石墓人骨についても観察あるいは計測の結果から土壙墓人骨に類似する傾向を示した。

西北九州地域においては縄文と弥生時代の移行期人骨の出土例はほとんどなく，時代的な空白をわずかでもあるが埋めることができた本例は貴重な追加資料となった。また，出土人骨の形態が縄文人的な特徴を備えていたことは，この地域において，縄文・弥生の移行期に生活していた人々の形質がほとんど変化することなく，続く弥生時代の人々へと引き継がれていったことを示している。このことは，従来からこの地域の弥生人の説明に使われている「縄文人の継続」ということをより確かなものにするものである。

## 謝　　辞

稿を終えるにあたり，本人骨の研究と発表の機会を与えていただき，本研究を進めるために考古学的事項にご教示を頂いた長崎県宇久町教育委員会，並びに長崎県教育庁文化課の諸先生方に厚くお礼申し上げます。

### 参　考　文　献

1）松下孝幸，伊丹陽（1983）；長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代人骨，長崎県文化財調査報告書66集．97－124.
2）内藤芳篤（1971）；西北九州出土の弥生時代人骨，人類学雑誌．79：236－248.
3）内藤芳篤（1984）；九州における縄文人骨から弥生人骨への移行，人類学－その多様な発展，日経サイエンス社，東京：52－59.
4）牛島陽一（1954）；佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究，人類学研究．1：273－303.
5）金関丈夫，永井昌文，佐野一（1960）；山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡出土弥生式時代人頭骨について，人類学研究　Ⅶ：1－36.
6）岩崎二郎（1987）；墓地，弥生文化の研究8，祭と墓の装い，雄山閣，東京：91－97.
7）Martin, R. and Saller, K. (1957); Lehrbuch der Anthropologie, Bd. T. Gustav Fsicher Verlag Stuttgart.
8）Vallois, H. －V. (1938); Les méthodes de mensuration de la platycnémie, étude crituque. Bull. Soc. Anthrop., Paris, Sér. 8,9: 98－108.
9）Woo, T. L. & G. M. Morant (1934); A biometric study of the "flatness" of the facial skeleton in man, Biometrika, 26: 196－250.
10）Alekseev, V. P. & G. F. Debets (1964); Kraniometriya, Nauka, Moskva.
11）Yamaguchi B. (1973); Facial Flatness Measurements of the Ainu and Japanese crania, Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, 16(1): 161－171.
12）Dodo, Y. (1974); Non-Metrical Traits in the Hokkaido Ainu and the Northern Japaneses of Recent Times, J. Anthrop. Soc. Nippon. 82: 31－51.

13) Broca. P. (1879); Instructions relatives a l'etude anthropologique du systeme dentaire, Bull. Soc. Anthropol. Paris 2: 128－152.
14) 藤田恒太郎　原著，桐野忠大　改訂（1976）；歯の解剖学，金原出版，東京．
15) 春成秀爾（1987）；抜歯，弥生文化の研究　8．祭と墓と装い，雄山閣，東京：79－90．
16) 清野謙次，宮本博人（1925）；津雲貝塚人人骨の人類学的研究　第2部　頭蓋骨の研究，人類学雑誌．41．
17) 中橋孝博，土肥直美，永井昌文（1985）；金隈遺跡出土の弥生時代人骨，史跡金隈遺跡（福岡市埋蔵文化財調査報告書123集）：43－145．
18) 分部哲秋，佐伯和信，長島聖司（1995）；西北九州弥生人の顔面平坦度，解剖学雑誌．70：S137．
19) 春成秀爾（1982）；縄文社会論，縄文文化の研究　8，社会・文化，雄山閣，東京：223－252．
20) 清野謙次，平井隆（1928）；津雲貝塚人人骨の人類学的研究，第3部　上肢骨の研究，人類学雑誌．43．第3付録．
21) 清野謙次，平井隆（1928）；津雲貝塚人人骨の人類学的研究，第4部　下肢骨の研究，人類学雑誌．43．第4付録．
22) 松下孝幸（1981）；大友遺跡出土の弥生時代人骨，大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）．223－253．
23) 八木治（1970）；西北九州人上腕骨の人類学的研究，長崎医学会雑誌．45：22－33．
24) 栄田和行（1967）；西北九州人大腿骨の人類的研究，長崎医学会雑誌．42：313－324．
25) 久松巌（1969）；西北九州人脛骨の人類学的研究，長崎医学会雑誌．44：718－728．
26) 石沢命達（1931）；吉胡貝塚人骨の人類学的研究　第3部　下肢骨の研究，人類学雑誌．46：1－192．
27) 松下孝幸（1985）；福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代人骨，横隈狐塚遺跡II下巻（小郡市文化財調査報告書第27集）．1－46．
28) 中橋孝博，永井昌文（1987）；福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨，新町遺跡（志摩町文化財調査報告書第7集）．87－105．
29) 礒谷誠一，乗安整而，永井昌文，内藤芳篤（1981）；大友遺跡出土の人骨資料，大友遺跡（佐賀県呼子町文化財調査報告書1）．217－222．

**第 6 表　脳頭蓋計測値**　(単位：mm)

| | | 1号土壙墓 女性 | 2号土壙墓 女性 | 3号土壙墓 女性 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 頭蓋最大長 | 178 | 184 | — |
| 8 | 頭蓋最大幅 | 143 | 145 | — |
| 17 | バジオン・ブレグマ高 | — | 130 | — |
| 8/1 | 頭骨長幅示数 | 80.3 | 78.8 | — |
| 17/1 | 頭骨長高示数 | — | 70.7 | — |
| 17/8 | 頭骨幅高示数 | — | 89.7 | — |
| 5 | 頭骨底長 | — | 100 | — |
| 9 | 最小前頭幅 | 95 | 95 | — |
| 10 | 最大前頭幅 | 118 | 113 | — |
| 11 | 両耳幅 | 129 | 133 | — |
| 12 | 最大後頭幅 | 109 | 111 | 111 |
| 13 | 乳突幅 | — | 107 | — |
| 7 | 大後頭孔長 | — | 32 | — |
| 16 | 大後頭孔幅 | — | 32 | — |
| 16/7 | 大後頭孔示数 | — | 100.0 | — |
| 23 | 頭蓋水平周 | 515 | 529 | — |
| 24 | 横弧長 | 315 | 301 | — |
| 25 | 正中矢状弧長 | 367 | 371 | — |
| 26 | 正中矢状前頭弧長 | 119 | 125 | — |
| 27 | 正中矢状頭頂弧長 | 132 | 127 | 124 |
| 28 | 正中矢状後頭弧長 | 116 | 119 | 114 |
| 29 | 正中矢状前頭弦長 | 105 | 111 | — |
| 30 | 正中矢状頭頂弦長 | 116 | 114 | 111 |
| 31 | 正中矢状後頭弦長 | 96 | 100 | 98 |
| 29/26 | 矢状前頭示数 | 88.2 | 88.8 | — |
| 30/27 | 矢状頭頂示数 | 87.9 | 89.8 | 89.5 |
| 31/28 | 矢状後頭示数 | 82.8 | 84.0 | 86.0 |

**第 8 表　下顎骨計測値**　(単位：mm，度)

| | | 1号土壙墓 女性 | 2号土壙墓 女性 |
|---|---|---|---|
| 65 | 下顎関節突起幅 | — | 127 |
| 65(1) | 下顎筋突起幅 | 92 | 97 |
| 66 | 下顎角幅 | — | 101 |
| 67 | 前下顎幅 | 50 | 51 |
| 68 | 下顎長 | — | 73 |
| 68(1) | 下顎長 | 99 | 99 |
| 69 | オトガイ高 | — | — |
| 69(1) | 下顎体高（右） | 27 | 25 |
| | （左） | 27 | 24 |
| 69(2) | 下顎体高（右） | 25 | 23 |
| | （左） | 24 | 23 |
| 69(3) | 下顎体厚（右） | 17 | 13 |
| | （左） | 16 | 13 |
| 70 | 枝高（右） | 52 | 51 |
| | （左） | — | 52 |
| 70(1) | 前枝高（右） | 55 | 58 |
| | （左） | 56 | 58 |
| 70(2) | 最小枝高（右） | 44 | 46 |
| | （左） | 45 | 48 |
| 70(3) | 下顎切痕高（右） | 12 | 15 |
| | （左） | 13 | 12 |
| 71 | 枝幅（右） | 37 | 34 |
| | （左） | 37 | 35 |
| 71a | 最小枝幅（右） | 37 | 34 |
| | （左） | 37 | 35 |
| 71(1) | 下顎切痕幅（右） | 38 | 36 |
| | （左） | 41 | 37 |
| 79 | 下顎枝角（右） | 121 | 120 |
| | （左） | 122 | 119 |

**第 7 表　顔面頭蓋計測値**　(単位：mm，度)

| | | 1号土壙墓 女性 | 2号土壙墓 女性 |
|---|---|---|---|
| 40 | 顔長 | — | 99 |
| 41 | 側顔長 | 71 | 71 |
| 42 | 下顔長 | — | 110 |
| 43 | 上顔幅 | 103 | 106 |
| 44 | 両眼窩幅 | 96 | 102 |
| 45 | 頬骨弓幅 | (134) | 139 |
| 46 | 中顔幅 | (98) | 99 |
| 47 | 顔高 | 105 | 102 |
| 48 | 上顔高 | 68 | 64 |
| 47/45 | 顔示数(Kollman) | (78.4) | 73.4 |
| 48/45 | 上顔示数(Kollman) | (50.7) | 46.0 |
| 47/46 | 顔示数(Virchow) | (107.1) | 103.0 |
| 48/46 | 上顔示数(Virchow) | (69.4) | 64.6 |
| 50 | 前眼窩間幅 | 19 | 20 |
| 51 | 眼窩幅（右） | 42 | 44 |
| | （左） | 42 | 42 |
| 52 | 眼窩高（右） | 33 | 32 |
| | （左） | — | 32 |
| 52/51 | 眼窩示数（右） | 78.6 | 72.7 |
| | （左） | — | 76.2 |
| 54 | 鼻幅 | 26 | 26 |
| 55 | 鼻高 | 48 | 48 |
| 54/55 | 鼻示数 | 54.2 | 54.2 |
| 55(1) | 梨状口高 | 29 | — |
| 56 | 鼻骨長 | 21 | — |
| 57 | 鼻骨最小幅 | 11 | 11 |
| 57(1) | 鼻骨最大幅 | — | — |
| 60 | 上顎歯槽長 | 51 | 52 |
| 61 | 上顎歯槽幅 | 60 | 62 |
| 62 | 口蓋長 | 44 | 44 |
| 63 | 口蓋幅 | 34 | 39 |
| 64 | 口蓋高 | 9 | 10 |
| 72 | 全側面角 | 88 | 82 |
| 73 | 鼻側面角 | 88 | 85 |
| 74 | 歯槽側面角 | 88 | 76 |

（　）は復元値

**第 9 表　顔面平坦度計測値**　(単位：mm)

| | 1号土壙墓 女性 | 2号土壙墓 女性 |
|---|---|---|
| 前頭骨弦 | 94.0 | 97.1 |
| 前頭骨垂線 | 14.2 | 14.8 |
| 前頭骨平坦度示数 | 15.1 | 15.2 |
| 鼻骨弦 | 11.0 | 10.9 |
| 鼻骨垂線 | 2.3 | 3.7 |
| 鼻骨平坦度示数 | 20.9 | 33.9 |
| 頬上顎骨弦 | 96.2 | 99.7 |
| 頬上顎骨垂線 | 18.4 | 20.8 |
| 頬上顎骨平坦度示数 | 19.1 | 20.9 |

**第10表　上肢帯骨計測値**　(単位：mm)

| | | | 1号土壙墓 女性 | | 2号土壙墓 女性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 右 | 左 | 右 | 左 |
| 肩甲骨 | 12 | 関節窩長 | 29 | 29 | — | 32 |
| | 13 | 関節窩幅 | 24 | 23 | 25 | 24 |
| | 14 | 関節窩深 | 3 | 3 | — | 3 |
| 鎖骨 | 2 | 骨体彎曲高 | — | — | 10 | 11 |
| | 2 a | 骨体彎曲高 | — | 23 | 27 | 29 |
| | 3 | 骨体彎曲弦長 | — | — | 99 | 103 |
| | 4 | 中央垂直径 | 9 | 10 | 9 | 9 |
| | 5 | 中央矢状径 | 11 | 11 | 12 | 12 |
| | 6 | 中央周 | 32 | 33 | 33 | 33 |
| | 4 / 5 | 鎖骨断面示数 | 81.8 | 90.9 | 75.0 | 75.0 |

**第11表　上腕骨計測値**　(単位：mm)

| | | 1号土壙墓 女性 | | 2号土壙墓 女性 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 右 | 左 | 右 | 左 |
| 1 | 最大長 | 268 | — | — | — |
| 2 | 全長 | 265 | — | — | — |
| 3(1) | 横上径 | 42 | — | — | — |
| 5 | 中央最大径 | 20 | 19 | 21 | 20 |
| 6 | 中央最小径 | 14 | 15 | 16 | 16 |
| 7 | 骨体最小周 | 56 | 55 | 56 | 55 |
| 7 a | 中央周 | 57 | 56 | 60 | 58 |
| 10 | 頭最大矢状径 | 37 | — | — | — |
| 11 | 滑車幅 | 21 | 20 | — | 20 |
| 13 | 滑車深 | — | — | — | 24 |
| 14 | 尺骨頭窩幅 | 24 | 24 | — | 23 |
| 15 | 尺骨頭窩深 | 12 | 12 | — | 14 |
| 7 / 1 | 長厚示数 | 20.9 | — | — | — |
| 6 / 5 | 骨体断面示数 | 70.0 | 78.9 | 76.2 | 80.0 |

**第12表　橈骨計測値**　(単位：mm)

| | | 1号土壙墓 女性 | | 2号土壙墓 女性 | | 4号支石墓 女性 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 |
| 1 | 最大長 | 209 | 207 | 212 | — | — |
| 1 b | 平行長 | 207 | 205 | — | — | — |
| 2 | 機能長 | 199 | 197 | — | — | — |
| 3 | 最小周 | 36 | 35 | 38 | — | — |
| 4 | 骨体横径 | 15 | 14 | 16 | 15 | — |
| 4 a | 骨体中央横径 | 15 | 14 | 16 | 15 | 16 |
| 4(2) | 頸横径 | 11 | 11 | 12 | — | — |
| 5 | 骨体矢状径 | 10 | 10 | 10 | 10 | — |
| 5 a | 骨体中央矢状径 | 10 | 10 | 10 | 10 | 11 |
| 5(2) | 頸矢状径 | 13 | 13 | — | — | — |
| 5(4) | 頸周 | 39 | 40 | — | — | — |
| 5(5) | 骨体中央周 | 39 | 38 | 41 | 39 | 44 |
| 5(6) | 骨下端幅 | 27 | — | — | — | — |
| 3 / 2 | 長厚示数 | 18.1 | 17.8 | — | — | — |
| 5 / 4 | 骨体断面示数 | 66.7 | 71.4 | 62.5 | 66.7 | — |
| 5 a/ 4 a | 中央断面示数 | 66.7 | 71.4 | 62.5 | 66.7 | 68.8 |

**第13表　尺骨計測値**　(単位：mm)

| | | 1号土壙墓 女性 | | 2号土壙墓 女性 | | 4号支石墓 女性 | | 5号支石墓 女性 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 |
| 2 | 機能長 | 204 | 202 | — | — | — | — | — |
| 3 | 最小周 | 32 | 30 | 33 | — | — | 34 | — |
| 6 6 | 肘頭幅 | — | — | — | 20 | — | — | — |
| 7 | 肘頭深 | 21 | 21 | — | — | — | — | — |
| 7(1) | 肘頭鈎突距離 | 20 | 20 | — | 20 | — | — | — |
| 8 | 肘頭高 | — | — | — | 18 | — | — | — |
| 9 | 鈎状突起機骨側関節面前幅 | 9 | 6 | — | — | — | — | — |
| 10 | 鈎状突起機骨側関節面後幅 | 14 | 12 | 14 | 12 | — | — | — |
| 11 | 尺骨矢状径 | 13 | 11 | 13 | 13 | 12 | 12 | — |
| 12 | 尺骨横径 | 15 | 12 | 14 | 14 | 15 | 13 | — |
| S | 中央最小径 | 12 | 11 | 12 | 11 | 12 | 12 | 12 |
| L | 中央最大径 | 15 | 12 | 15 | 15 | 15 | 13 | 14 |
| C | 中央周 | 44 | 39 | 43 | 42 | 45 | 41 | 43 |
| 3 /2 | 長厚示数 | 15.7 | 14.9 | — | — | — | — | — |
| 11/12 | 骨体断面示数 | 86.6 | 91.7 | 92.9 | 92.9 | 80.0 | 92.3 | — |
| S / L | 中央断面示数 | 80.0 | 91.7 | 80.0 | 73.3 | 80.0 | 92.3 | 85.7 |

**第14表　大腿骨計測値**

(単位：mm)

| | | 1号土壙墓 女性 | | 2号土壙墓 女性 | | 4号支石墓 女性 | | 5号支石墓 女性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 |
| 1 | 最大長 | 385 | — | — | — | — | — | — | — |
| 2 | 自然位全長 | 382 | — | — | — | — | — | — | — |
| 3 | 最大転子長 | 374 | — | — | — | — | — | — | — |
| 4 | 自然位転子長 | 366 | — | — | — | — | — | — | — |
| 6 | 骨体中央矢状径 | 25 | 24 | 24 | 24 | 30 | 29 | 24 | 25 |
| 7 | 骨体中央横径 | 24 | 24 | 24 | 24 | 23 | 24 | 22 | 22 |
| 8 | 骨体中央周 | 76 | 75 | 75 | 76 | 82 | 83 | 74 | 74 |
| 9 | 骨体上横径 | 28 | 29 | 28 | 29 | 28 | 28 | 27 | 27 |
| 9' | 骨体上最大径 | 29 | 29 | 28 | 29 | 29 | 29 | 28 | 28 |
| 10 | 骨体上矢状径 | 21 | 21 | 22 | 21 | 24 | 25 | 22 | 24 |
| 10' | 骨体上最小径 | 21 | 21 | 21 | 21 | 22 | 25 | 21 | 23 |
| 15 | 頸垂直径 | 28 | 27 | 30 | 29 | — | — | — | — |
| 16 | 頸矢状径 | 23 | 23 | 23 | 25 | — | — | — | — |
| 17 | 頸周 | 84 | 82 | 85 | 86 | — | — | — | — |
| 18 | 頭垂直径 | 39 | 38 | — | — | — | — | — | — |
| 19 | 頭横径 | 38 | 38 | — | — | — | — | — | — |
| 20 | 頭周 | 123 | — | — | — | — | — | — | — |
| 21 | 上顆幅 | 68 | 68 | 70 | — | — | — | — | — |
| 8/2 | 長厚示数 | 19.9 | — | — | — | — | — | — | — |
| 6/7 | 骨体中央断面示数 | 104.2 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 130.4 | 120.8 | 109.1 | 113.6 |
| 10/9 | 上骨体断面示数 | 75.0 | 72.4 | 78.6 | 72.4 | 85.7 | 89.3 | 81.5 | 88.9 |

**第15表　脛骨計測値**

(単位：mm)

| | | 1号土壙墓 女性 | | 2号土壙墓 女性 | | 4号支石墓 女性 | 5号支石墓 女性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 右 | 左 | 右 | 左 | 左 | 右 | 左 |
| 1 | 全長 | 323 | 323 | — | — | — | — | — |
| 1 a | 最大長 | 332 | 329 | — | — | — | — | — |
| 1 b | 脛骨長 | 323 | 320 | — | — | — | — | — |
| 2 | 顆距間距離 | 311 | 307 | — | — | — | — | — |
| 3 | 最大上端幅 | 60 | — | — | — | — | — | — |
| 3 a | 上内関節面幅 | 28 | 28 | 30 | — | — | — | — |
| 3 b | 上外関節面幅 | — | 26 | — | — | — | — | — |
| 4 a | 上内関節面深 | — | 41 | — | — | — | — | — |
| 4 b | 上外関節面深 | 34 | 33 | — | — | — | — | — |
| 6 | 最大下端幅 | 43 | — | — | — | — | — | — |
| 7 | 下端矢状径 | 33 | 33 | — | — | — | — | — |
| 8 | 中央最大径 | 27 | 26 | 24 | 24 | 29 | 27 | 30 |
| 8 a | 栄養孔位最大径 | 31 | 30 | 26 | 26 | — | 31 | 35 |
| 9 | 中央横径 | 18 | 17 | 19 | 19 | 21 | 18 | 22 |
| 9 a | 栄養孔位横径 | 20 | 19 | 20 | 20 | 23 | 21 | 24 |
| 10 | 骨体周 | 72 | 70 | 69 | 70 | 77 | 71 | 82 |
| 10a | 栄養孔位周 | 82 | 78 | 75 | 77 | — | 82 | 93 |
| 10b | 最小周 | 65 | 64 | 66 | 65 | 73 | 67 | 75 |
| 10b/1 | 長厚示数 | 20.1 | 19.8 | — | — | — | — | — |
| 9/8 | 中央断面示数 | 66.7 | 69.2 | 79.2 | 79.2 | 72.4 | 66.7 | 69.2 |
| 9 a/8 a | 栄養孔位断面示数 | 64.5 | 67.9 | 76.9 | 76.9 | — | 67.7 | 64.5 |

**第16表　腓骨計測値**

(単位：mm)

| | | 1号土壙墓 女性 | | 2号土壙墓 女性 | | 4号支石墓 女性 | 5号支石墓 女性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 右 | 左 | 右 | 左 | 左 | 右 | 左 |
| 1 | 最大長 | 319 | — | — | — | — | — | — |
| 2 | 中央最大径 | 15 | 13 | 15 | 13 | 16 | 14 | 13 |
| 3 | 中央最小径 | 10 | 10 | 10 | 10 | 11 | 10 | 10 |
| 4 | 中央周 | 40 | 39 | 42 | 39 | 42 | 39 | 39 |
| 4 a | 最小周 | 32 | 32 | 33 | 35 | 33 | — | 34 |
| 4 b | 頸横径 | 12 | 13 | 10 | 14 | 10 | — | 13 |
| 4 c | 頸矢状径 | 10 | 9 | 13 | 11 | 14 | — | 8 |
| 4(1) | 上端幅 | 23 | — | — | — | — | — | — |
| 4 a/1 | 長厚示数 | 10.0 | — | — | — | — | — | — |
| 3/2 | 中央横断示数 | 66.7 | 76.9 | 66.7 | 76.9 | 68.8 | 71.4 | 76.9 |

**第17表　膝蓋骨計測値**

(単位：mm)

| | | 1号土壙墓 女性 | | 2号土壙墓 女性 |
|---|---|---|---|---|
| | | 右 | 左 | 右 |
| 1 | 最大高 | 35 | — | 37 |
| 2 | 最大幅 | 41 | — | 39 |
| 3 | 最大厚 | 17 | 17 | 18 |
| 4 | 関節面高 | 31 | 31 | — |
| 5 | 内切面幅 | 20 | — | 20 |
| 6 | 外切面幅 | 23 | 24 | 23 |

**第18表　推定身長値（Pearson）**

(単位：cm)

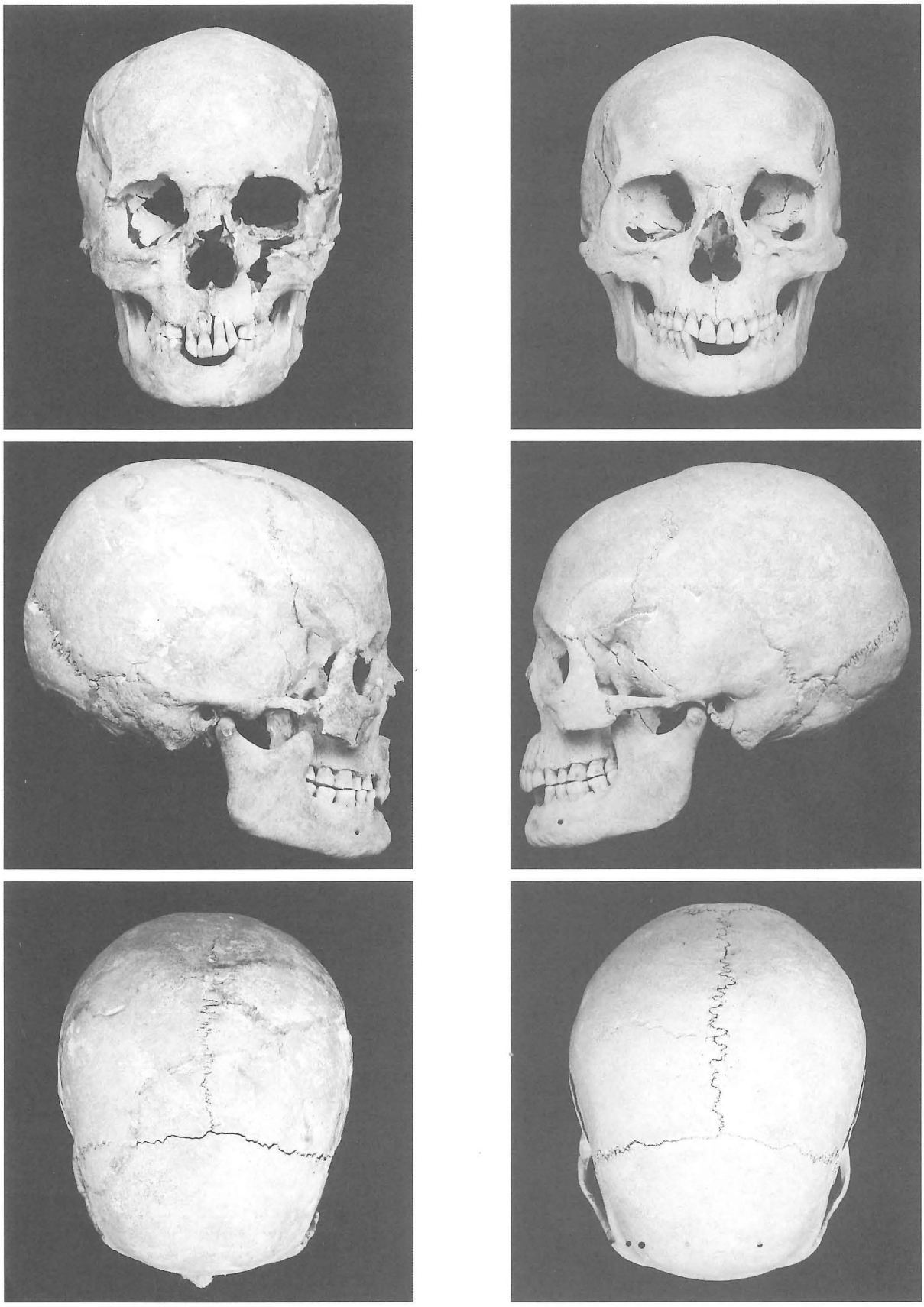
| | 1号土壙墓 女性 | 2号土壙墓 女性 |
|---|---|---|
| 上腕骨（右） | 145.3 | — |
| 橈骨（右） | 151.1 | 152.1 |
| （左） | 150.4 | — |
| 大腿骨（右） | 147.7 | — |
| 脛骨（右） | 150.7 | — |
| （左） | 150.7 | — |

**第19表　頭蓋非計測的形質の出現状態**

| 項　　目 | 1号土壙墓 女性 | | 2号土壙墓 女性 | | 3号土壙墓 女性 | | 6号支石墓 男性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 | 右 | 左 |
| 前頭縫合 | — | | — | | ／ | | ／ | |
| 眼窩上神経溝 | — | — | — | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 眼窩上孔 | — | — | — | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| ラムダ小骨 | — | | — | | — | | — | |
| 横後頭縫合残存（10mm<） | — | — | ＋ | ＋ | — | ＋ | ／ | ／ |
| アステリオン小骨 | — | ＋ | — | — | — | — | ／ | ／ |
| 後頭乳突縫合小骨 | — | — | — | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 頭頂切痕骨 | — | — | — | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 顆管開存 | ／ | ／ | ＋。 | ＋ | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 前顆結節 | ／ | ／ | ／ | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 旁顆突起 | ／ | ／ | — | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 舌下神経管二分 | ／ | ／ | — | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 鼓室骨裂孔 | — | — | — | — | — | — | ／ | ＋ |
| 卵円孔形成不全 | — | — | — | ／ | ／ | ／ | — | — |
| ベサリウス孔 | ／ | ／ | — | — | ／ | ／ | — | ／ |
| 翼棘孔 | — | — | — | — | ／ | ／ | ＋ | ／ |
| 内側口蓋管 | — | ／ | — | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 頬骨後裂（5mm<） | ／ | ／ | — | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 床状突起間骨橋 | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 顎舌骨筋神経管 | — | — | — | ＋ | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 頸静脈孔二分 | ／ | ／ | — | — | ／ | ／ | ／ | ／ |
| 左行矢状洞溝 | — | | — | | — | | ／ | |

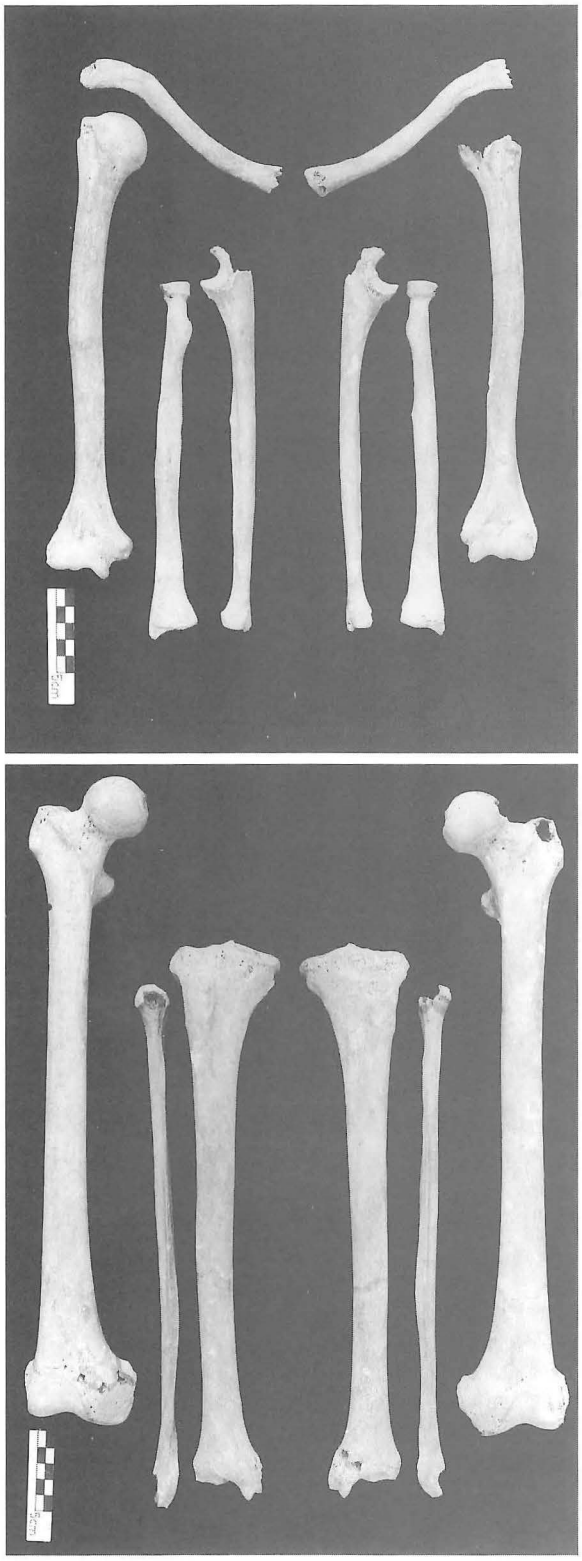
＋：有　—：無　／：観察不可

# 図　　版

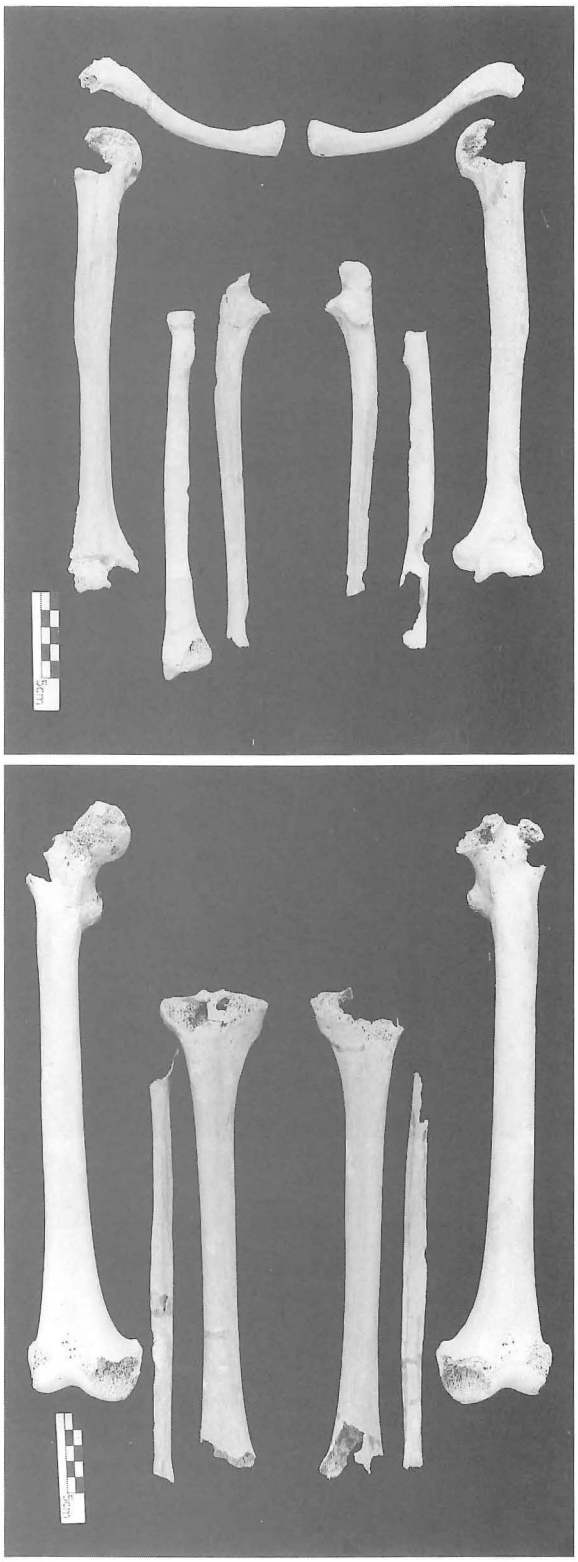


1号土壙墓人骨（女性，熟年）　　2号土壙墓人骨（女性，壮年）

図版1



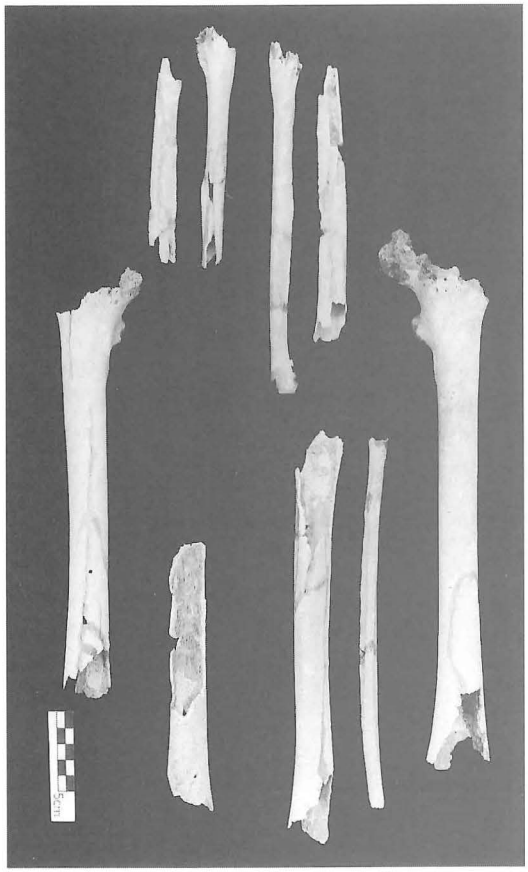
1号土壙墓人骨（女性，熟年）



2号土壙墓人骨（女性，壮年）

図版 2

3 号土壙墓人骨（女性，壮年）



4 号支石墓人骨（女性，壮年）

5 号支石墓人骨（女性，壮年）

図版 3

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | うくまつばらいせき |
| 書名 | 宇久松原遺跡 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 宇久町文化財調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第4集 |
| 編著者名 | 川道　寛 |
| 編集機関 | 宇久町教育委員会 |
| 所在地 | 〒857-49　長崎県北松浦郡宇久町平郷2581番地5　TEL (0959) 57-3111 |
| 発行年月日 | 西暦　1997年　3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>m² | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 宇久松原遺跡（うくまつばらいせき） | 長崎県（ながさきけん）<br>北松浦郡（きたまつうらぐん）<br>宇久町（うくまち）<br>平郷（ひらごう） | 42384 | 23 | 33°<br>15'<br>37" | 129°<br>7'<br>56" | 19960715<br>～<br>19960809 | 200m² | 住宅建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 宇久松原遺跡 | 墓地 | 縄文時代晩期 | 支石墓<br>土壙墓 | ・縄文時代晩期丹塗磨研大形壺<br>・半島系供献小壺<br>・各種小形供献土器<br>・オオツタノハ製貝輪 | 縄文時代晩期の人骨2体<br>支石墓に埋葬された人骨3体<br>その他2体 |

宇久町文化財調査報告書第４集

宇久松原遺跡

1997年３月31日

発　行　宇久町教育委員会
長崎県北松浦郡宇久町平郷2581番地５
TEL0959-57-3111

印　刷　㈱昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007-2
TEL0957-22-6000